

定有堂余話(ライン引き痕跡定本)

30 28 26 24 22 20 18 16 14 2 11 9 6

(30)

身の丈の本屋 本屋ごっこ 28 27 26) 25) (24)

フラジャイル

遅れて読む

特異点

店頭雑話

ミニコミ好き

減速する本屋暮らし

定有堂はどんな本屋ですか?

彼らがいなくなる前に 木を見る、森を見る 柳父章さんのこと

9 (8)

カフェ「ドロップ」での一夜

リングワンダリング

(6) (5)

けものみち 天球の音楽 柴田信さんのこと ブック・ビオトープ オースターの「幽霊たち 定有堂のウォルデン池

(7)

名乗り

この先の本屋 普通の本屋 探求のかたち

(32)

定有堂のレイヤー 本屋の青空 果敢な本屋たち

アブダクション

本屋的人間そしてオブセッション

閉じる物語 サウンドバイト 退歩推手

物語のない本屋

(19) (18) シンクロニシティ

(21) 20

(17) (16)残されない探検記 石橋毅史さんに学ぶ 本を読む夢

78 76 74 72 70 68 66 64 62 60 58 56 54 52 50 48 46 44 42 40 38 36

56 55 54 53 52 51 心模様 本が大事 本屋トーク(ハイレゾリューション) 本のある暮らし、ただし本屋 本屋トーク 本屋トーク 本屋読書 コロナ・ディスタンスな日々 本の街 読書の学校 読書の彼方に 見えない世界を見えるように 初発衝動 昨日までの世界 具体と抽象 本屋の圏域 本屋と「読む会」

柳父章さんと 「語感 **諅けなかった話** 共通理解」のあり場所

定有堂の「推し本」

69 68 67 66 65 64 63 62 61 60 59 このもの性 閉塞と覚醒 読書のバイアス これまでの本屋、これからの本屋 思いの手放し 読書思考圏域 記憶を折り畳む 権力を取らずに世界を変える 三砂慶明さんの『千年の読書』 何度でもやり直す 二つの書評

定有堂のウォルデン池 (音信不通) ① |

さな流れを袋川という。めにある。店前の往来を若桜街道といい、十字に交わる小めにある。店前の往来を若桜街道といい、十字に交わる小ある。駅から約七百メートル。若桜橋を渡ってすぐの北詰定有堂書店は、鳥取駅と県庁をむすぶ商店街の中ほどに

には手入れの行き届いた小道がのびる。 る。桜は北側にのみ連なり、対岸にはみられない。桜の下

袋川は蛇行しながらニキロほど土手に桜並木をつづけ

のも、北の土手の上だけ。本屋は北側、この小道側にあるので、ときおりたたずむ

最近になって橋を中心とした袋川に興味がわいてきた。

がまばらになり、道というよりは造形物、とその個性に気もしれない。橋が道路の一部と思われていたのが、人通り橋のにぎわいが少なくなってきたことも関わりがあるか

適切な言葉をしらないが、その徳永医師が、桜の満開の夜地域の人にとっては身近に大切な人なので、そういう他に最初のきっかけは、 町医者というには著名すぎるけど、がつきはじめたせいだ。

みない。座敷わらしのような存在だ。守護神のひとりで 4

かれ黙ってウナギを食べるくらいだ。いるけどあまり姿を

に、本屋に駈け込んできたことがあった。

「奈良さん、ちょっとおいで」と、入り口のドアから顔

た。けど」と言ったけど、お客も途絶えていたし、ついて行っけど」と言ったけど、お客も途絶えていたし、ついて行っをのぞかせ、私に手招きする。「一人で店番してるんです

ですね」確かに鏡のように川面に桜がみえる。らし出し、それが水面に映ってるでしょう」「あ、ほんと、ですか、もう暗いですけど」。「ぼんぼりの灯りが桜を照橋の上は誰もいなかった。「ほら、川面を見て」「なん

と誘われ、急いだ。「で、ずっと、こっち、反対の岸の道路に行ってみよう」

そのものに熱心に参加するわけではない。年納めの会に招 という名で知られる。この人がいないといろんなサークルがある。案内の掲示や会員への毎月の案内ハガキを 作成してくれる、本屋の常連の人がいる。ドラメリアさん という名で知られる。この人がいないといろんなサークルがある。案内の掲示や会員への毎月の案内ハガキを が回らないのだが、案内を出したりはするのだが、読書会 そのものに熱心に参加するわけではない。年納めの会に招

ぱい。猫が好きな人のための本屋なのだ。猫が好きな人は 本が好き、と決めつけて久しい。 これを「池」と呼んではいけないのだろうか。私は水の 池の周囲が好きなのだ。

閉じられたようにみえる。

る。左に若桜橋、右は窓枠で視界が切れる。川の左右が5-

るが、…いる。ネコである。本や雑誌の特集、置物がいっ ある。一人というと他にも神がいるのか、ということにな

の生活者のベーグルが買えなかった」と。私はこのベーグ いている。かなりイライラしているみたいだ。「また、森 このドラメリアさんが、土曜の昼過ぎに来て、よくぼや

本屋に立ち寄ってくれる。あるオジサンぽい人が、「奈良 でね」と語りかけることもあった。男女、年齢も問わない から出張でときどきくるんだけど、あのベーグルが楽しみ ルというのがいまひとつイメージできなかった。 川のほとりにシティホテルがあって、宿泊客の人がよく

ェなのだ。「ベーグル!」と陳列ケースをみたが、売り切 勇気を出して、「森の生活者」に行った。ベーグルカフ のか、ベーグルは?

れだった。窓際のカウンターに座った。本屋の入口が正面 に見えた。正面にみるから正面なのだと後で気づいたが、

ド」が気に入っている) じつに人の出入りがよく見える。「クラシック」という名 ているのだが、カウンターからはすぐ下にあるように感じ のコーヒーを注文した。おいしかった。(現在は「ワイル 「森の生活者」 は二階にある。 袋川が道をはさんで流れ

する。

置いてある「ヘンリー・ソロー」の本がよく売れる。自分 本屋にはいくつかのコーナーがあるが、奥にさりげなく

ある。ソローとベーグルカフェ「森の生活者」は関係ある れる。前者は副題に「森の生活者ソローの叡智」と記して 置いている。 『孤独の愉しみ方』 や 『森の生活』 がよく売 のだろうか? では、生き方のオルタナティブというものの「窓」として

川の一角は、「池」だと思った。一つのアイデア(思いつ ないもう一つのもの、という立ち位置は、定有堂の核とな るものだ。すき間に咲く、ということでもある。 池が好きだ、といったけど、「森の生活者」から見た袋 オルタナティブ、世界の中心に隔たりをおいた、そうで

き)がこころに点火する。そういう瞬間が好きだ。この思 いつきは、ソローが過ごした「ウォルデン池」へと飛び火

えない? と何人かに問いかけてみた。みんな「見えない」 二階の窓際のカウンターから見た袋川の一角が池に見

とつれない。でも、ちょっと待って、考えてみる、と『森

張先の米子のホテルで読んでみると言ってくれた。もし、 たら、何かがはじまるかもしれない。彼も、この「池」の 数日後、彼が、「見える、ウォルデン池だ」と応えてくれ 側に職場がある人間だ。 の生活』を買っていってくれた人がいる。結川さんだ。出

低差が工夫されていた、と聞く。 こされた土手だ。言い伝えによると、武家の時代、北側の 土手を高く、大雨のときは、南側に水があふれるように高 た。橋の下に流れる袋川は、北側中心に偏った保存のほど 長い間、若桜橋の北詰を根拠地にし、街の中に生きてき

る。 対から見ると、少し森の「も」の字が感じられる。 ない。「見立て」は、でも心象風景を一変させることもあ いた。桜のトンネルという風情をよろこんでいた。でも反 思いつきが、こころに火を点す。現実は何ももう変わら いままでは、こちら側で並木道のたたずまいを楽しんで

2016.07.25

『ウォールデン森の生活上下』 小学館文庫 2016 『孤独の愉しみ方』 イースト・プレス 2010

オースターの「幽霊たち

(音信不通 ②)



く読んだ。解説の三浦雅士が「なにか暗く深い奥行きがあ 啓三さん が教えてくれた。啓三さんは若いときからアメ が、ポール・オースターの小説『幽霊たち』にあるよ、と る」と本質を言い当てている。同様の「奥行」が啓三さん な存在だ。『幽霊たち』は新潮文庫に入っていて、さっそ 者なのだ。独特のことば感覚があり、私にはとても魅力的 リカで暮らし、アメリカの女性と一緒になった。多言語話 という発見だ。しかしこれは、「自由」の別の言い方でも ーが言いたいことは、「我々は我々の真の場所にはいない」 のことばにもいつも感じられる。ここでポール・オースタ ソローの『ウォルデン』(「森の生活」)を読むシーン

りで暮らそうなんて、何だってそんなことをしたいと思っ オースターのソローの読みは面白い。「森の中で一人き

うんだ? 」わたしも読みながら少し退屈だった。でもペ ージを重ねるとふと気づいた。オースターも同じことをい っくり読むことなのだ」 っている。「彼(ブルー)は一挙に理解する。こいつはゆ

たち』にはあまり水の気配を感じなかった。ソローはいう、 った主人公のブルーはかわいそうだ。自然と出合うために のないものだと。都会の中で時間に追われ、一人きりにな 一人きりになるとわかる、地面は水に浮かんでいるたより ゆっくり読む。一日数ページだけ。そういえば、『幽霊

後どれだけの孤独が必要なのだろう。

結川真悟さんは、『ともに創る! まちの新しい未来』

でにもう返せない状態になっているが仕方がない。定有堂 は熱中するとエンピツで線を引かないと本が読めない。す 後』に考える」というブックレットシリーズの一冊だ。私 (早稲田大学出版部)という本を貸してくれた。「『震災

トルに『多様性とレジリエンス』とあった。この言葉を自 ドラメリアさんが編集製作してまとめている。今年のタイ でも小冊子を作っている。HPに連載して下さっている 「読む会」選書係の岩田直樹さんの文章を、一年ごとに、

春からこの「レジリエンス」をテーマとして考えつづけて おるのに驚いた。自分では「七転び八起き」と解釈した。 分の中心にすえると、最近考えていることに一本背骨がと

歩前へ進む。

る)には、たくさん学ぶものがあった。レジリエンスにつ 結川さんのブックレット(彼も学生として参加してい

と思った。 られる。易の思想で語られる龍の昇降の往来と同じ認識だ だ。いまつらくても、この場がいずれ変化するのなら耐え といった。生きる場を「循環サイクル」つまり「栄枯盛衰 興味があるのだ。気づいて結川さんは「陰陽」いいですね、 のくり返しと知ることが重要なのだ。ブックレットの指摘 クがぶら下げてある。身体操法としての太極のアイコンに いての理解とそこからの出口としての対処法だ。 わたしの常用しているリュックには故あって陰陽マー

け入れる。「世のなかわからないことだらけだね」で、一 ヴ・アプローチ』(野口裕二・勁草書房)を典拠とした、 思い浮かべればいいが、しかしここでは、複数の「語り」 彼を襲う」。ナラティヴの考え方は、芥川の「藪の中」を 閉まるように、一瞬のうちに、取り返しのつかない認識が 語」に閉じ込められていく悲しい男だ。「ドアがばたんと 人とのかかわり方だ。オースターのブルーも、いわば「物 の中で、唯一の物語を求めない。物語の併存をそのまま受 もう一つは、やはりブックレットの教える『ナラティ

ジリエンス」というアイデアが、このようにしてするする と解きほぐされていくのを体感した。結川さんとの出合い のおかげだ。 「学び」の根幹としての七転び八起きの糸口である「レ

活者」の片隅で、クルミのベーグルを食べながらわたしが 流される私を橋の上の私が見る。そして、それを「森の生 憶の改変が多く真実はたぶんそうではない……。ともあれ されてくる。橋上の男は、それが若い日の自分だと気づく。 若くはない一人の男が橋上にいる。大雨の後だろうか、河 呼ぶ。自分が自分であるゆえんだ。わたしのオブセッショ 見ている。その三人目の私にナラティヴ・アプローチがあ は急流になっている。ふと見ると若い男が青ざめた顔で流 フスキーの詩の一節が浮かんだ。たぶんネヴァ河だ。もう 八月にめずらしい曇天の昼下がりだった。昔読んだマヤコ に面したカウンター席にいたとき、左に若桜橋が見えた。 ンはこんな形をしている。「森の生活者」のウォルデン池 「おお…」と心に叫ぶ。それからどうしたのだろう? 記 人は固定観念をもって生きる。それをオブセッションと

られる。「物語」の言葉は、既知強制をする。オブセッシ ョンのなかにあるとき、言葉と現実がそごをきたす場合、 オースターのブルーのように、人は「物語」に閉じ込め

> この球体はドアをひらく。そう思いながら「ワイルド」の がない。しかし「物語」を物語る「物語」がここにあれば、 知ってる以上知ってる限り知りえない。現実に出合うこと きまって「言葉」が正しい。まだ行われていないだけだ。 そそがれたコーヒーカップを口にはこぶ。

が、じつは「秘密基地」の別の名乗りだったのだ。 と考えていた。しかし、ふと気づいた。すでに語りはじめ の下にぶら下がっている小文字、ビオトープという言葉 ていることに。この小冊子の「音信不通」というタイトル いずれこの秘密基地ということばで何かを語ろうと漠然 んは、「秘密基地」の入口だ、と笑った。じつはわたしも、 くぐれない、二階へのにじり口を通り抜けながら、結川さ 定有堂の店内の死角に突如あらわれる、中腰でなければ

2016.8.22

沼田慎一他(編著) ポール・オースター 『幽霊たち 改版』 新潮文庫 2013 『ともに創る! まちの新しい未来』

早稲田大学出版部 2016

野口裕二 『ナラティヴ・アプローチ』勁草書房 2009

ブック・ビオトープ(音信不通 ③

のでなく、共生的に影響を与え合っているというところが意味する。ごく小規模の生態系だ。生き物が単体で暮らすのことばを含む。主に生き物の暮らしやすい小さな空間をビオトープは、バイオ(生命)とトポス(場所)の二つ

らだ。放っておくといずれ消滅しかねない。すいフラジャイルな限界性が、そこに顕著に感じられるか単に生態系といわず、ビオトープというのは、失われや

べる。
きということを、そのような個性の多様性として思い浮かがみられる。弱さの中にこそ個性の多様性がある。本が好がみられる。弱さの中にこそ個性の多様性がある。本が好在でないきらいがある。強さは画一的で虚弱さには多様性値性的な存在は、個性的であるゆえに、生きることに自

れた中に、「メディア・ビオトープ」という概念があった。悟さんが、国会図書館からたくさんの資料を持ち帰ってくビオトープは生き物の生態についての用語だが、結川真

ながり合う小さなメディアに刺激を受けるのだろう。

結川さんは大きな公共のメディアで仕事されるので、つ9-

の集まりの中心には「本」という光源がある。 だ。「意思」と「見立て」の二つが必要だ。ブッキッシュだ。「意思」と「見立て」の二つが必要だ。ブッキッシュ思をもつ三人がいつづければ持続する。それが一本の木思を切な始まりだ。人の集まりは、とにかくやるという意

ビオトープにおいて、そこに一本の木があるということ

る空間だ。実際の生活の場所は雑多にすぎる。自分を見失見立てだ。秘密基地は自分の好きなものだけにとり囲まれ本のビオトープを「秘密基地」と呼んでみよう。 これも

ってしまう。だから、ブッキッシュな人間はときどき秘密

基地にこもり、ここから出撃する必要がある。たとえば、 争うことがない世界、それがユートピアだといった。…不

可能ごとだと言ったのだろうか。

空き地に土管がころがりそこに個々の秘密基地があり、と しめき合う。閉店後の深夜、書物たちはののしり合ってい 個人の書棚と異なり、本屋の棚には多種多様の正義がひ

何一つない。 か。多孔性の豊かさのおかげで、ここでは実人生の交錯が いの声を耳にしたことがない。ビオトープだからだろう

本屋の青空、とよんでみる。ブッキッシュのトポスだ。 けがえのない大切なものとして本屋空間に息づく。それを ブック・ビオトープというフラジャイルな生態系が、か

2016. 9. 29

き間とすき間が、でもつながりあっていた、ということだ。 きおり顔をだして遊ぶ、という風景はもうないだろうか。 日が暮れればこどもたちは家に帰る。それが秘密基地なの そんな多孔性もビオトープの重要な要素だ。落ち込んだす ブッキッシュという習性も、この土管のようなものだ。 るのだろうか。 そういえば定有堂の「読む会」では、一度もののしり合

空とよんだこともある。ブッキッシュな言い方だが、天空 ければ本屋空間がぽっかりと広がる。この光源を本屋の青 ようなものだ。暮れても帰らず、この孔(アナ)を突き抜 店内奥に面陳しているのだが、手にした人は二人だけだっ て、天球の摂理が音楽という『星界の音楽』(工作舎)を の音楽が鳴り響いてはいないだろうか。そんな話をしたく

だ。本にとりつかれるという行為も日常のなかの「孔」の

かつてユートピアについて論じ合っていた頃があった。宮 「買うに追いつく読書なし」(2号)の浜田浩之さんと、 の女性の音楽家だ。

た。定有堂教室「シネクラブ」の講師だった福野真司さん

(もともとそれが専攻)と、旅先で立ち寄った元税関職員

うか。浜田さんは、皆が自分の理想を主張し合い、しかも 沢賢治の「ポラーノの広場」をテーマにしていたころだろ

ジョスリン・ゴドウィン 『星界の音楽』 工作舎 水越伸 『メディア・ビオトープ』 紀伊國屋書店 1990

(音信不通 ④)

聞いたがいいよといわれたことは、迷いなく足を運んで1-

柴田信さんのこと

誌でのつながりがあった。
学生の頃に、大学横断的に仲間が集まり作っていた総合雑いる、飯澤文夫さんが電話で教えてくれた。飯澤さんとは、んと、公開講座「本の街・神保町を考える」に取り組んで十月十二日の夕方、柴田信さんの訃報が届いた。柴田さ

有堂のことも紹介してくださった人だ。いた。石橋さんは『本屋は死なない』新潮社の著者で、定同じ時間に、携帯に石橋毅史さんが連絡してくださって

と書いてくださっている。いつも柴田さんのほうを向いて中で、石橋さんは、わたしのことを柴田さんの弟子の一人、『口笛を吹きながら本を売る』を上梓している。この本の石橋さんは、晶文社から、柴田さんの本屋人生を追った

仕事をしている、という意味だ。

賢一さんが、案内をくださったのと、そのころ私淑してい出版祝賀会に参加した。地方小・出版流通センターの川上は『ヨキミセサカエル』日本エディタースクール出版部の一九九一年、柴田さんと一面識もなかったのに、わたし

よ、と助言してくださったからだ。当時、見たがいいよ、

た井狩春男さんが、この会だけはぜひ参加したほうがいい

だろう。 した「シルバー書店」の構想であったように思うが、どうのだろう。還暦を過ぎた書店員の再雇用で、人件費を浮かのだろう。還暦を過ぎた書店員の再雇用で、人件費を浮か柴田さんはいつ頃から「普通の本屋」と言い出していた

で語っておき「物語のある本屋」として自分のことばで語ったしの回答だった。往来ではじまる人との触れ合いの物あった「普通の本屋」に答えることが主眼だった。普通のあった「普通の本屋」に答えることが主眼だった。普通のあった「普通の本屋」に答えることが主眼だった。普通のあった「普通の本屋」に答えることが主眼だった。普通のあった「普通の本屋」に答えることが主眼だった。普通のあった「普通の本屋」に答えることが主眼だった。普通のあった「一般では、テーマとは別に、自分ではかつての宿題でも、鳥取市の資露港の民宿でおった。川上さんと永井、場口では、

わっている」って何だったんだろう。「普通の本屋」とこ終わってますから…」とお伝え下さいと告げていた。「終んは、いつも一緒に、本屋を考える集いに声をかけてくだんは、いつも一緒に、本屋を考える集いに声をかけてくだことはない。ただ、柴田さんとその盟友である永井伸和さことはない。ただ、柴田さんとその盟友である永井伸和さ

の二つが、いまも気にかかる。

ことを楽しむこと。もう一つは商売としての書店。商売の

に、では、ことでは、これに、これでは、いいでは、いいでは、いいでは、これで、学校からだと高田馬場が近いから、芳林堂に頼んだるように頼んだ。柴田さんは彼に会ってくれた。「いい青間際、東京へ出たら本屋でバイトをしたいと告げた。わた間際、東京へ出たら本屋でバイトをしたいと告げた。わた電標

れが評価の核心なのだ。

年だ。学校からだと高田馬場が近いから、芳林堂に頼んだ年だ。学校からだと高田馬場が近いから、芳林堂に頼んだで支える強い仕組みが裏側にある、ということは、それで表向きは口笛を吹きながら売ろう。ということは、それのよ」と柴田さんは結果を教えてくれた。確かに石橋さんのよ」と柴田さんは結果を教えてくれた。確かに石橋さんのよ」と柴田さんは結果を教えてくれた。確かに石橋さんのよ」と柴田さんは結果を教えてくれた。確かに石橋さんのよ」と柴田さんは結果を教えてくれた。確かに石橋さんのよ」と柴田さんは結果を教えてくれた。確かに石橋さんのようというに、子校からだと高田馬場が近いから、芳林堂に頼んだちんは語っている。 うまいタイトルだと気がついた。

柴田さんは二つのことを言っている。一つは本屋である

目的は大きくなること、小売書店が企業として自立するこれ以外はまあどうでもいいことだった。二つ目は目黒恭文と。最初の単著『ヨキミセサカエル』は、厳しく後者を説と。最初の単著『ヨキミセサカエル』は、厳しく後者を説あれほど敬意をはらうのかわからなかった。井狩さんがあれほど敬意をはらうのかわからなかった。井狩さんがあれほど敬意をはらうのかわからなかった。井狩さんがあれほど敬意をはらうのかわからなかった。井狩さんやわあれほど敬意をはらうのかわからなかった。井狩さんやわまれば外ばまあどうでもいいことだった。二つ目は目黒恭文と、山外はまあどうでもいいことだった。二つ目は目黒恭文と、山外はまると、小売書店が企業として自立すること。

きなのだ」と聞き手はぼやく。 おりなかった」「小さな、具体的な場面を話すのが好い数年通った。「ところが柴田さんは、なかなか本題に入る定できない。その公案の答えを聞き出すために石橋さんで定できない。その公案の答えを聞き出すために石橋さん

堂の田中淳一郎さんが実現されていると思う。

たのだと思う。じつは「解」はない、と知りながら……。と感じた人間に、柴田さんは暖かいまなざしを向けてくれ通の本屋」という夢をみる。この夢に呪縛されているな、う。「普通の本屋」という言葉に呪縛された人のみが、「普う。「普通の本屋」という言葉に呪縛された人のみが、「普

「本屋の守護神」と12-

石橋さんのことを人に語るとき、

立から救い、その夢はけして一人のものではない、とつぶーの支えでつづく連載だ。石橋さんの眼が、本屋の夢を孤短命な夢を、石橋さんは丹念に記録しつづけている。奇跡短いに個別的過ぎて、あぶくのようなものだ。本筋の大きまりに個別的過ぎて、あぶくのようなものだ。本筋の大きまりに個別的過ぎて、あぶくのようなものだ。本筋の大きまりに個別的過ぎて、あぶくのようなものだ。本筋の大きまりに個別的過ぎて、あぶくのようなものだ。本筋の大きまりに個別的過ぎて、あぶくのようなものだ。本筋の大きまりに個別的過ぎて、あぶくのようなものではない、とつぶんのではない、その夢など、あいうことばをわたしは使う。小さな本屋が抱く夢など、あいうことばをわたしは使う。小さな本屋が抱く夢など、あいうことばをわたしは使う。小さな本屋が抱く夢など、あ

ね」と、柴田さんは内心おもしろがっていたのかもしれなおうとしているもの、それが普通の本屋、ということだよか? 」と問う。「君がいま見ているもの、これから出合きこんが何度も何度も、「で、普通の本屋」なのだ。 柴田さんが、自分の本屋人生を石橋さんに語り残した。 石柴田さんが(自分の本屋)なのだ。 柴田さんが、「い間・普通の本屋」は主語ではないのだ。 柴田さんが、「い

それはもうどうでもいいことだと思うようになったのかむ、そして企業として自立すること。やがて柴田さんは、柴田さんの見てきた二つの現実、本屋であることを楽し

皆んなで楽しく。本来、二つの課題の果てにあるものが、

「みんなで楽しく」だったのだから。そしていままさに楽

もしれない。いまここを楽しく生きることが大事、それも

離の彼方に立ったとき、柴田さんの問題は「終わった」のんと深い交友を楽しんできたのだと思う。二つの現実の乖して私の畏友飯澤文夫さんは、この境地に至った柴田さ

しい。公開講座「本の街・神保町を考える」の盟友、そ1-

だと思う。

まった。 学田さんは、いつも現在に生きていたのだ。若い仲間と 学田さんは、いつも現在に生きていたのだ。若い仲間と 学田さんは、いつも現在に生きていたのだ。若い仲間と 学田さんは、いつも現在に生きていたのではないだ が見続けたはるかな「普通の本屋」というものの生成の現が見続けたはるかな「普通の本屋」というものの生成の現 が見続けたはるかな「普通の本屋」というものの生成の現 が見続けたはるかな「普通の本屋」というものの生成の現 が見続けたはるかな「普通の本屋」というものではないだ が見続けたはるかな「普通の本屋」というものではないだ が見続けたはるかな「普通の本屋」というものと成の見いがわきあが は、遠い昔のことだったのかもしれない。石橋さんの『口 場は、遠い昔のことだったのかもしれない。石橋さんの『口 が見続けたはるかな「普通の本屋」というものといがわきあが は、遠い昔のことだったのかもしれない。石橋さんの『口 場は、遠い昔のことだったのかもしれない。石橋さんの『口 が見続けたはるかな「普通の本屋」というものといがわきあが は、遠い昔のことだったのかもしれない。石橋さんの『口 場は、遠い昔のことだったのかもしれない。石橋さんの『口 場は、遠い昔のことだったのかもしれない。石橋さんの『口 場は、遠い昔のことだったのかもしれない。石橋さんの『口 は、遠い昔のことだったのかもしれない。石橋さんの『口 は、遠い昔のことだったのかもしれない。石橋さんの『口 は、遠い昔のことだったのかもしれない。石橋さんの『口 は、遠い昔のことだったのかもしれない。石橋さんの『口 は、遠い時のことだったのかもしれない。 ではないだ

(参考)

柴田信 『ヨキミセサカエル』 日本エディタースクール出版部石橋毅史 『口笛を吹きながら本を売る』 晶文社 2015 石橋毅史 『「本屋」は死なない』 新潮社 2011

_

公良敏行 田中淳一郎 『街の本屋はねむらない』狩春男 『返品のない月曜日』 筑摩書房 1985

アルメディア 997

(音信不通⑤

オリアン・ハーブが好きだし、フルートも演奏する。ソロ

天球の音楽

忘れてきたものだ。麻野さんの取り組みは本格的で、ゴー年ぶりだろうと驚いた。こんな心遣いはいつか遠くに置きい」と書いたのを目にして、こんなことばを聞くのは何十四号に、麻野嘉史さんが、「見える世界がすべてではな

な気づきなのだろうか。

を開始している。 ア語教師の山本千津子さんが、深く評価され友人にも紹介 ゴリの作品「ヴィイ」を端緒に研究をまとめている。ロシ

だけの人になりたいと思いますか? 」と問う。 ところで、ヘンリー・ソローは、「あなたは、本を読む

の生活』今泉吉晴訳・小学館文庫)
ることを忘れる恐れがあります》(『ウォールデン 森が、隠喩によらず、じかに私たちに語りかける言葉であが、隠喩によらず、じかに私たちに語りかける言葉であ

『ウォールデン』に「音」という一章がある。共振楽器エーソローは、歴史よりも「目の前にある今」を大切にする。

ものの背後に、見えない秩序がかくされている。そのようピュタゴラスとともに始まる問いのようでもある。見える球の音楽」という。天球の音楽というのは美しい言葉だ。空との共振を感じとる。それこそが、「じかに私たちに語中は音楽以前の、「振動音」に耳をすます。自然、そして

の音楽というらしい。

いる。このことが、地上の秩序と関わっている。それを天球れなりに楽しいので、自らは良しとしている。こんな話を耳にした。宇宙はビッグバンで始まったので、まず爆発の耳にした。宇宙はビッグバンで始まったので、まず爆発のの音楽というらしい。「本を読むだけの人」なので、読の音楽というらしい。

ばしば用いるが、本当には、身の丈のことは、身の丈の14なんだろう。わたしは「身の丈」という言葉が好きで、しつ致する」「人間の小宇宙にとっては、地球中心論にもと一致する」「人間の小宇宙にとっては、地球中心論にもとっての中心に安んじて据えると、肉眼に見えることがらとべての中心に安んじて据えると、肉眼に見えることがらとべての中心に安んじて据えると、肉眼に見えることがらとではがある。

延長上で考えている限り、問題解決的には思考できない。 楽と共振することができる。 しかし、このような解決は、ソロー的な世界では必要ない。 「身の丈」に耳をすますことが大切だ。すると、天球の音 ースのハンカチに気をつけて」という。そしてときどきフ 巣を見つけると、「ルイーザ、妖精が落としていったレ が少女を育んでいく。ソローは散歩に連れ歩く。クモの15-

ラビアの夜の種族』は不思議な話で、そんな折、読了してないときは仕方がないので、小説を手にしてしまう。『ア中活字に触れていないと不安なので、読むものが見つからは好きではないし、小説に期待もしていない。ただ四六時は好きではないし

る。「死ぬときに音楽が聞こえるんだよ、それだろう」どめの他の本も手にしたが、その感動はよみがえらなかった。ただ『gift』の中の「ぼくは音楽を聞きながら死ぬ」しまった。とても魅惑的な話だった。著者の古川日出男さらいう短編に出合ってしまい気になった。著者の古川日出男さないときは仕方がないので、小説を手にしてしまう。『アないときは仕方がないので、小説を手にしてしまう。『ア

『ルイーザ・メイとソローさんのフルート』(BL出版)身の丈を超えず応じつづける「振動音」が、ここにもある。の音楽」が被験者に聞こえる、と述べる。身の丈の内で、うもそうらしい。側頭葉の一部を刺激すると、この「天球

いたものだ。ソローの暮らすウォルデン池の周辺の豊かさくに引っ越してきて交流をはじめる。その日々を絵本に描を書くルイーザが少女の頃、ソローの住むコンコードの近という本が鳥取県立図書館にあった。 長じて 『若草物語』

ルートを聴かせてくれる。ある三月の雪どけのはじまりのルートを聴かせてくれる。ある三月の雪を口ずさむ。ルイーザもつられて歌いだしたくなまりの歌を口ずさむ。ルイーザもつられて歌いだしたくなたのに、と心がさわぐ。と、とつぜん音楽のかわりに、ことばがあふれ出してきた。八歳のルイーザは、こうして詩とばがあふれ出してきた。八歳のルイーザは、こうして詩とばがあふれ出してきた。八歳のルイーザは、こうしている。自分もソローさんのようにフルートがふけたらよかった。日、コマドリが、がんばれ、というような調子で春のはじまりのルートを聴かせてくれる。ある三月の雪どけのはじまりのルートを聴かせてくれる。ある三月の雪どけのはじまりのよりである。

J-74ci)。 ごとが簡単になる。そこからつむぎ出される物語とたくさ 見えないものの方へと歩む。生活の単純化があり、もの

2016.11.30

ジョスリン・ゴドウィン 『星界の音楽』 工作舎 1990 ジョスリン・ゴドウィン 『星界の音楽』 エルート 『ロー・ジャー』 『ロー・ジャー・ジャー』 『ロー・ジャー』 『ロー・ジャー・ジャー』 『ロー・ジャー』 『ロー・ジャー』

けものみち

(音信不通

6

一つのもの)という性格かもしれない。してみれば、双方に共通するのはオルターナティブ(もうう。ビオトープとどんな関係があるのだろう。立ち位置と「けものみち」という言葉が気になるのだがなぜだろ

本道からはずれたものを、けものみちという。人の生活本道からはずれたものを、けものみちという。人の生活が、ありえたオルターナティブの可能性として、比喩としても用いられる。ソローの世界を借りると、村(公共のらんで公共の場ができるとき、とりこぼされていくものかある。そのとりこぼされたものにこだわるとき、「けもがある。そのとりこぼされたものにこだわるとき、「けもがある。そのとりこぼされたものにこだわるとき、「けもがある。そのとりこぼされたものにこだわるとき、「けもがある。そのとりこぼされたものを、けものみちという。人の生活がある。

ふり落とされるものを手放さない、という決意だ。
は、左右の路を選ぶことによって、取りこぼされるもの、
は、左右の路を選ぶことによって、取りこぼされるもの、
は、左右の路を選ぶことによって、取りこぼされるもの
に場といういい方は、でも、けものみちにふさわしくはな
な場といういい方は、でも、けものみちにふさわしくはな
な場といういか。左でも右でもなく「真っ直ぐ」往く。この仮構に「けか。左でも右でもなく「真っ直ぐ」往く。この仮構に「け

性の風景だ。逆にいえば、そのような多孔性の風景を本の性の風景だ。逆にいえば、そのような多孔性の風景を本のは結界のことだ。いくつかのことがらが重なり、支え合うは結界のことだ。いくつかのことがらが重なり、支え合うはとによって成立する場だ。この場にはたくさんの孔(アナ)が存在する。孔の出口はこの広場を共有している。しかし孔の内部の形や反対側の出口が公道に通じるものだとすは多様に異なる。反対側の出口が公道に通じるものだとすれば、こちらの孔(アナ)は、けものみちに扉を接している。オルターナティブ方向への出口なのだ。こんな二つのる。オルターナティブ方向への出口なのだ。こんな二つのる。オルターナティブ方向への出口なのだ。こんな二つのる。オルターナティブ方向への出口なのだ。こんな二つのる。オルターナティブ方向への出口なのだ。こんな二つのおりによっている。ビオトープという。ビオトープというのは、そういうことだと思う。本のビオトープという。ビオトープというのは、そういうことだと思う。本のビオトープという。ビオトープという。ビオトープという。ビオトープという。ビオトープという。ビオトープという。ビオトープという。ビオトープという。ビオトープという。ビオトープという。ビオトープといる。

ビオトープと呼んでみる。

右に分かれている。この分岐点でどのような選択をする

わたしは、けものみちのイメージをこう考える。道が左

ば進めるほど、孤独な了解にわけ入ってしまう。この阿吽阿吽の呼吸であって、説明はできない。だから路を進めれくということだからだ。左の路を選ぶか右の路を選ぶか、くということだからだ。左の路を選ぶか右の路を選ぶか、いうことだがらだ。左の路を選ぶか右の路を選ぶか、前書は深めれば深めるほど人を孤独にする。分かるということは、自分仕様にカスタマイズしている。分かるということは、自分仕様にカスタマイズしている。分かるほど、孤独な了解にわけ入ってしまう。この阿吽阿吽の呼吸であって、説明はできない。だからない

も比喩的に「けものみち」と名付けてみる。

ここで、本のビオトープとは、狭くいうことになってしまうが、本屋をめぐる話のことだ。一人ひとりの孔(アナ)まうが、本屋をめぐる話のことだ。一人ひとりの孔(アナ)まうが、本屋をめぐる話のことだ。一人ひとりの孔(アナ)まうが、本屋をめぐる話のことだ。一人ひとりの孔(アナ)まうが、本屋をめぐる話のことだ。一人ひとりの孔(アナ)まうが、本屋をめぐる話のことだ。一人ひとりの孔(アナ)まうが、本屋をめぐる話のことだ。一人ひとりの孔(アナ)まうが、本屋をめぐる話のことだ。一人ひとりの孔(アナ)まっが、大阪では、狭くいうことになってした。

題」が見える。一方本が好きな人が好き、には「きっかけ」中プの孔から顔を覗かせれば、読書のオルターナティブに出合う。例えていえば、本が好きだというところには、「主出合う。例えていえば、本が好きだというところには、「主出合う。例えていえば、本が好きな人が好き、には「きっかけ」をはない。朝に道を聞かば夕べに死すとも可なりと古人は武書を深めれば孤独も深まる。と述べた。別に悪いこと読書を深めれば孤独も深まる。と述べた。別に悪いこと

(参考)

ソロー

『市民の反抗』

岩波文庫

1997

葉になるだろうか。 係性のことだ。人と人とのことでいえば「縁」という言 'の多様性がある。きっかけというのは、何かと何かの関1'

人にひきつけて語れば、「けものみち」とは「人の縁」の展開だ。路の入口を同じくしても、人が必ずしも同じ出の展開だ。路の入口を同じくしても、人が必ずしも同じ出の展開だ。路の入口を同じくしても、人が必ずしも同じ出が好きという阿吽を重視する人たちを「本屋的人間」と呼ができという阿吽を重視する人たちを「本屋的人間」とは「んでみる。けものみちに一並びする人生のオルターナティんでみる。けものみちに一並びする人生のオルターナティンな何事かの物語だ。

2016. 12. 31

(音信不通

名乗り

ことがあるのだろうか。 音信を寄せていただいたりして、音信不通という名のりの 不思議に想いを馳せている。「名のり」が人を呼ぶという 小冊子に「音信不通」と名づけたのだが、不通のなかに

ける。いろんな反応を知る。狸穴千枝さんは、それなら『猟 人日記』(ツルガーネフ)の「歌うたい」だと教えてくれ 「名乗り」 について考えてるのだけど、と周囲に問いか

かつては、威勢がよくはきはきした性質のために近郷近在 あだ名されていた女地主のものだった。……「あだ名」と で「やかましや」(本名はついに知られずにしまった)と 「名乗り」、どう関わるのだろう。いずれにしろ、近郷近 冒頭、次のように始まる。……コロトフカという小村は、

な呼び名の曲者たちが居酒屋に寄り集まって歌うだけの パチクリ、抜作、ジーズドラの請負師、暴れ旦那、こん

在という狭い場所を必要とするのは間違いない。

……不意に野のどこか遠くの方で男の子のよく徹る声が 聞こえた。「アントロープカ!アントロープカーアーアー」 話だ。そして、居酒屋を出て、谷間の道にさしかかると、 ……野原の反対の方向から、まるで別世界からのように、

ーあーあーあい? 」 ここで二つの道具立てに出会う。 あだ名で語られる世

やっと聞きとれるくらいの返事が聞こえてきた。「なんだ

界。そして響きあう「名乗り」。

たしに声をかけたときだ。二階へのにじり口を聞かれただ るが…。 けど、仕事はしてるの? 」とたずねるでもなく、あいさ けだが、ふと心にとまるものがあって、「お若いようです じめてシネクラブに参加するために、レジカウンターでわ いであったかもしれない。委細は結川さんの連載にゆだね ていないといえばしていない、今にしてみれば、絶妙の問 つ代わりに話をふった。しているといえばしているし、し て起こそうとしている結川真悟さんとの出合いは、彼がは ビオトープを合言葉に互いに冊子メディアの本柱を立

からがある。世渡りする、その「世」が少し違い、その18-の重力」がある。渡世という言葉にもそのような独特のち 「名乗り」を併記しようと最近提案した。名乗りには「場 けものみちを共にするため、冊子の筆名のかたわらに

「世」が名乗りをおのずと準備する。

わたしの名乗りはなんだろう。まっすぐ言えば「本屋渡

世」だ。ここで、「屋」ということばにこだわる。「屋」

きな人はたくさんいる。でも本をもっぱらとして生きると 屋、はずかしがり屋、いばり屋、とか用いられる。本が好 というのは、~をもっぱらとする人、という意味だ。てれ したら、とても世界を狭くするにちがいない。狭いほうが

わり外の足場の徳俵に足を置ける本屋は得をしているの とも、ほんの少し本のことだけ。 世界を語る、本という土俵のうえで。この場合、ひとま

生きやすい、本の背に身を隠すという選択もある。話すこ

という。名乗りあっているのは、そんな世界だ。 かもしれない。この本の土俵をたとえて、本のビオトープ 見える世界がすべてではない、と教えてくれる人もい

る。この小さな声が聞こえてくるのは、世界が縮減に向か っていることとパラレルなのではないだろうか。この世界

道をたどるとやがて谷間に出る。ここも人気の少ない草原 ある。そこで、やはりあだ名でしか呼ばれない人たちが集 は本のビッグバンから始まり、ことばへと縮んでいく。そ して音信不通となる。 いあう。なんと狭い世界だ。扉を開けて、細々とつづく小 二つ名だけで、本当の名前も知られない女地主の世界が

> 的人間の生息する谷間の一角のことだ。 ツルゲーネフは、自分の領地に流刑となり、「猟人日記

名乗りして足を踏み入れる。本のビオトープとは、本屋・だ。そこに呼び合う声がこだまする。本のビオトープに、9

たのだろうか。 を記したという。けものみちに人を漁(すなど)る話だっ

ツルゲーネフ 『猟人日記』 岩波文庫 1958 (訳 佐々木彰)

リングワンダリング (音信不通 8

ことを語りたかったからだ。行き交うのは書物の消息だ。 不通」は、けものみち界隈の出来事を綴るものだ、という **六号に、「けものみち」について書いた。小冊子「音信**

れていた。わたしは本屋だから、珍しいアイデアを求めて と教えてくれた。古い本だが幸い鳥取県立図書館に所蔵さ めていく人たちの世界に触れ驚いた。 尾根伝いに散策して喜んでいるだけだが、一つのことを深 藤森栄一氏の「かもしかみち」についての考察があるよ、 飯澤文夫さんは、戸沢充則氏の『縄文人との対話』に、

ときに遭難する。そのありようを分析して輪形彷徨とい ンダリング」という言葉を知った。ひとが山の中で迷い、 山の中は不思議に満ちている。この本の中で「リングワ

描くように同一地点を徘徊する。 う。何らかの原因で方向感覚を失う。そして無意識に円を この話で興味を引くのは、意識が方向感覚を喪失したと

き、無意識のうちに利き脚が歩行に偏りを生じさせ、直進

しているつもりで、じつは曲線歩行をしているという事実 わたしの中にもリングワンダリングがあり、夢の中でよ

けでなく、ただ一冊一冊が意味ありげに存在を輝かせてい 場がある。棚は分類のように何かしらのまとまりを保つわ 地に建つ。入口の両側に棚が広がり、正面に番台ふうに帳 下るK字の交差点の右側の角に位置し、二等辺三角形の敷 くたどり着く本屋がある。古い町屋のような造りだ。坂を

界に親しくあることに安堵する。 だけだ。坂の上にはなにがあるのだろう。利き脚にかかる 重みは本への執着のせいだ。力の掛かりに導かれてこの世 くと坂を下ってまたこの場所に来た、という感慨が深まる とくにこころに留まる本や、できごともなく、ふと気づ

け加えた。古書店で学んだことは多い。 は研究者よりも博識な場合があるので心するようにと付 副読本を購入にいくこともあった。教師は、古書店の主人 古書になじみがうすく、不思議な彷徨に思えた。古書店に 十八の頃古書店が駅までのびる学舎に通っていた。まだ

た。彼は四年生で半ば引退状態で、別の活動に関わりた20-目くらいのとき、学生新聞の編集長だった人と親しくなっ 文学部だったので小説が好きだった。古書店通いの二年

たしに混入し、小説よりも批評に関心が移った。お社会科学。この先輩は法学部だったのだ。彼の知識がわかたしはいつも左側から入った。彼は右側。左は文学。右が常だった。古書店はだいたい中央に中立ちの棚があり、行動した。古本屋は通り道で、途中ふらりと寄り道するのいということで、私と接触することになった。よく一緒に

この先輩は政治面担当で、セクトの圧力に抗って一面をでお導を受けた。いつも酔っていた。時が篩にがけて評室で指導を受けた。いつも酔っていた。時が篩にがけて評ない。とくに秋山駿氏の本が高額だった。のちに寺小屋教ができた。南北社の文芸批評シリーズとの出合いは大きかができた。南北社の文芸批評シリーズとの出合いは大きかができた。南北社の文芸批評シリーズとの出合いは大きかができた。南北社の文芸批評シリーズとの出合いは大きかができた。

る。
本を造っていた。自社本の稲垣足穂の本を貰ったこともあ文学系出版社の編集者で、著名な詩人(夫人が外国人)の白紙で発行したこともあった。その後再会したら、なぜか白紙で発行したこともあった。その後再会したら、なぜか

しかしある日、目覚めると冒頭の三行がくっきり残っていという身震いに襲われていた。目覚めると記憶は消える。この一冊の本を持ち帰ることができれば、すべてが終わるしていたとき、よく夢の中でも、本を読んでいた。いつも、っかけを見失いがちだ。路に迷い、本を読むだけの生活をっかけを見失いがちだ。路に迷い、本を読むだけの生活をっかけを見失いがちだ。路に迷い、本を読むだけの生活をっかけを見失いがちだ。路に迷い、本を読むだけの生活を

秋山駿 藤森栄一戸沢充則

『内部の人間』 南北社

た。

を思い出した。 りングワンダリングという言葉を知って、そんなこと..

2017. 02. 22

『縄文人との対話』 名著出版 1987

カフェ「ドロップ」での一夜

(音信不通 9

に、小商いにはぬきがたい賞味期限がある。十年ともいわ細胞のつくり替えのようなものだ。個性を前面に出すゆえ本屋の仕事で欠かせないものに「リモデリング」がある。

Sさん、S・Mさんに、自分がそろそろメタモルフォーゼ三月のある日、夜七時半の閉店後、「ドロップ」で、M・

がなければ、輝きが消える。

れる。他人の個性の最良な部分に触れて、上書きする機会

図をもつ。その発問に向き合ってみた。問」を設けてくれた。発問は問うことによって人を導く意する時期に入った、と打ち明けた。二人はいくつかの「発Sさん、S・Mさんに、自分がそろそろメタモルフォーゼ

○本屋が嫌いになったことはありますか?

たところが「本屋」だったからです。 ないです。嫌なことをみんな拒否していたら、辿りつい

ませんし、本の遠心力の同心円上のなかでのみ人と出合学ぶことが好きです。でも本以外に学びの手立てを知り○ズバリ本のどういうところが好きですか?

○どんなお客さんが来ると嬉しいですか?

い、そして自分が生かされつづけています。

ることで、いつも店が自分以上に保たれます。人。未知の楽しさを本に見出している人の発見を取り入れ自分とは違う角度で関心を示す人。何か面白がっている

○出版不況がいわれていますが、若い人たちが新しい書店

ているからでしょう。そして残るものが残ります。店の個売れてます。そういうことのくり返しの中で、書店が輝いいからやるというのが情念です。書店特集の雑誌は一定数店は途絶えることがないと耳にします。後先考えずやりた店業としての出店はとうに頭打ちだけど、情念による出起業としての出店はとうに頭打ちだけど、情念による出

性よりも、人の個性が残るのではないでしょうか。 情念2

ョンです。う、ブリコラージュの力だと思います。そしてオブセッシう、ブリコラージュの力だと思います。そしてオブセッシから始まるのは、いまここにあるものでとりかかるとい

○定有堂の読書会「読む会」の、テキストを選ぶ基準はな

入口は、『伝えたいこと』の中で語られる、「大きな声

ここで会話されるようなあれこれを踏まえて、エッセイのんがいつもつながりのあるテキストを探されます。また、『本を読め』の3つのヒントです。選書係りの岩田直樹さでものをいう人間を信用するな』「自分のあたまで考えろ」

毎年四月にはドラメリアさんが「岩田冊子」と称して紙連載をHP上に、月ごと連載されてます。

○奈良さんが読書するときに、お気に入りの場所やシチュ

本に一年分をとりまとめます。店頭無料配布です。

きません。いつもいる「ここ」でない空間が必要なんでし、喫茶店やカフェです。あちこち居場所をかえないと落着エーションがあれば教えてください。

ょうね。何かを払い捨てないと集中できない気質のようで

○九十才のおばあちゃんにおすすめする本は?

す。本屋的人間のひとって、みなさんそうなんでは?

- 23 -

うか。 問題は本の内容ではなく活字の大きさではないでしょ

2017.3.27

.

(参考)

浜崎洋三 『伝えたいこと』 定有堂書店

1998

音信不通

物語のない本屋

10

く」という連載が継続中。社会派的な視点で出版をテーマ ご紹介くださって以来だ。現在、雑誌『潮』で「書店を歩 にレポートされている。地域の中で書店がどのように所を 『物語のある本屋』(アルメディア)で、定有堂のことを 四月八日、二十一年ぶりに長岡義幸さんとお会いした。

た。でも取材されることに、ためらいがあった。そうした 「物語」への関心が薄れてしまったからだ。 その連載の中で、定有堂も見てみたいという提案だっ

得ているかを丹念に探訪する仕事だ。

をみて、定有堂を訪ねた、と記してあった。この「物語 書をお贈りいただいた。開業準備のとき『物語のある本屋』 という言葉が新鮮によみがえった。 一月に、博多のブックスキューブリックさんから、ご著

とばだという。わたしが、取材は別として、長岡さんに再 会したいと思ったのは、その「物語のある本屋」から出発 長岡さんは、「物語のある本屋」は奈良さんが用いたこ

> たからだ。 考え始めている。長岡さんはどう思います?と聞きたかっ した定有堂が、いまは「物語のない本屋」ということばで

性」も突出したものとして語られたはずである。 時代だったのだ。差別化が成功体験を語るのであれば、「個 義だと気づいたからだ。差別化と同じ用語だ。活気のある 「物語」に関心が薄れたのは、その物語が、個性派と同

う。自分でも本当のところ何がいいたいのかわからない。 「縮小する本屋」でしょうか、とこたえてみた。 長岡さんは、「物語がない」って、どういうこと、と問

めくくりに取材して欲しいと頼んだ。 作業手伝いや日雇い仕事に従事する。本屋と名乗るなら本 屋だ、という原点がここにある。長岡さんにぜひ連載の締 土日しか営業しない本屋が鳥取県中部にある。平日は農

だと思いだした。これは成功体験と異なり、本屋的人間十 人十色の名乗りに、関心を寄せるものだ。 近年、本屋がまぶしい。本屋的人間は、引いて生きる道 わたしが好んで使っていた言葉は、「本屋という物語

ば、「個性」が消えるところにはじまる「物語」に、ここ 筋に存在する。出て生きるところに「個性」があるのなら

ろが魅かれる。

「物語がない」という「物語」がある、と長岡さんは4-

指摘する。なるほど、するとわたしが、こころに反芻して いるのは、物語を書き替えたいという思いつきなのか。

を重視する。本屋的人間は、もともと十人十色の生き方の 粘り強く書き替える。それを「ナラティヴ」という言葉で 考えている。セオリーの反対の言葉だ。一般性より偶然性 「循環」を大切に思う。七転び八起きともいう。

発見だ。本屋があるのではない、本屋という名乗りが循環

を生み出しているだけだ。

が窓をつくるということだ。カテゴリーの中にあってカテ 棚づくりに必要なのは、「窓」をひとつ作ること。棚がひ 間で、本自体が、そこに「本」が並ぶ理由を明らかにしな ゴリーを超えて見せる力がなければ「棚」は死ぬ。本屋空 と目で理解できるような核となる本を面展で立てる。それ 長岡さんは、「本屋の青空」って言ってたよね、という。

となのだ。本屋空間に窓がひらけば、そこにあるのは「本 屋の青空」だ。「本」がよろこびであるということの啓示 ければオーラが消える。それも、「窓」がある、というこ

だろうか? ほかならぬこの小冊子の副題にある「本のビ オトープ」がその入口だ。そしてメインタイトルが「音信 そんな「ものがたり」(ナラティヴ)がはじまっているの

胡正則・長岡義幸 『物語のある本屋』 アルメディア 1994

「物語のない本屋」、それは名乗りに支えられた本屋だ。

でもある

ナラティヴな「ものがたり」なのだ。 不通」。成長の物語ではなく、縮小へと書き替えられる25-

退歩推手

(音信不通 (1)

読者の価値判断を見失わないということだ。 動じてならないのは、店頭の現在性、つまり自分の本屋の

ら一歩退いているので、とても岡目八目でよく見渡せる。

きをおいた作風がいいよね、という共通理解だ。 をみたからだ。最近わたしが気にしている作家の、気にな ら、他人ではないナ、とうれしくなった。観念性の広がり 着し、あいさつを交わした。気になる著者の話をはじめた る理由も、すぐに通じ合った。ストーリーよりも文体に重 で、齊藤仁昭さんは初対面。齊藤さんが一時間ほど先に到 えになった。 ご主人の長崎健一さんとは五年ぶりの再会 五月十八日の夕方、熊本から長崎書店さんが二人でおみ

のだ。「文体」が問題なのだ。齊藤さんは音楽が好きなの れも齊藤さんは、面白い、と評価してくれた。本の並びの のようなものだ、と言ってもよかった。 で、後知恵だが、棚の本が旋律だとしたら、見出しは和音 ストーリー性とかかわりなしに、見出しが命名されている 定有堂は、よく棚の見出しが意味不明だといわれる。そ

齋藤さんは、書店の仕事は一年目だが、長崎書店の人文

とを伝え残さねばと思った。 書を担う期待の人材なのだ。一期一会、何か一つ大切なこ 組み合わせだが、因果関係を導入すると「技」となる。 と読む。歩みは後退する。でも、手は推す。二つの言葉の 太極拳の用法に退歩推手がある。トイブー・トイショウ

これは徳永進医師由来の生き方だそうだ。源はもっと人か 構えとして、「受け身の踏込み」と秘訣を明かしている。 柴田信さんが、石橋さんのインタビューで、書店人の心

ら人へ遡る。退くのになぜ「手」が推すのか? じつは手

の位置が動じないので、押し込んでくる相手へのカウンタ

因果関係を導入するかに、 人それぞれの生き方の軸があ 変わるものと変わらないものがある。そこにどのように ーとなっているのだ。

けではないから、本の選択は自由だ。創り出される現場か 本屋は読者の立場だから気楽だ。内面的な主張があるわ

か、と知るのも大事ですよね」と場所を移したカフェ・ド と聞くけど、本当はどの本が長い期間置いても送り返せる には汎用性がある。だが狭い現場の一点突破力のような口 力なのだ。 「齊藤さん、人はよく、 どの本が売れますか? 伝には汎用性がない。だがその積み重ねが街の本屋の雑草

き延びるための根幹だと思うのですが…。小さな物語の ' 会の思いで伝えてみたが、齊藤さん、どうでしょう? 生1-

ロップで話題にした。 店頭にどんな良書を集めるかを工夫しているのに、

長い長崎さんは、深くうなずいた。 「え?」と感じたかもしれないが、側にいた、キャリアの

選ばれる本がある。その一方で選ばれなかった本があ

る。それは書物の優劣ではけしてない。本屋は読者の判断

る。そのためには、役割を終えた本は店頭から退く必要が 現在地点は手放さない。この一点に本屋の生命線がある。 には一歩退いて関わらない。でも読者と交差する「知」の あたらしい価値観を示してくれる本がぞくぞく生まれ

ある。本の流通の大原則は、一定期間を過ぎたら故郷(版 挙げるなら、そのグラデーションを知ること、とする人も 狭い職人仕事の口伝でいうならば、本屋の専門性をひとつ 元)もある。読者との出合いを気長に提供したい版元だ。 元) に送り返せない、というルールだ。でも寛容な故郷(版 いる。わたしに一を教えてくれた人の記憶だ。

受け身の踏込み、退歩推手、本屋の仕事の根幹を一期一

サウンドバイト

音信不通 ⑫)

に「ことば」があるという文脈のなかで語られる。ごく短 で、「サウンドバイト」という言葉を知った。文化の中心 筑紫哲也さんの『ニュースキャスター』(集英社新書)

思うとなにか豊かになるような気がする。

る必要はないのではないか、とだんだん思えてきた。そう

「ことば」と、指し示されるものが、固く結びついてい

サインが入っている。最近ふと読み返し、この言葉に出く 花診療所主催のイベントで、会場に本を販売に行った。思 た秒数の下で視聴者を引き付けてくれる言葉だ。昔、野の いがけなく打ち上げの夕食会にも招かれた。本には金色の い音声として使いやすい素材で、とくにテレビなど限られ

わした。

を撮ってもいいだろうか、と声をかけてこられた。「いい た。美術館の館長さんだった。 る見出しのようなものが気になって……」という返事だっ ですよ、でもどうしてですか?」と尋ねた。 「棚について 一週間ほど前、茨城から見えたという方が、店内で写真

パイ』の山口淳さんに、面展になってる網野善彦の『日本 この質問はときどき受ける。昨日も、取材でみえた『ポ

> か?この「ことば」からのディスタンス(距離)を埋める 明らめられるものがあるのでは?」と応じた。本当だろう あるけど、と質問された。「農業民中心史観を諦めれば、 の歴史をよみなおす
> ワイド版』の下に「あきらめる」と のは、一人ひとりの「こころ」の自由だ。

間で、「ことば」は、「もの」に貼りついたものではなく、 もいる。どうしてそんなことが可能なのだろう? 本屋空 逆にその距離を拡張する。 のではなく、本が自分を見つけてくれるのを待つ。目的の でも、ときに、二時間三時間と、時の過ぎるのを忘れる人 一冊を探しにくる人にとって、本屋の空間はとても狭い。 本屋の棚は、探すものではない。自分が何かを見つける

せばいいのだろう、と日頃思っていたら、サウンドバイ28-げられている。「センス」の注ぎ込みとでもいうのだろう 積だ。…棚にひたすら思いを刻む。そんなことをどう言い表 りの仕事は、本当は自分でもよくわからない情熱で積み上 か。店頭に展開するものは「ことば」へのもたれかけの集 もしれない。少なくとも案内標識ではない。本屋の棚づく 書棚につけられた短いことばは、「サウンドバイト」か

トという言葉に出合った、というのが、ことの順序だ。 短いエッセイを読んでいて、引き込まれ、ふと気がつい

うのは言い過ぎかもしれないが、本屋空間は言葉でできて が全開になったからだ。「世界は言葉でできている」とい 一つひとつの言葉がきっかけとなり、アナロジー(類推) たら、「百年過ぎた」のでは? と錯覚したことがある。

る。人生のリセットが始まるかもしれない。人は定められ たストーリーに支配されがちだ。本屋の中にはアナロジー 本を探しに店頭へ訪れる。でも時の狭間に陥り、われに返 「ふとわれに返る」という言葉も一角にある。役に立つ

の力が満ち溢れている。

いの積み重ねだ。二十年ほど前に出合い、いまも忘れられ その向こうにあるのは「本屋の青空」だ。 ない言葉だ。そんな「ことば」が、店内に「窓」をつくる。 とば」が雑沓する。狸の置物を据えた祠のような棚もある。 屋の仕事にオリジナルはない。みんな自分の感動した出合 本屋空間はビオトープだから、とくにルールもなく「こ 例えば「一冊の本の衝撃」という言葉も一角にある。 本

> サウンド・アートかもしれない。

筑紫哲也 『ニュースキャスター』 集英社新書 網野善彦

『日本の歴史をよみなおす ワイド版』 筑摩書房

きなことだけして「小さくなって」懐手して暮らせんも なのはどうだ?少し長いけど……、と一言主張する。 「好

一やかましやの女主人」の読書予定の棚だ。そんならこん

(音信不通 ⁽³⁾

ばある。自分ではこの現象を「オブセッション」と呼んで

ひとつの言葉が念頭から去らないという経験はしばし

閉じる物語

の平面が、左右でつながる風景だ、と気づくところにある。細字で人の姿も一つ添えられる。趣向のありどころは、こ空間が展開される。文字が垂下した蔦の葉があり、小さく風」というのがある。業平東下りの道中図で、壮大な装飾風 相国寺に伝わる宗達様式の六曲一双に「蔦の細道図屏

を感じさせるのだろう。
閉じた空間、閉じた時間が、なぜ必要以上に無限の時空

図のように。

いるのなら、過去も未来もひと続きのものだ。業平の道中

未来を知ることは可能なのか。宇宙がもし終焉し閉じて

その刹那、画中の人となる。

でない空間では時間の流れが変容する。ここしばらく、こ来を知るという経験がひとを変える」。閉じた空間とそう物の中心に灯る言葉は、さらにもう一歩先へと誘う。「未SF短編集を手にして、この思いがよみがえった。この書近頃、テッド・チャンの『あなたの人生の物語』という

の想念が離れない。

ないか、という想いだった。
は、言語の成立上それは不思事した柳父章さん(翻訳論)は、言語の成立上それは不思制)。
「ものを考えるということの働きは、ことばを組み立て、文を作っていくという工夫のうちにある」と『現代日本語の発見』にいう。構文にはめ込まれる言葉が異様にはすぎるとも指摘した(カセット効果)。思考とは「ことば」なのだ。だから、覚醒はいつも「ことば」で訪れてくる。
屏風とチャンの物語から受けとるのは、世界が閉じていることと、人生が閉じていることは通底しているのではいることと、人生が閉じていることは通底しているのではいることと、人生が閉じていることは通底しているのではいる。
観念の固着だ。かつて自主講座「寺小屋教室」で師いる。
観念の固着だ。かつて自主講座「寺小屋教室」で師いる。
観念の固着だ。かつて自主講座「寺小屋教室」で師いる。
いることと、人生が閉じていることは通底しているのではないか、という想いだった。

円筒として見るか。ここに「両義性」があり、どちらを採ば、両端は境なく接している。図を長方形として見るか、右の端は当然隔たることとなる。しかし筒状の姿で見れのがある。筒状の印章で、転がすと長方形の図を刻む。左チャンは似たような例をあげる。「円筒印章」というも

るかは「文脈」理解の違い、ということになる。図の途30-

えない。もし、涯てを垣間見ることができれば、この世界 は「両義的」だということに気づくだろう。 上にあるものは、この世界がじつは閉じていることを知り

ば、光は本来二点間可能な最速のルートをとる。ここにも ば、強い抵抗と出会うので光は曲がる。目的論的に考えれ 中に入る。このとき屈折現象がおこる。因果律的に考えれ 両義性が現れるのだが、人間という生命は、因果律になじ チャンはもう一つ、光の屈折を語る。光が空気中から水

からだ。 最速の距離を進む。それを可能とするには、最初と最終

む。なぜなら、線形に展開する言語学的特性のもとにある

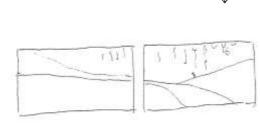
る。人間という生命は継起的(因果律的)な言語を獲得し がある。言語がそうであれば思考も同時的認識様式とな ャンはいう。言語学的にいえば、そこに意味図示文字言語 逐次的認識様式で思考する。もう一つの生命は、意味図示 因が発生するまえに結果に関する知識が必要となる」とチ の状態を知っていなくてはならない(途中の情報も)。「原

で思考するかの違いが、ここでは語られているのだ。わた したちは一枚の図の中で継起的な言語特性のもとに思考 の思考に至る。 長方形の図の中の経験則で思考するか、円筒形の経験則

文字体系の言語を獲得し、同時的認識様式(目的の知覚)

する。しかし、このオルタナティブな存在(涯てから来1-だろう? この場所で「物語」が生成する。 物語は結末と た存在)に出会い、両義性が世界にひそむと知ればどう ' 発端を知り得たときに生成するのだ。





柳父章 テッド・チャン 『現代日本語の発見』 てらこや出版 1983 『あなたの人生の物語』 ハヤカワ文庫

本屋的人間そしてオブセッション

(音信不通 (4))

ちだ。だから、第一印象なのだろう。「天井から吊り下が ちんと答えられたことがない。 ったものがあちこちあるけど……? 」「細やかな品揃え ですね……」。好意的に訊ねられているのだが、いまだき 店頭で時折り声をかけられる。多くは遠方から来る人た

はないけど反復し、いつの間にかそんな遣り方が身になじ ど、それが一貫した「仕事」の手立てとなっている。理由 じつはとくに理由はないのだ。説明がつかないのだけ

間」と名づけるが、その性向とオブセッション(固定観念) 本が好き、本の居る場所が好き、この性向を「本屋的人 む。それをオブセッションと呼びならわしている。

ゲレスコ」、と言う。スペインを中心としたバロック末期 は同義なのだ。 の建築や美術の様式で、装飾過剰を特性とするらしい。 そんな話を「やかましやの女主人」にすると、「チュリ

> 間をおそれる、という方向の考え方だ。 に絵を描かせると画面を隙間なく埋めつくす。何もない空 でもなく、 単に 「空間恐怖」 という説明もできる。 子ども か、埋め込むように周辺を固めてしまう。神を持ち出すま なるほど、唯一神を信頼することに自信がないのだろう

手づくりでないものは嫌い、といえばいいのだが、それだ うな気がする。ややこしく言わなくても、手づくりが好き、 を目にすると、行いがなにか違うものに回収されているよ さん刷られたもの」の気配が嫌いなのだ。完全に整った姿 るものを好まない。これも説明しにくいことだが、「たく けではない、とも思いたい。何かが足りないのだ。 わたしは、チラシやポスターを作るとき印刷所の手にな

ら、物と物との相乗作用、相乗効果を創り出すところにそ れは成立する。 かすことを好む。あえてクリエイティヴな仕事だというな 本屋的人間は、何かを創り出すことよりも、二次的に活

見えるね、と声をかけられる。 冊数はそんなに多くないのだが、本がたくさんあるように これも好意的に言ってもらっているのだが、実際は在庫

森羅万象と感じられないのはなぜか。本と本とが相乗的2-32 いうことだろうか? 逆にいうと、本がたくさんあるのに、 本が少ないけど、本がたくさんあるように見える。どう

う信じるところに、本屋のオブセッションがある。があるだけではだめで、何かを足さなくてはならない。そに生み出す何かが存在しない、ということだろう。本と本

本屋には唯一神は存在しない。しかし本に憑かれて引き

ュリンゲレスコなのだ。埋めつくす素材は何か? この空るとしたら、周囲を埋めつくすしかない。それが本屋のチ寄せられる何かがある。この空白を、空白のままにかたど

る雑誌や写真集を拾い集める。 捨てない、フリーマーケットでは、空間を埋める素材にな

この素材意識に引き寄せられたものだ。美術カレンダーは間への恐怖が本屋の衝動なので、日頃目に留まるものも、

が並んでいるだけでは、そこに語りかける「力」は生じな一神の不在と、同一のオブセッションだ。「本」と「本」これが店内空間の物語だ。品揃えの「細やかさ」も、唯

絡のない言葉がそうだ。脈絡がないのは、唯一神が存在し本と本をつなげるものは「言葉」だ。棚板に添えてある脈い。力は「つながり」と「方向」の拮抗の上に成立する。

ない故だ。書き添えて可視化するものと、見えないが本と

本との間に「言葉」が立ち上がる気配もただよう。

示されたときだ。狭い空間に「世界」が立ち現れる、そののは、じつは「なくてもいいんだ」という引き算の方向がでも逆説的だが、本屋空間がベクトルとして開示される

わかりにくい話だが、オブセッションとはそういう自 -現われ方は、外延的なものでなく、内包的な方向に進む。3-

己言及的なものなのだ。

017 08 96

アブダクション (音信不通 ⑮)

はいざ知らず、「音信不通」は、わたしにとっては、オブ述べるが、オブセッションとこの事情を名付けている。人ぶ人もいる。この自己回帰する循環を、陽だまりのここちぶ人もいる。この自己回帰する循環を、陽だまりのここち動へ移すということが本来の姿だろう。でも読むだけで終動へ移すということは、知識を得て、それを活用し、行本を読むということは、知識を得て、それを活用し、行

セッションの物語なのだ。

なかった。何人かの人にもさりげなく話題にしかけたのだあまりに個人的な好みなので、棚に組み入れることができて、自分の蔵書を探して再読した。もう十数回読んでいる。て、自分の蔵書を探して再読した。もう十数回読んでいる。下清一郎『心の起源』中公新書だ。補充でいつまでも帰っ下清一郎『心の起源』中公新書だ。補充でいつまでも帰った有堂で、ついに居場所をつくれなかった本がある。木

が、誰も見向いてくれなかった。たぶん、この本自体がオ

孤立するしかない。 ッションの強い本は、本屋の店頭では他とつながりにくく ブセッションに基づいて書かれているからだろう。オブセ

ずれも「起源」をテーマとしている。
は、「個体発生が系統発生を反復する」という主張だ。いりを見出して、読み始めた記憶がある。つながりのさわり中公新書を読んだ後、めずらしくオブセッションのつながずいぶん前に手にした本だが、三木成夫『胎児の世界』

いだそうとする試み」のことだ。 象があったとき、.....その現象のなかに何らかの秩序を見人の心の動きを重視する。「目の前に不確定で不規則な現人の下清一郎は、推論法として「アブダクション」という

は、たしかにそんな人間が存在する。本を読んだから本を指示し言い及ぶ、自己言及性の傾向が強いという意味で文系的思考だ、と的を射た言葉を投げかけられた。正しい文系的思考だ、と的を射た言葉を投げかけられた。正しい文系的思考だ、と的を射た言葉を投げかけられた。正しいずや滅びるべき生物体のなかに、滅びることを肯んじないずや滅びるべき生物体のなかに、滅びることを肯んじないすで滅びるべき生物体のなかに、滅びることを肯んじないすで滅びるべき生物体のなかに、滅びることを肯んじないすが、自己言及性の傾向が強いという意味である。本を読んだから本を指示し言い及ぶ、自己言及性の傾向が強いという意味である。本を読んだから本を指示し言い及ぶ、自己言及性の傾向が強いという意味である。本を読んだから本を指示し言い及ぶ、自己言及性の傾向が強いという意味である。本を読んだから本を指示し言い及ぶ、自己言及性のない。

売る、この自己循環性の軛(くびき)に本屋的人間の宿4-

発生は系統発生をくり返すという高次の視点に立てば、ニ 点は個体発生的であり、タマゴ的視点は系統発生的。個体 に課題の入口がある。結論はタマゴらしい。ニワトリ的視 タマゴとニワトリはどちらが先か? と発問するところ

みつづけているので、メビウスの輪をめぐるようなもの 思いが生まれる。こんなオブセッション(執着)で本を読 ッションとしてのアブダクションがある。やむにやまれぬ 証明命題性の強い範疇のできごとだ。だからここにオブセ を左右できないコミットとはそういう仕組みのことだ。無 デル)という考えが重要なヒントとして引いてある。結論 ワトリはタマゴの派生だということがのみ込める。 「無矛盾性はその体系の内部では証明できない」(ゲー

を宇と謂う」と語る。これが高次に開かれた視点だ。 を「胎児」のすさまじいメタモルフォーゼに読み解いた三 いるのかもしれない。どんな視点だろうか? 太古の形象 木成夫は、古典を引いて「古往今来を宙と謂い、四方上下 アブダクションの行方としては、「竹声桃花」という故 つまるところ、「高次の視点」を求めて読書をつづけて

で、彷徨もとめどがない。

事をいつも思い浮かべる。石が竹にはねかえる音、あるい は桃の花が開く、きっかけは予期せぬものだが、ある日ふ

> 郎であれば、それは「入れ子」としてだ、と付け加える ' と高次の何か(特異点)がひらき心が明らむ。木下清一35-

かもしれない。

木下清一郎 『心の起源』 中公新書 2002

本を読む夢

音信不通 ⑯

うか、自分が寝ていることに気がつかず、一頁ほど読み進 り込んでしまうことがある。残像がしばらくつづくのだろ んでいることがある 夢の中で本を読む。寝床で本を読んでいるとそのまま眠

ことがある。むろんまったく違っている。夢の中で続きを よんだのでなく、読んだ夢を見たに過ぎない。 ときに漠然と数行が記憶に残り、覚醒して本と照合する

ことと心に秘めていた。夢の中の良いことは、口にするも のでない、と耳にした記憶がある。 でも、なにかしら得しているような気がして、うれしい

に尋ねた。「夢の中で本を読むことってあるのかな?」と。 「ありますよ」との返事だった。四部作の小説で、作者が この自分の秘め事は口にせず、なにかの弾みで、ある人

> これはボリューム感で負けている、と思い少しがっかりし わたしの場合は、ほんの数行で、向こうは一冊だから、

とだった。恋愛が成就するという展開で、安心したとのこ

二作目でなくなった。この続きを夢の中で読んだというこ

道すじではなく、文字通り夢の中で活字を目にする、とい なるのだろう。夢で読む、というとき、夢物語という話の が、自分のうれしさが色あせるようにも感じた。 うことを言っている。 働きを持っているということに、考えてみればあたり前だ ところで、現実の書物と夢で読む書物は、どのように異 量的に負けたのが残念だったが、誰でも同じような心の

なかの「ハシゴ」もイメージできない。「ハシゴ」がこわ それと夢の中の「書物」がどのように関係するのだろう、 形をしている、といわれれば、これは少しわかる。「ハシ ゴ」はどうでもいいのであって、「こわい」のがすべてだ。 い、といわれてもわからないが、こわいのが「ハシゴ」の いた。四角い三角という言葉が像を描けないように、夢の 昔、夢の中に出てくる「ハシゴ」がこわい、という人が

夢の中に登場するのは文字列であって、本の形をしている-

自分でもだんだんわからなくなってきた。正確にいうと、

出される。この仕組みが面白いので、最近よく人にもすするわけではない。 電子書籍だと、黄色でマーカーをつけ(ハイラと述べた。電子書籍では入手できることにたまたま気づい。記憶力と理解力が弱いので、後でその部分をノートにい。記憶力と理解力が弱いので、後でその部分をノートにい。記憶力と理解力が弱いので、後でその部分をノートにがき出す。電子書籍だと、黄色でマーカーをつけ(ハイライト化)、「ノート」を選択すると、ハイライトだけ抜きイト化)、「ノート」を選択すると、ハイライトだけ抜きイト化)、「ノート」を選択すると、ハイライトだけ抜きイト化)、「ノート」を選択すると、ハイライトだけ抜きイト化)、「ノート」を選択すると、ハイライトだけ抜きイト化)、「ノート」を選択すると、ハイライトだけ抜きイト化)、「ノート」を選択すると、別にしない。

しながら、「夢の中の文字列」を思い起こしたのだ。じつは、順序が逆で、タブレットで電子書籍をスワイプ

と見なせなくもない。

ので、夢の中で出合う文字列のようにも思える。「ハシゴ」更に電子書籍で購入した。最終的に傍線部分だけ抜き出す

めている『人はなぜ物語を求めるのか』(ちくま新書)も、

ったのかもしれない。ある日、一行だけ持ち帰れた。後はがここにあるではないかと戦慄した。何かを終わらせたか「学び」に疲れていたのだ。自分で考えなくても、すべてでこと足りるという考えに、脅迫的にとらわれた。自分の二十代の頃、夢の中の文字列を持ち帰れたら、その一冊二十代の頃、夢の中の文字列を持ち帰れたら、その一冊

自分でつないで造形した。こんな形をしていた。

しししゅ………し / かなこで てのる / は

ゅ………… (第一期『音信不通』七号より「どるんて」)おく / (中略) / どれんと はんぱ / しししうげん) ふ / これ定めて あをとは表(おもて) とっなにしる にれの / 識(しき)の分界 けも綜言(それなにしる

これがわたしの意識の涯てだった。

2017. 10. 20

千野帽子『人はなぜ物語を求めるのか』ちくまプリマー新書木下清一郎『心の起源』中公新書 2002

音信不通 ⑰)

残されない探検記

終了翌日、早朝に地方・小出版流通センターの川上賢一社 クインとっとり」が、十一月下旬に鳥取市で開催された。 地方出版物の展示と、その年の秀作に賞を与える「ブッ

と口にする。「音信不通」の話が出て、「相かわらず、人 とても久しぶりで、お互い、これが最後かもしれないね

服部珈琲店でモーニングをご一緒した。

長をホテルに迎えに行き、そのまま空港へ向かい、途中の

上さんは、地方出版物の存続の場所に身体を張るという生 に伝えようという気がないね」と笑いながら言われた。 のは肯定してくれてる、とかってに思いうれしかった。川 い」というのがわたしの個性で、「変わらないね」という むろん、わたしの文章についてだけの感想だ。「伝えな

めていた頃、ある著名な街の本屋がいちはやくHPをつく 進む道筋を指し示してくれる人なので、緊張する。 十七年前に、ちょうど書店が試行的にHPを立ち上げ始

き方をしている。いつも真剣勝負で、気も短い。わたしの

川上さんから連絡がはいり、しかられた。自分を見失って をかけられた。とてもうれしくて、すぐに寄稿した。直後 書くのはやめた。反省して、勘違いだったかもしれないが、 いる、という意味のはげしい叱咤だった。 しかられて、なぜかうれしかった。だから、一回だけで

とてもまぶしく感じた。そこにエッセイを書かないかと声 り、世間の注目を集めた。百数十万かかったとか聞いて、

納得してしまった。 Pをつくった。川上さんの方に向いた仕事だった。 しれないが、十六回の「音信不通」を作った時点で、妙に 「伝えなくていい」と、これもまた勘違いしてるのかも

HPを作っている二人のひとに教わり、工夫して自分のH

やの女主人」(名のり)に見せると、「いつも『愛人』と らうのだが、うまく感想を言えない。わが家の「やかまし を理解することが得意でない。いくつかの創作を見せても に渡り、本来絵画を描いていたのだが、いつのころからか に向けて語りつづけるものだ。その啓三さんは、アメリカ のことにしか興味を持てない人間なので、人の書いたもの 「言葉」の方へ関心が移って行ったようだ。わたしは自分 わたしにとっての「音信不通」は、ある意味で啓三さん

これは核心をついているらしい。わたしはじつは感じる3-『賢い女』が出てくる」と批評する。啓三さんからみて、

結構の部分の分析ができない、ということなのかもしれな (共振)するところが直截すぎ、結構の部分が消え去って、

校生のとき、荻窪の喫茶店『光』に連れて行っていただき (いや、ひょっとしたら僕がご案内したのかも……)、 啓三さんから、こんなメールが来た。「そういえば、高

節』だったように記憶しています」と。文学に無関心なわ これらのものは読まれるべきだ、というリストを、その場 たしをなじるように、記憶を甦らしてくれた。 で手書きでいただき、そのひとつがランボーの『地獄の季

した。「奈良さんに求めているものはそんなことではない」 の話を書いたら、原稿が没になり書き直させられた」と記 のHPに二年ほど連載していたとき、魔がさしてランボオ 返事に、「そういえば、二十年くらい前に、ある出版社

という理由だった。

とができる。道を誤っているかな、という不安もあったが われて、「それがわたし」なんだと安心できた。 川上さんに「相かわらず伝えようという気がないね」とい った。いまなら自己言及にしか興味がないと言葉にするこ それから「伝えない」という書き方を自覚するようにな

になったらしいが、わたしはまともに本を売っている」と 啓三さんには、「ランボオはアラビアに渡って武器商人

書き添えた。

らいいものだ、と言っていたようにも思う。 って、そんなことだったのだろうか。 「音信不通」

2017.11.18

(編集部注)

化功労賞」(「第186回 今月読んだ本」) 審査委員です。「祝30周年!ブックインとっとり地方出版文 岩田直樹氏が、定有堂HPに紹介文をお書きになっています。 「ブックインとっとり」については、定有堂教室「読む会」の

idea/in_0186 . html http:// teiyu . na . coocan . jp /

アルテュール・ランボー 岩波文庫 2008 小林秀雄訳 『地獄の季節 ランボオは、残されなかった「探検記」が、なにかし '

石橋毅史さんに学ぶ (音信不通 ⑱)

つづけている。対象に寄り添う姿勢が鮮明で、わたしは「本紙「新文化」の元編集長で、本屋の動向を見守る取組みをアをつなぐ」(東京新聞)が注目を集めている。出版業界でもは出版ジャーナリストで、現在連載中の「本屋がアジストが、出版が大阪・神戸でのお仕事のついでに、十二月十石橋さんが大阪・神戸でのお仕事のついでに、十二月十

通の転変の中に身を置く二人の、エールのかわしあい以外った。その心の優しさをうれしく思った。しかし、出版流ね」と二人で交わしたのを耳にされ、案じてお訪ねくださ見えになったとき、「こうしてお茶するのもこれが最後だ 十月末に地方・小出版流通センターの川上賢一さんがお

屋の守護神」とあがめている。

える文章」の許さないところだ。

石橋さんの文章を原稿用紙百枚に書き写す決意をした。「音信不通」を始めるとき、準備運動として、わたしは

遊戯に変える」「過剰反応をやめる」「存在は言葉に縛-4

ではなかった。

お手本通りにいかなかった。るお手本とみえた。でも、小冊子をスタートしてみると、だ。正確・平易・簡潔という文章作法の要求にかなってい「伝える文章」として、最高に完成していると思えたから

なる。これは石橋さんの禁じ手とするところであって、「伝かりやすい文章」を模倣できなかったのは、「音信不通」が千六百字で書くという制約を設けたからだ。石橋さんの「分ので、棚を動的に保たねばならないからだ。石橋さんの「分ので、棚を動的に保たねばならないからだ。石橋さんの「分でもあるのだが、「言葉」を支えとして考えを紡ぐようにでもあるのだが、「言葉」を支えとして考えを紡ぐようにでもあるのだが、「言葉」を支えとして考えを紡ぐようにでもあるのだが、「言葉」を支えとして考えを紡ぐようにでない。「分かりやすい」棚定有堂の棚づくりを思い起こした。「分かりやすい」棚

られる」などだ。自分ではこの行為を「本のチャンク化 とだ。「石橋さんの文章を書写したんですけど……」と言 と呼んでいる。人が知覚するときの「情報のまとめ」のこ い訳したけど、こんな闇に囚われているわたしだった。 る。「なぜこんな狭いところにいるんだ?」と問われ、「金 っているのに、一軒家に居を構えず長屋に暮らす男がい 「普通の本屋」とともに、これが柴田信さんの発見だ。 ているのに、一軒家に当たり場から、大金を持っ江戸文学に「長屋長者」というのがあった。大金を持っ2年ま日信さんの発見だ。 41

うに風景的なものだ。本屋を動的に語るときに「まち」と町内というように「つながり」を含む。街は街角というよた。ここでは「町」だ。いまは「街」を使っている。町はの終刊号まで「町の本屋という物語」という連載をしていると思い出したのだが、リクルートが刊行していた『AGふと思い出したのだが、リクルートが刊行していた『AG

屋っていつ誰が言い始めたのだろう?」と疑問がわいた。

石橋さんと「服部珈琲工房」で話していると、「街の本

持ちは溢れているが、長屋に住む金持ちは希少価値だ」と

いう落ちだった。

位置と自覚していたが、柴田さんの「街の本屋」という名う。町の本屋というのは「周辺」そして「古層的」な立ち街の中心にある。この場所で「街の本屋」と柴田さんはいんとの出合いだ。岩波ブックセンターは神保町という本のいう枕をつけたいのだが、どうも居心地がよくない。いう枕をつけたいのだが、どうも居心地がよくない。

2017. 12. 22

ずと話題を温めたのだった。

石橋さんと共に敬愛する、柴田信さんの思い出が、おの

『AGGRE (あぐれ)』 リクルート ~1996

様々だが、自分の得意を凝縮し、「身の丈」を創出する。る。また個性的という見方もできる。身の丈の絞り方は

本屋とはいわない。街の本屋には独立系という意味もあ乗りは、わたしに衝撃だった。ナショナルチェーンは街の

音信不通 (19)

シンクロニシティ

ワークとなっている。時代を主導したキーワードだ。 「関係の絶対性」という言葉は、ながく思考のフレーム

んな自己からの離脱でしかない。

の」に出会う必要がある。わたしの場合、「学び」とはそ

成する空間のあり方だ。その関係性が「街」であり、 本屋で考えると、本を読む人と本を売る人が共創的に形

の本屋」もそこにある。

るにつれて、本屋の品揃えも狭く深くなる。人文書が、「街 人文書も関係性の強い本だ。本を読む人の確信が狭くな

から、とこたえた。 専門の出版社の集まりの機関誌だ。「学び系」の本屋です に、昨年「人文会ニュース」に寄稿を求められた。人文書 (在野) でどのように手にされるのかという問いのもと

れた。また「読む会」をはじめた別の講師は「市井の」と 係」が、「学び系」と気づいたからだ。本屋サークルの定 いう言葉を用いた。「街」「市井」「往来」の中で共有さ 有堂教室は、初期の講師によって「まちの寺子屋」と呼ば 「街の本屋」定有堂が、鳥取市の若桜橋の北詰で築く「関

れる物事の理解は、有効半径の狭いものだが、生活に根差

うのもひとつの闇だ。光を求めるとしたら「自分でないも しているゆえにかけがえのないものだ。 確信をもって生きるかだ。でも逆に自分が自分であるとい のという意味で用いる。畢竟するに自分一個がどのような 「学び系」というのは外延性のものでなく、内縁性のも

いる」という直感で因果関係を持ち込むものだ。生活者に は本質的にシンクロニシティに基づくことが多い。「似て にその本あるよ」といわれた。うっかりだった。 ただいている禅僧の方がおいでになったので、こんなの見 く買ったつもりだったが、定有堂に戻ると、懇意にしてい はなじみ深い引き合い(共時性)の感覚だ。さして意味な 意識』と頼住光子『正法眼蔵入門』だった。市井の「学び 呼ばれるようにして二冊手にした。丸山圭三郎『言葉と無 か?」と尋ねたら、「いい本見つけたね。……でも定有堂 つけました、と包みから出した。「これ勉強になります いい本だね、といわれた「眼蔵」の巻末資料には、その 自分でないものを求めて、先日は古書店に行った。本に

をよむ」も列挙してあった。そういえばこの連載の間、

方が講談社の「本」に九年にわたって連載された「『眼蔵』

PR 誌「本」を出版社から数十冊寄贈していただいていた よく目が行き届いているのにびっくりした。 のだった。連載が終わったら、ぴたりと配本が止まった。

「必ずや滅びるべき生物体のなかに、滅びることを肯んじ 市井の身近な学びのひとつに、十五号に記したのだが、

ない心が生まれ、しかも心自身がそれを知ってしまった」

(木下清一郎)という問題がある。「死」が悲しい、とい

潔に「仏教における真理の体得とは、『空』の体得に他な うことだ。手にした「眼蔵」には、入門者向けもあって簡

らない」とあった。 自分の解釈だから間違っているのだろうが、こんな事を

こでは、龍樹の「中論」にソシュールの先取りがあり、「す だった。言葉を並び替えて異なる意味を見出す遊びだ。こ ち現れ方であって、脈絡関係、つまり因果関係はない。パ 持ちがある。しかし、「空」というのは、この「生」と「死」 考えた。「生きているのに死ぬ」のはいやだな、という気 ラグラフ(文脈)は、入れ替え可能なのだ。本当だろうか。 の述語関係を否定する。「生」と「死」はそれぞれ別の立 『言葉と無意識』は「アナグラム」について述べられた本

禅僧の方の座禅堂を二、三回訪ねたことがある。座って

べての事象は関係によってのみ存在する」と同じようなこ

とが語られる。

るのを、じっと待つことなのだろうか。 と「死」の因果関係がアナグラムとなって逆転(異化)す 何を考えればいいですか? と質問したら、「何も考えな4-い」といわれびっくりした。そうか瞑想しないのか。「生」'

(参考)

タイトルで寄稿。 イトで PDF ダウンロード可能。 『人文会ニュース」』は №127 (August 2017) をサ 「本のビオトープ」という

丸山圭三郎 頼住光子 『正法眼蔵入門』 角川ソフィア文庫 2014 宮川敬之 『和辻哲郎 ― 人格から間柄へ』 講談社学術文庫 2015 『言葉と無意識』 講談社現代新書

柳父章さんのこと 音信不通 ⑳)

なく関心がこのあたりから離れられない。 波文庫と柳父章『翻訳の思想』ちくま学芸文庫だ。なんと ともに文庫本が二冊転がっている。『使徒のはたらき』岩 枕頭の「がらくた箱」には、タブレットの充電器などと

座で師事するところがあった。柳父さんは「翻訳論」とい う分野を切り開いた人で、わたしは柳父さんを入口として 柳父章さんには、二十代に「寺小屋教室」という自主講

「言葉」に興味を持った。

と書き添えてあった。こころの中で、ご本を読みつづけて 今年の年賀状に、「時代が過ぎますね! お元気で 章」

入されており写真も拝見した。著作者の霊園だった。そこ づけることだけを選択した人生だった。京都で一緒に書店 で眠られるのだと思った。生涯独り暮らしだった。考えつ 八九歳一月二日死去とあった。十数年前にすでに墓地を購 います、と応じた。二月二日の朝日新聞に訃報があった。

> 当者とのご縁で、定有堂には昔から「叢書・ウニベルシタ ス」が欠けることなく入荷してくる。

中心的な著書は法政大学出版局から十一点出ている。担

「寺小屋教室」の出版部からは、『現代日本語の発見』

座に発表したものが中心で、一般向けなので、わたしには へと発展したが、いまはもうない。高校教科書やNHK講 1983が刊行されている。この出版部は、のちに「光芒社」

文を作っていくという工夫のうちにある》(ことばの日 《ものを考えるということの働きは、ことばを組み立て、

なじみ深い。

ということだ。 一言でいえば、「ことば」「文」「思考」に油断するな、

とばと翻訳先のことばの概念は一部しか重ならない。 きしたこともある。「ことば」を翻訳するのだが、日本に だが、刊行時定有堂教室「読む会」の主催で講演会にお招 いう問いが出発点となる。似たような語でも、翻訳元のこ 存在しない概念を担ったことばをどう翻訳するのか?と 岩波新書の『翻訳語成立事情』1982 は広く読まれた本

の理念のもとに育った世代は、理念と現実の相克に悩ん4-レが社会レベルになると大変なことになる。戦後民主主義 要は、ここに勘違いの源がある、ということだ。このズ

めぐりをしたこともあり、学者の視点で棚を見る目に立ち

会ったのが、新鮮で貴重な体験だった。

らしい。でも空かもしれない……。 ら生まれたカウンターカルチャー(対抗文化)の一つだと きっとこれだけ外見が美しいのだから、中身はもっとすば は空っぽでも、なにか崇高な感じがする。柳父章さんはこ だ。相反するとき、どちらに付くか? むろん理念しかな の仕組みを「カセット効果」と命名した。宝石箱効果だ。 いう見方もできる。翻訳語、例えば「理念」とかは、じつ い。するとどうなるか? 何かが軋む。この行きづまりか

も進む。二〇〇四年の『近代日本語の思想』法政大学出版 最初は「ことば」中心の考察だったが、「文」での考察

局に緻密だ。

…である」というこの構文は、明治三八年当時、まだ現れ たばかりの文体だったと指摘する。三上章が述べたよう 漱石の『吾輩は猫である』 は画期的だという。 「~は…

生するという。「そこから展開される論理は、既知から未 置かれたらどうなるか? 柳父さんは、「既知強制」が発 を受ける。これが日本語の自然な流れだ。この「は」の前 に、まだ日本人になじみのない、「自由」とか「平等」が に、「が」が未知を受けるのに対して「は」は既知のもの

だという。

空っぽなのだ。 幸になっていく特別な人間、近代日本の知識人である」と 識や生き方を実際に行おうとして、結果として孤立し、不 いう。もともと日本の土壌に根は存在しないのだ。神棚は 合、彼は特別な人物なのだ。「西洋近代から教えられた知

午前中にステーキを食べ、午後はほとんど食べない、頭脳 登った。健脚で、それは我流ヨガのおかげと得意だった。 の集中を第一とするから、とも語った。生活はとても簡素 し続けたのが、柳父章さんの仕事だ。 柳父章さんが桃山学院大学教授のとき、一緒に吉野山に 状況の閉塞を「ことば」そして「文」に立ち還って思索

だった。一人でいて、さびしくない人だった。

柳父章 柳父章 『翻訳の思想』 ちくま学芸文庫 『現代日本語の発見』
てらこや出版 『使徒のはたらき』 岩波文庫 1977

柳父章

柳父章

『翻訳語成立事情』 岩波新書 1982

「近代日本語の思想 新装版』 法政大学出版局 2017

ことなのだが、じつはこの「主語」が宝石箱で空っぽなの

論理的というのは、西洋語の名詞中心、主語中心の構文の 知へと、一方的に天下ってくる、演繹的な論理である。」

木を見る、森を見る (音信不通 ②)

資質とする。飽きやすく、粘着性。木を見てるかと思うと 森を見ている。でもこの二つが見える場所からは、外へ出 私見にすぎないが、本屋的人間は二重性を併せ持つのを

変わりがしたからだ。好きな特集だけをコツコツ残す。あ ンバーの方が多い。森を見るより木を見よう、とある日心 れこれの広がりには欠けるが、時間の蓄積が広がる。 定有堂の売り場には久しく、新刊の雑誌よりもバックナ

ように、それにつれて、もぞもぞ針先を修正する。森に競 ければならない。あたかも地球の両極が移動しているかの と尋ねた後に、二つの視点にまとめてくれた。一つは「土 に埋めた発酵商品」、もう一つは「遅れて売る」だった。 興味を持った編集者の方が、「どうして思いついたの?」 本屋的人間は、つねに自分の居場所を少しずつ動かさな

> る」「遅れる」もそんな選択の一つだ。 争が顕著なときは、木を選んでその下を動かない。「埋め

ビオトープも、つまるところそんな場所をめぐっての物語 手に帆を掲げる、ということに尽きるもののようだ。本の と教えてくれる本の話をした。雑草の物語とは、どうも得 前に、雑草は自分の得意を活かせる場所を知っている、

る、と感じた。じつは変化のなさに自分が飽きて、磁極を 動かしてみようとしたのかもしれない。 いるのに、売れていない事実に気がついた。何かが終わっ ている予感がした。森のかたちがいつの間にか変化してい 去年の暮あたり、文庫の新刊がせっかくきっちり入って

書だ。小数だが、この「木」の足回りを踏み固めてくれる 社文庫目録に目を通し、「土に埋め発酵している」タイト 大切な人々がいる。現代社会に直結するもの、また原理原 に』のような写真集が耳目を集める。また必須なのは人文 あった。一方、名のある草花本は、パイインターナショナ たのだが、でも本気になってはいけないと戒める気持ちも ルを中心としたアート本だ。例えば『彼らがいなくなる前 ルを掘り起こした。「雑草文庫」とでも名付けてもよかっ 二月に入って、ちくま文庫を中心に、手当たり次第に各

則を究める哲学の本も欠かせない木の実の一つだ。

して久しく埋もれ、発酵のときを急ぐこともなく、雌伏し く生き続けているなと驚く。土壌ならぬ文庫目録に記憶と ない。でも生きることは、森を選ぶのでなく、木を選ぶこ とのようだ。雑草にことよせて生き抜く、本屋の仕事はか ている。きちんと森を知らなければ、そこに本屋の現在は 本屋は新刊をくまなく求める。もちろんわたしもそうし 柄を拾い起こしているだけだが、品切れ絶版にならずによ

ぎを工夫し続ける必要がある。

り合いがある、ということだ。どちらも大事だが、ゆら47-

雑草文庫は、森の記憶だ。長年の勘で、昔売れていた銘

2018.03.26

要もない。きっと文庫本たちも、まとまることに飽き飽き ト・デザイナーの解釈を重視して、すべて表紙を見せて展 生まれた。脈絡もなく根拠もなく、思いがけないところに しているはずだ。 示する。棚ざしでないから、グループで何かを主張する必 ている。時々の文脈から解き放ち、内容よりもレイアウ ふと気づくと、思いがけなくも店内ビオトープが各所に ようにややこしいが、しかしこよなく楽しい。

棚田のひとつのように、表紙を見せて息づいている。

えるのは、不易と流行のモザイク模様が、森羅万象と関わ ら、錯視の応用はどうだろう。エドガー・ルピンに有名な うと森羅万象でなければ飽きてしまう。どんな工夫があり の図の中に違った立方体が交互に見える。本屋の現場でい 得るだろう。空間の広がりは、はなから期待できない。な 本の森羅万象という気配を醸し出すかに工夫する。逆にい いところが肝だ。ネッカーの立方体というのもある。一つ にか別の工夫がいる。実際に冊数が多いわけではないか 「隠れた顔と杯」がある。同時に両者を見ることができな 小さな本屋の暮しで飽きないためには、どのようにして

> ジミー ・ ネルソン 『彼らがいなくなる前に』 パイインター ナショナル 2016

彼らがいなくなる前に (音信不通 ②)

るものだったので、実現はできなかった。今頃になって初 という若者向けの連続講座だ。遠方なのと半年近くにわた 心者対象のレクチャーが気になるのも変だが、いつでも あった。池袋コミュニティ・カレッジの「本屋さんの仕事」 十数年前のことだが、足を運んでみたいなという講座が

巻に、その講座の記録が入っているのを古書で見つけ、少 し時間を巻き戻すことができた。 平凡社の太陽レクチャーブックというシリーズの第一

「一」を始め直すのは嫌いではない。

印して帰ったと思う

ちゃんと考えてほしい」(北尾トロ) てきている」(永江朗)「何を成功と思うかの基準だけは、 った。「本屋さんの仕事自体が、街の中で限りなく溶解し 数人の優れた講師が語っているが、二つの言葉が心に残

びるためには二つの路があると永江は語る。一つは、なる すでにこの頃から売り上げ低迷が進行している。生き延

> 座に出席していたら、「何が基準かを忘れるな」と心に刻 ない。人間の情念は「狭隘」なところにしか育たない。講 ないか、という問いかけだ。永江は、既存の書店像から独 らだ。北尾トロの言葉はその点に敏感だ。オリジンから外 きで別のショップとなり自他の区別があいまいになるか 売る方向。なぜそれを溶解というかというと、書籍を売る 立するのも、「独立系」書店の特色だと、必ずしも否定的 れたところで成功しても、それは成功とはいえないのでは の現場に生きる一人の人間の立ち位置はけして多様では ではない。でも業態のありようは多様であっていいが、そ のが本屋のオリジンだとすると、扱う商品の変化で、居抜 べく数をたくさん売る方向。もう一つは、本以外のものを

という非言語的な実践がここには隠れている。 考えてみれば、本屋の仕事も「ただ本を並べるだけ」だ。 陳腐だが、作品はとてつもなく独創的で圧倒された。でも く言葉はなかった。五人の講師が口をそろえて、「シャッ しれない。しかし本当の問題は、いつどこで、どのように、 ターを押すだけだ」と言っているように聞こえた。言葉は あったので、これは古書で探して取り寄せた。こころに響 わたしが講師ならその一言で口ごもるしかなかったかも 同じシリーズに『フォトグラファーの仕事』というのも - 48 -

ど見ない「狭隘」な職人なので、ただ売れる度に補充をし 含めたものだ。わたしは、仕入れはするけど中身はほとん そのうち見たいから売りっぱなしにしないようにと言い なマサイ族の姿が気になり、「やかましやの女主人」が、 だ。一年半ほど前の発行だ。表紙のエリマキトカゲのよう 界各地に尋ね気高い野生の文化と生活を撮影した写真集 パイインターナショナル刊の写真集がある。少数民族を世 ているだけだった。ふと先日気がつくとすでに三十回転を していることに驚いた。はじめて表紙をめくってみた。野

『彼らがいなくなる前に』(ジミー・ネルソン)という

らまた「一」がはじまる予感がする。はじつはジミー・ネルソンなんだと初めて知った。ここかますね、と声をかけてくれる。この写真集を知って、彼ら自分で仕入れしているんですか? 熱心に工夫がしてありしてファサードに直立するだろうか。旅行者の方が時々、'

いだろうか。ジミー・ネルソンが来たら、わたしも正装4-

2018.04.23

ナショナル 2016 ジミー ・ ネルソン 『彼らがいなくなる前に』 パイインター佐内正史 『フォトグラファーの仕事』 平凡社 2004

江口宏志 『本屋さんの仕事』 平凡社

2005

からだ。この心性は部族の民と同じだといえば理解しやすわたしは本屋を取材されるのが好きではない。気後れするすごいと思う。本屋もときたま、取材の依頼をうけるが、ことを自覚したのだ。

ネルソンと知り合って、はじめてきちんと自分たちを示する価値のある遺産だと思わない」と核心をつく。 ジミー・

摘する人がいなかったために、彼らは自分たちの文化が守ブレッセは「自分たちがどれほど際立って個性的なのか指

この背景を知り、繰り返し頁をめくった。解説でマルク・もかかる。彼らは家宝で正装してその場に臨む。写真を見、家はシャッターを押すだけだ。しかし、この一押しに三日

に生きる部族の民が凍える山頂で朝日を浴びている。写真

定有堂はどんな本屋ですか?

(音信不通 ②)

かの質問を得た。 」という焦点のもとにいくつ有堂はどんな本屋ですか? 」という焦点のもとにいくつだろう? と「問い」が投げかけられることとなった。「定で遠慮しようとした。では、自分で自分を取材したらどうで遠慮しようとした。では、自分で自分を取材したらどうで遠慮しようという理由屋ガイド本」の取材案内があった。気後れするという理由三ヶ月ほど先の刊行のようだが、「旅して訪ねる街の本

のバランスを意識することが大事で、メインの人文書とアートスを引とめた。写真も自分と対話してもいいことだと有難く受けとめた。写真も自分で撮った。以下がその概要だ。本の構成は、人文書とアート本をメインに考える。街の本屋の構成は、人文書とアート本をメインに考える。街の本の構成は、人文書とアート本をメインに考える。街の本屋の構成は、不の品揃え、選書の目安やその変化の具体的な面では、本の品揃え、選書の目安やその変化の具体的な面では、本の品揃え、選書の目安やその変化の

ート本は「不易」の部分に該当する。「不易」は、昔から

の本好きの人たちとつながる分野だ。

一方、従来の本好きとは別のところから本と出合っていく人たちもいる。「流行」の分野だ。エンターテイメントや生き方のヒントのような、いま現在の瞬間風速のただ中の本も新刊コーナーでは、きちんと対応する。ただこの「流行」の範疇は街の本屋では将来の見込めない分野だ。アクセスしやすく品揃えも豊富な大型書店には及ばない。人文書やアート本は、自分の暮らしの中で、「本」を選ぶことをなによりも楽しみとする人たちに向けたものだ。ぶことをなによりも楽しみとする人たちに向けたものだ。がことをなによりも楽しみとする人たちに向けたものだ。がことをなによりも楽しみとする人たちに向けたものだ。がことをするよりと訪れる人も多いが、しばしば「難しい本が揃ってますが、大丈夫ですか? 買う人がいるんですか?」と声をかけられる。「アクセスしにくい街の本なの金上でふらりと訪れる人も多いが、しばしば「難しい本が揃ってますが、大丈夫ですか? 買う人がいるんですか?」と声をかけられる。「アクセスしにくい街の本ない本が揃ってますが、大丈夫ですか?買う人がいるんです」と答える。

特性づけることができる。 特性づけることができる。 特性づけることができる。 学院はずのものが「ここ」でしか買えなくなる瞬間だ。「待るはずのものが「ここ」でしか買えなくなる瞬間だ。「待なはずのものが「ここ」でしか買えなくなる瞬間だ。「待なはずのものが「ここ」でしたでしたが、「不易」というをいったが、バックナンバーはおどろくほど売れる。

微妙なグラデーションの変化はある。多くの本は置けない 人たちになり代わって選書する。「不易」に流行はないが、 ので、ときどき方位や入射角度を変える。ふと「色あせた」 くり返しだ。 た。その方針で現在にいたるまで順調なので、今後の「展 ' 開」も棚のグラデーションは変わっても本質は同じことの

つまり、ここでは「遅れている」ものを貴重だと感じる

必要とする」ひとと出合うという方針が唯一の課題だっ1-

という想いに襲われたときが「入れ替え」のタイミングと

入れすればいい。うまくマッチングすると、「ここに来る る。だから日々お見えになる人たちの読書傾向にむけて仕 ない。「不易」の本はありがたいことに読む人の顔が見え とあるような気がした」と喜んでもらえる。旅の途上でお 棚づくりは読者の人たちとの交流を抜きにしてはでき

なので、その線上での出合いを用意しようと、コーナーを 見えになる方も、だいたい「本好き」「本屋好き」な方々 りの顔をイメージしながら「棚づくり」をしていくことに つくっている。一般的な市場の「流行」でなく、一人ひと

える。貴重な「はじまり」だ。人通りが少なくなるといわ どに位置する若桜橋のたもとにあることが一番大事と思 ったが、定有堂の基本は駅からつづく商店の軒並みの中ほ 他にも移ろいゆく本屋環境の変化についての問いもあ

うかと考えた。多くの人と出合うのは困難なので、「本を れるが、はじめから少なかった。で、問題は人とどう出合

『全国旅をしてでも行きたい街の本屋さん』

G.B. 2018

通」であること、本業からぶれないこと、が身にしみるよ 身の丈で制御できることの大切さ、持続可能な形態は「普 しだいに書店は小さい方がいいと思えるようになった。

の本屋」と名のるようになった。

うになって、「普通の本屋」という意味を込めて、結局「街

2018.05.08

減速する本屋暮らし (音信不通 24)

譲ってあげるというありがたいお申し出もあった。 仲間が先日訪ねてきた。隣にコンビニができたこともあり 「この機会に廃業する」というあいさつだった。取引先を 同じ市内だが久しく顔合わせすることのなかった本屋

らって明日につなげる。 るのだが、「本当だ」としみじみ思った。人はその宝をも て、いつかそれを誰かにあげるものだよ」と常々語ってい 編集長のドラメリアさんに「人は必ず宝を一つ持ってい

前のめりな人間は人を緊張へと追い込み迷惑をかける、と に受け止めている。 にスピード感を見せてはいけない」とくり返し忠告する。 いう人生訓のようだ。たぶんこれは貴重な忠告だと、真摰 人と人との付き合いでは、やかましやの女主人が、「人

む。

だけだ。 ことなく、根に滋養を送りつづけることが肝要だ。減速す のないときは、抗ってはいけない。花の咲きように心せく ることは停滞することではない。ベクトルの向きが変わる

トが便利だ。これは誰も否定できない。手のほどこしよう

るショッピングモールがあっても、三日で配達されるネッ

近頃は誰もが通販でことをすます。クルマで十分でいけ

定させた歩行ができる。数日前自分の書棚から久しぶりに 橋・湯所橋とつづく。減速してゆっくり歩くと空気感が変 自分を放れ自分に戻る。わたしの解釈だがそのように読 れる。「昇・降・開・合」の四つだ。天に近づき地に弾む。 た津村喬さんの本だ。減速したところには「気感」が生ま わる。身体の中心軸が直立する。急がないので、背骨を安 頭橋・鹿野橋・市場橋・御舟橋・鋳物師橋・有門橋・出合 で音楽を聴きながら袋川土手を歩く。若桜橋・花見橋・智 『気脈のエコロジー』を取り出した。日本に気功を紹介し 週に一度「減速」する日をつくっている。iPod shuffle

ージック」を中心にしたものだ。帰路にかかる頃には気-52-を遮断してイヤホーンで結界をつくる。音楽は、ドラメリ アさんのフェバリット・コレクションの「アジアン・ミュ わたしは未熟で気感を生じることができないので、外界

景を教えたいからだ。そのとき、自分のことは「岸辺の精高を教えたいからだ。そのとき、自分のことは「岸辺の精神になるので、周囲の往来も気にならない。川面をたゆたっ木の葉だけを視野にいれながら、ゆっくりゆっくりストウ木の葉だけを視野にいれながら、ゆっくりゆっくりストラ木の葉だけを視野にいれながら、ゆっくりゆっくりストラ木の葉だけを視野にいれながら、ゆっくりゆっくりストラ木の葉だけを視野にいれながら、ゆっくりゆっくりストラ木の葉だけを視野にいれながら、ゆっくりが発表に残す。

なんですから……。

もかまわない。つづけることだ。種は多様な方が残存しや多様な形態を豊かにする。だから本屋はどんなありようでれられると、本の世界は画一化する。見捨てられたときに、世に捨てられて本の世界は縮小しつづける。世に受け入

小さな声でささやけば、阿吽の呼吸で通じ合う。

霊」と紹介する。大きな声でいうと変に思われることも、

る。本屋とは○○だ、という文脈がおぼろとなり反転する。物語だ。減速することで空気感が変わり、形態変化が生じ自覚的だ。「音信不通」は、若桜橋の一夜からはじまった岸辺の精霊は冗談っぽいが、定有堂は岸辺にあることに

すいと進化論が教える

ところに生じるものは「気感」だ。この事態を「本のビオ○○も本屋だ、というふうに。減速し縮小する。縮小した

オトープですからね」、それになんたって音信不通が旗印が感じられるのは小さな世界だからだ。狭く生きる。「ビ「身の丈」という言葉は昔から好きだが、「昇降開合」・トープ」と呼んだ。小冊子「音信不通」の副題でもある。3-

2018.06.14

(参考)

津村喬

『気脈のエコロジー』

創元社

ミニコミ好き (音信不通 ②)

で、身の丈に集中することが必要だ。 り遂げる力とも言い換える。いずれも細々とした力なの エンスとブリコラージュと応える。やり直す力、自前でや 定有堂の底力、根元力って何? と聞かれれば、レジリ

する。定有堂で出合う人たちのことを、「本好き」「本屋 好き」「ミニコミ好き」「教室好き」と呼び習わしてきた。 二つ目までは耳慣れないことではない。 わたしの「ミニコミ好き」も、根はそんなところに起因

ことに気がついた。大学生と会話していると、「ZINE」 最近この「ミニコミ」という用語が通じなくなっている

ないという。「フリーペーパー」が一番身近なようだ。 転車で探訪するライフスタイルが、その雑誌のモチーフだ ので、街中との交流を意図する人が時々現われる。街を自 をつくると語った。地元の大学は、旧市街から離れている 「リトルプレス」は知っているが、「ミニコミ」は耳にし 十数年前に、博多出身の学生が尋ねてきて、「タウン誌

> ことがらだが、彼女がタウン誌という小さなメディアに求 … 」と驚きだった。いまだとSNSで容易に実現できる ディアが欲しいという理由だった。「活字じゃないのね: と意外な答えだった。自分が好きなイラストを発表するメ くわす「ヒト的な魅力」の両方だった。 めたものは、デザイン志向の「モノ的な魅力」と、街で出 った。「で、なぜ雑誌作りを思いついたの?」と質問する

のありようだ。 るかという方面にしか関心はない。それは「古いこころ」 わたしの考える「ミニコミ」は「ヒト」が何を考えてい

を完遂するこの自分くくりの便利な道具だった。 ニコミは 「自分くくり」 なのだ。 言葉や活字は自己同一性 更させる声でなく、同じ考えの人と同期していく声だ。ミ 少数者に小さく同意を確かめる小さな声だ。人の考えを変 への爆縮志向なので、「なにかをする」ために「なにかに マスコミが大勢を動かす大きな声なら、ミニコミは周囲の ミニコミ人間は外から固めていく外勢的志向でなく内 ミニコミはマスコミに対峙する言葉だ。ここが「古い」。

小学生の頃は壁新聞を作って教室に貼り出した。文章 4-54-

用意するのが自然な流れだ。

なる」というのが、とてももどかしい。いきなり書き始め

るのが身にそぐう。そのために媒体(メディア)も自分で

数校の学生と集う学生雑誌に加わった。(『大学公論』) 会人になったら「寺小屋教室」という自主講座に参加した。 取次(鈴木書店)を通じて生協や書店店頭にも並んだ。社 も宇宙人もののまんがも自前だ。大学生になったときは、 な形態であれ、これはパブリックなものだということだ。 限りなく簡素なつくりなのだが、かつてのミニコミ時代55-とあきらかに違うのは、書店が刊行している以上、どんっ 簡素でしかもパブリック、本屋もメディアなんだと知っ

だなと思った。他人もそう思うようで、この頃個人誌とい 「自分くくり」で人と付き合うとき、文集があると便利 うでもいいことだと思えてきたからに他ならない。パブリ 不通』としたのは、しかし、このパブリックもいまではど た瞬間だった。気づくのに四十年かかった。誌名を『音信

くくり」という端緒への回帰だ。 ュニケーションの話になってしまった。長い年月にわたる 「ミニコミ」は「自分くくり」だという自己完結的コミ

ックを捨てたところにあるものは、あいも変わらず「自分

2018.07.21

出来事なのだ。

きくなった。でもこれは沈黙へ向かう個人誌なので、じゃ

のが好き」という人が多かったので、混ぜてという声が大

あもう一つ別に作るね、という事で『定有』を創刊した。

小部数のプライベートな出来事だった。

しかし本屋を始めたとき、気がついたら書店名が「定有

うタイトルを選んだのだった。周囲には「本好き」「書く

に消えて沈黙するランボオ伝説に憧れていたので、そうい

わたしは『音信不通』という個人誌を作っていた。砂漠

うのが流行った。情報のネットワークが狭かったので、「自

分くくり」を文集にしておくと便利だったのだ。

ここでは『寺小屋雑誌』という紀要があった。

『大学公論』

『音信不通』 (第一期) 奈良敏行個人誌 『寺小屋雑誌』 寺小屋教室

『定有』 奈良敏行 他 編集発行

この二年は「第二期 音信不通」が月刊で続いている。小 有」「第二期 定有」「定有堂ジャーナル」と続出する。 やむことがない。「リーフレット定有」「ブックレット定 堂書店」となっていた。いまに至るまで、ミニコミ活動は

冊子小部数の「カストリ雑誌」(ここも古い)を意識した

(音信不通

れした人で、「引退したら、もちろん本を読んで暮らすよ」 店が閉店するとか、そんな「下り坂」の話題が交わされて が、直前には、近くのコンビニとか、少し離れた大きな書 身を引いたら、どうするの? と尋ねてみた。 唐突な話だ と屈託なく答えた。 いた。つまり「後生」の話だ。浜田さんはもともと浮世離 店頭で、浜田浩之さんとの雑談の折に、完全に仕事から

なのだ。するとその人は自然体で、「いや引退してから読 友人が「いつも本をたくさん買ってるようだが、よく読む かいて、その一人の方がある日、店頭で友人と出くわし、 むために、いま集めているだけだ」と闊達に笑っていた。 ヒマがあるな」と感心していた。高い地位にある多忙な方 「後生」を見据えているんだ、と敬愛の念を深くした。 そういえば、個人図書館のように本を蒐集する方が何人

無為の場所で、無為自然に行う「読書」の風景に胸がと

きめくのを感じた。

葉をしったとき、そんなものだと思った。思考は言葉の文 は書を捨てなければと本気で信じていたのだろうか。どう 脈のくびきの下にあるとはよくいわれる。こう問われた 行う読書、と答える。これは無用の読書で、狼疾という言 を読むことは両立しないと思えたからだ。街に出るために いちがっていたら、どうするか? 」という問いのもとに いう読書をやめたの? と聞かれれば、「理想と現実がく 本屋をはじめた数年は本を読まなかった。働くことと本

笑み』という著書が世に現れた瞬間だった。ここでは「現 実」が「日常」と読み替えられていた。導かれて少しずつ 日常の可能性に軸足をおいた読書を始められるようにな 大事」と迷いなく答える人と出合って驚いた。『死の中の でも、本屋をはじめて二年ほどしたとき、「当然現実が

「理想」をとると言わざるを得まい。

いる世界とが違っているとする考えが気になるかならな6-「わたしたちに対して現れている世界と、本当に存在して れた。こういう示唆は、狭く生きているわたしの心底にと ても響く。この本への入口はなんですか? と尋ねると、 いう本がこれからの読書シーンをリードするよ、と教えら 先日ある版元の人に、『なぜ世界は存在しないのか』と

場」を持てばいいのだろう? 街の中でも「縮小」がテー か。森羅万象の中に帰っていくために、どんな「意味の5-

いか」です、という。猛暑の八月はこの本を読むのに日を

費やした。

ろう? この事がいつも気になってならない。

店頭の読書の地軸もある日突然変わる。新刊があまり売

「世界」の中にいて「世界」の外をどうやって知るのだ

マとなっていると感じ始めたこの夏だった。

徳永進 『死の中の笑み』 ゆみる出版 マルクス・ガブリエル 『なぜ世界は存在しないのか』

る。データもそのひとつだ。上位の本は『かかわり方のま

は世界の外を知ることはできないが、世界の外に触れてい けずにランダムに並べる。後はデータにきく。わたしたち た。何が売れるかは自分を超えた世界だ。だから脈絡をつ

しにする。ちくま文庫が断トツに売れているのに気がつい

ところは「文庫で森羅万象」作戦だ。一冊ずつすべて面出 えられる文庫の目録から、丹念に拾い集めてみた。目指す れないので、考えあぐねた末、良書が収められていると考

農半Xという生き方』『自分をいかして生きる』だった。 なび方』『自分の仕事つくる』『ナリワイをつくる』『半

年齢にかかわりなく幅広い層が手にしている。

西村佳哲 『かかわり方のまなび方』 ちくま文庫

選書メチエ 2018

西村佳哲

『自分の仕事をつくる』 ちくま文庫

伊藤洋志 『半農半Xという生き方』 ちくま文庫 『ナリワイをつくる』 ちくま文庫

塩見直紀 西村佳哲 『自分をいかして生きる』 ちくま文庫 2011

無為自然の中でも、存在するためには、意味の場を必要

らかの意味の場のなかに現れること」とある。「意味」と は「対象が現象する仕方のこと」だ。 界はなぜ存在しないのか』の中に、「存在する」ことは「何 とする。それが「ナリワイ」をつくる、ということだろう 「居所を求める」、が一貫するのではないだろうか。『世

特異点

音信不通 ②

されている。その中に存在している、という。そのせいか

ないか、という議論だ。 元空間だが、じつは二次元世界のホログラム現象なのでは いう特集があった。わたしたちが目にしている世界は三次 科学雑誌を読んでいたら、「空間は幻かもしれない」と

白く思える える。手で触れるとどうなるのだろう? むろん触れな うのがホログラムの骨子らしい。平面なのに、立体的に見 か。次元が異なるのに感覚的に干渉しあえるというのが面 い。ホログラムと手の属している次元が異なるからだろう 次元の低いものから、次元の高いものを再現する、とい

汲々としているように読み取れる。 だ。まるで実在に次元の階層があるようで、その審判に いるのだが、ことさらに「実在」へのこだわりが強いから この前から『なぜ世界は存在しないのか』が気になって

なく、客観的な構造なのだ。わたしたちの方が感覚に包摂 感覚」が重視される。ここで感覚は主観的なものでは

> 論として精緻なプロットを展開する。夢が入れ子状になっ る。その中で、気になる二本を見た。『ブロブ』と『イン 世界は言語のコンテクストよりもシネマの映像の中にこ セプション』だ。前者は高次の生命体が人間をのみ尽くし そ存在しているとでもいいたげに、シネマの紹介が頻出す ている世界観を体験することとなる。 て一体化する、いわば一元論へ志向する話だ。後者は実在

意となり、なるほどシネマのプロットの中心を射るタイト らいいよ、と教えてくれた。内側に考えを植えつける、の まどかさんが側にいて、インとセプションを分けて考えた 悩んでいると、たまたま、『音信不通』執筆者の、うしき ルと知れる。大学生はすごい、と感心した。 と、「始まり、初め、発端」とあった。よくわからない。 インセプションって何なのだろう? 英和辞典で引く

支配下にある、という二重構造のことを言っている。 も、実在から逃れることはできない。これが人間の存在の 逃れることはできない。実在を知ることができないとして 仕組みなのだろう。意識存在でありながら、物質の法則の ていると少し話はややこしい。わたしたちは「実在」から 夢から醒めることはできる。しかし夢が多重多層になっ

- 内側に植えつけられるものは、ここでは「アイデア」 5-

という思いつき(アイデア)が存在しないからだ。わたし たものを取り除くことはできない。なぜなら、「取り除く」 だ。夢から醒めることはできるが、意識の核に埋め込まれ 観念のことだ。固定観念の輝きがオブセッション(妄想) の日頃の言葉に引き寄せれば、この「アイデア」は、固定 んな? 」「すっきりしたいです」少なくとも「かかわり みたい本を教えてください」と目を合わせてくる。「ど ' 昨日閉店時間をすぎても去らない男性がいた。「私が読5-方」方向を求めているわけではない。もうひとつ別の脈絡 っきり) が描かれている本だ。気に入ったようだった。 テ で売れている『日々是好日』をすすめた。こころの青空(す

『なぜ世界は』で面白かったのは、「意味」と「意義.

この固定観念、オブセッションと特異点は関係あるだろ

ある」とイメージを添える。5本の木に見えるものを、木 よって、同じものがひとつの手でもあれば、原子の束でも ること」。わかりやすい説明だが、「意味する場の違いに えられ方)は異なっているが、「4」であるという意義は 象との結びつき。2+2と3+1を考えてみよう。意味(与 その仕方。意義とは「仕方」でなく、指し示されている対 同一。ところで存在するとは「何らかの意味の場に現われ の言葉に含ませた思考のあやだ。意味とは対照が現象する

見えるし、木立ちにも見える。しかし求める意義は一つ、

本屋の中には、特異点がある。ここで本は数本の木にも

「本屋の青空」というものだと思う。

2018.09.15

は、知有り」、または「フクワウチ」と読む。現象の仕方、

「不苦者有知」という掛け軸がある。「苦と思わざる者

つまり意味は異なるが、意義は一つだ。

ーマは足元の「しあわせ」への気づきだ。

語の夢から醒めれば、書物の立ち並ぶ店内が広がる。本屋 の話だ。『なぜ世界は』を核にした一角もあるし、最近は、 夢から醒める、それを特異点の往来と重ね合わせる。言 森下典子 『日日是好日』 新潮文庫 西村佳哲 『かかわり方のまなび方』 マルクス・ガブリエル 『なぜ世界は存在しないのか』 講談社 ちくま文庫 2003

立ちと捉えることも同じ理解だ。

『かかわり方のまなび方』グループの本もはげしく動く。

フラジャイル

音信不通 ②)

地点を見つめる機会に恵まれた。 が高まっていたせいかもしれない。流れにまかせ、辿りつ いろな問い合わせにていねいに付きあい、自分の折り返し いた岸辺から、歩み直してみようという心境だった。いろ 十月は多忙だった。少し自分を変容させようという気分

とした。店内を一緒に見回ることとなり、意外なところで カメラマンの山本あゆみさんが鳥取出身と知り、少しホッ 民藝を訪ねて鳥取に入った流れだった。一行五人のうち、 の取材があった。暮しを提案するレーベル「フェニカ」で 面白がってくれるのが、勉強になった。 BEAMS(ビームス)というファッションブランドの方々

引き込まれ楽しかった。 たしだが、つい長話をしたくなるような加藤さんの人柄に ジオから電話インタビューをしてくださった。口下手なわ 数日後には、FM山陰の加藤さゆりキャスターが、スタ

二組の人たちが期せずして、開口一番に投げてきたの

問自答した。 ことはない、と思いながらも、でもなぜなのだろう、と自 点でそう言われていると思いますか? 」だった。そんな が、「全国の書店員さんの聖地と言われてますが、どんな

られるのなら、自分も開業したいという人が、たくさん訪 だった。すぐに「タウン誌」の人たちと親しくなり、加わ もいるし、うまくいかなかった人も大勢いる。 れが始まりだった。「本が好き」というだけで本屋が始め ねて来るようになった。現在も繁栄を重ねている著名な人 しが「本が好きなひとが本屋をはじめた」で、すべてはこ っていた朝日新聞の〇記者が紙面に紹介してくれた。見出 結局は、素人で始めたという距離の近さだったのだろう 一九八〇年十月に開業したが、鳥取に移住したのは七月 いまはそう思う。

ということになる。 こととなる。二つ目のキーワードはだから、「遅れて売る」 品揃えでなく、同じ歩幅で品揃えしていけばそれで十分。 お客さんに昨日教わって、今日仕入れる。当然少し遅れる ので普通に品揃えすれば足りる。二歩も三歩も先回りした 「ゆるい」ということでしょうか、と答える。距離が近い 「お店の特徴、キーワードは何ですか?」とも聞かれる。

「本屋をはじめて三十九年ともなると、お店作りも当6

言葉がすぐ思い浮かぶ。本屋の場所は変わらないのだが、 初と変わりましたか? 」とも問われた。「縮小」という を抜けた、「隠れ家」的な立ち位置になった。生活の圏域 最初は表通りにあったはずが、いつの間にか「けもの道

が三次元的に広がり、二次元的な街角は相対的に縮小して しまった。

はない。

本香樹実

文春文庫)と『紙の動物園』(ケン・リュウ61-

やすい」ことだ。でも受け身の踏込でもある。弱いだけで 早川書房)を選んだ。「フラジャイル」とは「きずつき '

れる」という基点を貴重なこととするのだろうか。本屋は つなのだろう。 お客さんの「記憶」を風景として残す、数少ない装置の一 お客さんは、「変わらない方がいい」という。やはり「遅

ている。本を読み語り合う環境が細いものとなっている。 「読書のけもの道」も、本屋へと抜ける数少ない細い道だ。 平成生まれ初の芥川賞候補、と将来を嘱望される水原涼 「縮小」は、本屋だけでなく、読者の読書環境にも生じ

さんが、「高校のとき通った」と口にしてくださっている。 水原さんの『蹴爪(ボラン)』講談社 2018.7 を雑誌『Hanako

冊を紹介させてもらった。 見出しはわたしの気持ちを汲み、「フラジャイルな心に

通った定有堂書店の店主」選ということで、連想できるこ

田康さんが書評でとりあげる。その傍らに「水原涼さんも

水原涼

ケン・ リュウ 『紙の動物園』

(ハナコ)』(マガジンハウス 1167 号 11.28 発売)で町

ついて考える2冊」としてくださった。『岸辺の旅』(湯

葉を生かしてくれた。 が扱っていた。編集者もだから、通じにくいはずのこの言 高校生のとき「fragile」という冊子を作っていて定有堂 イル」が「変わらない記憶」の触れあいになると思った。 いうこともある。水原凉さんとは、たぶんこの「フラジャ 「縮小」の世界では、狭いところだからこそ言える、と

2018. 10. 31

タウン 情報誌 『スペース』 スペース企画 湯本香樹実 『岸辺の旅』 文春文庫 2012 『蹴爪』 講談社

音信不通 ②)

遅れて読む

ね」と好意的な声かけをしていただいた。 自然な成り行きで雑談となり、「居心地のいい品揃えです 先日閉店間際に、遠方(滋賀)からおみえになった方と

なくて、よくも悪くも一人の身の丈の関心での品揃えが、 自分で読んだのですか? 」と問いかけられた。深い意味 読み取れた、ということのようだった。加えて、「みんな ではなかったのだと思うが、少し戸惑った。答えあぐねて、 売れ筋という外発的な動機付けで、ちぐはぐになってい

む本」ってどういうこと? と問い返されると、それほど そうだ。それは以前から自覚していたことだが「いつか読 明確には答えられない。 すべてがそうだとはいえないが、一部については確かに

「いえ、いつか読んでみたい本です」と口にした。

中にいて「世界」の外をどうやって知るのだろう? と自 とが違っているとする考えが気になるかならないか」が入 たちに対して現れている世界と、本当に存在している世界 口、と示唆されたことがある。わたしは日頃、「世界」の 前にある版元の人に、読書の動機づけとして、「わたし

> 版元のKさんが、この十一月に手紙をくださって、自社本 それを特異点(シンギュラリティ)とも呼んでいる。その 問自答を繰り返す。何かしらの認識上の結節点があって、 点を過ぎるようなものを感じる。 志」 をすくい取り、そして生還に導いたという話だ。 現実 その「脳」にアクセスを試み、意識の発火を確認し、「意 封してくださった。「植物状態」と診断された患者がいて、 だけど、『生存する意識』も参考になるかも、と資料を同 の識知が改変される。この新しい識知の向こうには、特異

は、「心」の特異点を超えた彼方から「心」を振り返る2-るべき生物体のなかに、滅びることを肯んじない心が生ま じ、「音信不通」を振り返ってみた。十五号に「必ず滅び プ」でわたしが読むべき本をノートしていただいた後の、 なおされ、一層自分でも困惑し戸惑った。カフェ「ドロッ 道筋がわからなくて…… 」と口にし、「意識?」と問い りたい、と思い続けているようだ。「心」のことを知るに の言葉を記している。この自己言及的な「心」のことを知 れ、しかも心自身がそれを知ってしまった」と木下清一郎 たのだろう? 少し自分自身に途方に暮れるところを感 店頭に戻ってからの会話だった。わたしは何を問いたかっ て、「結局わたしは『意識』について関心があるのだけど、 数日前、来訪された朝日出版社のHさんと話をしてい

れるゆえんだ。 必要がある。「シンギュラリティ」ということばが立ち現

だ、という視点のように理解した。 れた。文芸誌は毎月かかさず目を通しているという。「心」 の境界を超えて「心」を識知するには、「物語」が不可欠 Hさんは、ノートに読むべき小説家のリストを記してく 店内で話し続けたのだが、一角に二人の足が進んだとき、'は何を読めばいいですか?」と。閉店時間を過ぎてなおる 一冊の本を指さして — さんが言った。 「この本知ってま

込んでいたのを思い出した。一読し間をおかず再読した。 の動物園』と『もののあわれ』(ハヤカワ文庫)にのめり

物語、といわれて、ここしばらく、ケン・リュウの『紙

これこそがシンギュラリティを主題とする物語世界だっ たのだ。ここでは、生身を捨て去り仮想世界へとアップロ

数日後店内の「文庫の森羅万象」と名付けている一角に

絶しない連続性が魅惑的だった。

ードする生命を、シンギュラリティと呼んでいた。生を途

ふと目を留めると『脳はなぜ「心」を作ったのか』(ちく

のか? という問いに答える本だ。「心」は実体ではなく ま文庫)があった。どのように自分の心は成り立っている

神経ネットワークに偏在するシステムの便宜上の名称だ あった。もちろんわたしが質問攻めにしたのだ。「わたし のランチに始まり、カフェへと梯子し、夜九時前まで語り というのが結論だ。 月末には国書刊行会の — さんと会ったのだが、十二時

> 院化社会の話だと後で知った。伊藤計劃の『ハーモニー』 という内容で、病を治すように「心」を治療し消去する病 モジュールが下した決断を後付けで呼んでるだけのもの、 た。わたしが読むべき本の一冊だった。 て売れている本だった。たしかに「心」がテーマの本だっ すか? 『意志』は必要ないというテーマの本です」と。 (ハヤカワ文庫)だった。八年ほど前から店内でも突出し 「意志」は心の主体的なあり方の根拠でなく、「欲求」の

本」に囲まれていると、「いつか」というその気配はある のだが、ついに無縁に終わる本がほとんどなのかな、とも 八年の月日を要した。見ていても見えない。「いつか読む でもわたしが紐解くのに、 — さんとの出合いを待って

予感する。仕方のないことだ。

エイドリアン・オーウェン 『生存する意識』 みすず書房 2018 2018. 11. 30

ケン・リュウ ケン・リュウ 『脳はなぜ「心」を作ったのか』 ちくま文庫 『もののあはれ』 『紙の動物園』 ハヤカワ文庫 2017 ハヤカワ文庫 2017 2010

伊藤計劃

『ハーモニー 新版』

ハヤカワ文庫 2014

本屋 ごっ こ (音信不通 30)

ステーションみたいなものだ、という話だった。でった。外装に意味はない。外部がない空間、例えば宇宙のが、モールでは「内部こそがファサード」だという指摘った。いま七回転している。ひとつ強く記憶に残っているた本に、『ショッピングモールから考える』というのがあた本に、『ショッピングモールから考える』というのがあニ〇一八年の正月に帰省していたYさんが教えてくれ

「別に……」と「本おや」さん。

い。ただ本の固まりにそれぞれ中心核があり、それが「窓」と思った。むろん書棚に囲まれて現実に窓があるわけはなきなり縮小した話になるが、本屋だと「窓」のことかな、モールではファサードは「吹き抜け」のことらしい。 い

こい。。それは小カテゴリーのアイコンでもある。それを「窓」と呼ばれる。・時々棚の一角に表紙を見せた面展が出現す

来訪された。前日に大阪でイベントがあったとのことで、十二月十七日に、出版ジャーナリストの石橋毅史さんが

石橋さんにとって定有堂のファサード、つまり「窓」は、

大阪の本屋さん「本は人生のおやつです」 さんも同行され

るだけだ。石橋さんは「気になりませんか? 」と重ねる。示す。「本おや」さんは、「え? なに? 」と首をかしげさりげなく「本おや」さんを導いて、「どう? 」と鏡をんミラー」は重視している。今回も石橋さんの目に留まり、信じているから、場所はときおり移動するがこの「石橋さ棚に潜ませた「鏡」だ、とわたしは以前から信じている。

訪してくださった。わたしは、やはりこの鏡も「窓」のひまで「え?」という表情だった。そういえば、しばらくまで「え?」という表情だった。そういえば、しばらくまで「え?」という表情だった。そういえば、しばらく

を思い出す。「未来が、現在起きていることに構造を与えこれはわたしの独断的な類推だが、最近読んだ本の一文

ない。たんに「とまどい」といってもよかった。

「後ろめたさ」というのは、分かりにくかったかもしれ

とつだと思っている。

ている」。例えて「存在しない文の終わりは、存在しな4

ージを統一している。人は他者との比較(構造)でのみ自 己認識を手中にする。本を読むとはそういうことだ。鏡に 在は形のないもので、概念レベル(構造)でのみ自己イメ しないものとは未来だ。鏡を見た瞬間、未来が変わる。現 「ゲーム」だと意表をついて説明する一文に出合った。

いが文に構造を与えている」とも書き加えてあった。存在

が地すべりを起こす。じつは何かが変わったのだ。 自分が写り、身体レベルが出現する。そして概念(未来) 「 音信不通」 執筆者の 「 うしきのどか 」 さんが、 環境大

学のショップでちょうど仮設書店「三週間書店」を開催し

た大学の「ファサード」だ。大学にはファサードが欠けて チ・ミーティングも兼ねたものだ。これは牛木さんの考え ているので、三人で見学に行くことにした。学食でラン いる。そしてそれは「本の売り場」だというのが、牛木さ

レジがスムーズでなかったと訝しがっていた。じつは、学 石橋さんと「本おや」さんが、レジに本を持って向かった。 むろん売り場の方々の協力と理解も大きな動機づけだ。

んの発見とチャレンジだ。

間隙かかるやり方だったのだ。 生を支援するため、手数料なしでの別会計処理で、用意し たリストに書き込み、つり銭も別サイフという、とても手 「本屋ごっこ」だったのだと気がついた。その夜、湯船の それを聞いて、学生と売り場や多数の人を巻き込んだ

> とつなんだと思った。 変わる。大学での「本屋ごっこ」、これもまた「窓」のひ 「ごっこ」という言葉に出合い、それまでの文脈の意味が

中で読んでた本で「ごっこ」というのは勝ち負けのない6-

牛木さんには、この「ごっこ」がきちんと見えていたの

鏡と言葉は、石橋さんにとって、同質のものだったのだろ 鏡に出合い何かが変わる。言葉に出合い何かが変わる。

うか?

2018.12.20

東浩紀 ・大山顕 『ショッピングモールから考える』 幻冬

井崎正敏『<考える>とはどういうことか? 』 洋泉社 2008

身の丈の本屋

音信不通 ③

だが、夕方六時からお店を開けてくださった。久しく会っ ていない京都大垣書店の平野篤さんやその友人福嶋聡(ジ つです!!」(略称本おや)を訪ねた。月曜は定休日なの 一月二十四日(月)に、大阪・堂島の「本は人生のおや

ュンク堂)さんとも、再会の機会をご用意いただいた。ご

社)を読み込み、たくさん付箋を貼っていて、「奈良さん 主人の坂上友紀さんは、人をもてなすのが好きなのだ。 て「量が質に転じる」、この三つのキーワードが気になる、 の言葉がここにいくつかある」、「往来」「身の丈」そし 福嶋さんは、石橋毅史さんの『本屋は死なない』(新潮

新規のお店に、ちなんだ名前を付けた。 べきだ」と語り、安藤哲也さんがとても賛成してくださり、 「普通の本屋は往来にある、ここに始まる物語を大切にす 「往来」は街の本屋の基盤だ。むかし、シンポの中で、

と発問してくれた。

ウンジで深夜十一時半くらいまで話込んだ。 ら遅れて見えた。会が引けた後、鳥居さんは歩いて十五分 ほどの、わたしの宿(R&B東梅田)まで送ってくれ、ラ 十二月に会ったばかりだったが、鳥居貴彦さんも遠方か

語るべきだったと悔やんだ。その思いを本当は託したかっ しかし、鳥取に帰って、「身の丈」について鳥居さんに

というか、大事にするものはもう日常しかない、といった 本屋は身体感覚を越えない。本屋の「普通」とも言いかえ 心にいつも、「普通の本屋」という言葉を据える。普通の 本屋はここで、選びとるもう一つの生き方となる。そして 気づき、これが「初発衝動」だ。そして暮しのなかのサイ クルに本屋が入り、オルタナティヴとして本屋を生きる。 |身の丈の本屋|って何んだろう?| 日常を大事にする、

えなしに成立する「小さな物語」だ。 当化する背景が不可分にともなう。そんな大きな物語の支 物語は、「小さな物語」だ。「大きな物語」には状況を正 いう意味だ。理由があるから物語が生まれる。でも本屋の で長く使ってきた、それは「人それぞれに理由がある」と 本屋には物語がある。「本屋的人間」という言葉も好ん

身の丈に完結している世界を、外部が解釈すると別の6-

ものになりやすい。

ところまで届いてしまう。をころまで届いてしまう。をころまで届かなくていい。声が大きいと、届かなくていい遠くまで届かなくていい。もう一つは、狭いから声が動」に終始するということだ。もう一つは、狭いから声がを二つ思いつく。一つは、はじまりの場所が終わりの場所を二つ思いつく。一つは、はじまりの場所が終わりの場所を二つまで届いてしまう。

もちろん自分にも。だから「本」を商う。寡黙な人間が饒な声にならない。「個性」とは誰にも理解できないものだ。何度でもやり直せる。二、身の回りのものを頼りとする。「本屋的人間」って「個性」のことなんだろうか?「個性」な声にならない。「個性」のことなんだろうか?「個性」な声にならない。「個性」のことなんだろう。本屋的人間のこころこの「初発衝動」とは何んだろう。本屋的人間のこころ

だろうか?
「量が質に転化する」。わたしは「特異点」とか「シンギュラリティしていく、というと奇妙ない。多様な本屋的人間の姿勢があるだけだ。本屋は「人」点を過ぎて生じる。書店にはセオリーがあるが、本屋にはギュラリティ」という言葉が好きだ。本屋は書店から特異ギュラリティ」という言葉が好きだ。本屋は書店から特異

舌な書物を扱う。日々のたのしさはこの相克にある。

な人にいわれた。 良はもう終わりました」ってくり返してたよね、と身近 っこんなことをいろいろ考えてたら、「あれ? 前に、奈6-

ことによって原因が発生する、そんな狭い場所の物語を…芻するという意味だ。はじまりの場所がおわりの場所、そ丈」から出ることをやめ、「初発衝動」だけを繰り返し反丈」から出ることをやめ、「初発衝動」だけを繰り返し反

2019. 01. 28



(参考)

石橋毅史 『「本屋」は死なない』 新潮社 2011

探求のかたち

音信不通 32)

試みに尋ねたのだった。きちんと言ったわけでもなかった む」という一語が気になるけど、この先どうします? と 近づいた瞬間に発した問いだった。「百尺竿頭に一歩を進 ので、解答は聞きそびれてしまった。 たかはもう覚えていないが、お茶をしながらふと距離感が この二月も一期一会の出合いが多かった。それが誰だっ

激的だ。「AI」への理解が欠かせない時代が到来してい ま現代文アンソロジー・シリーズに『科学評論選』が加わ ら時折お見えになる、国語教師の小原さんに、平台のちく きに店頭と竿頭が混濁するのもおかしい。先日も県中部か る。その中で「意識の不思議」に興味を持った。出典元の ってるよ、と教わった。たしかにまとまった科学文集で刺 『脳の意識 機械の意識』中公新書もいきおいで読破し 探求のはじまりはこの「先端に漂う」ような風景だ。と

色はあくまで脳が創りだしたにすぎず、外界の実体は電磁 「日々、私たちは総天然色の視覚世界を体験するが……。 た。これはさいわい店頭にあった。

だったのだろうか。 た。竿頭を一歩踏み出せば「電界と磁界の波及する状態 波の飛び交う味気ない世界だ」という一文にびっくりし

遭遇もあり斬新だ。人類が考え得るオルタナティブの限り ド・チャン『あなたの人生の物語』、ケン・リュウ『もの が数か所にあるの?」と問われた。「不思議だけど、い こちに落とし穴のように点在するのが次の四作品だ。今日 のあわれ』『紙の動物園』(ハヤカワ文庫)、そして『マ た。 充分お互いの意は尽くせてると感じたからだ。 テッ も県外から来たという女性のお客さんに「どうして同じ本 するようにも感じる。竿頭つながりでいえば、店内のあち ではあるが……。 ーフがある。テッド・チャンの作品は非人類的言語者との 人類」「人間が電脳空間にアップロードする」というモチ 五か所に並べられている。 ケン・リュウには 「電脳化する ルチバース宇宙入門』(野村泰記・星海社新書)が、四、 いですね」という感想だったので、とくに説明はしなかっ この竿頭と店頭はもちろんすべてではないが少し同期

れだけのことに興味があるということだが、「ここにこう 「かたち」に世界への入口の扉を感じる。簡単にいうとそ 見ているものと見えているものが同じではないという

はすべてエラーなのだ。だからアイデンティティなんてな されてしまう」と異星人が人間に指摘する。つまり「記憶 を再活性化しなければならず、その過程で神経連絡を変化 リュウの最新刊『生まれ変わり』(ハヤカワ・ポケミス) にも、「記憶を取り戻すために、あなたは一組の神経連絡

くなる。いつか誰かが答えてくれるかもしれないからだ。 百尺竿頭で人に出会ったとき、ふとこんな話をしてみた

んの必要もないでしょうと、これはじつは洗脳への論理な

「こころ明らむ」だけなのだけど……。 この月多く出合いを重ねたのだが、大阪から見えたばか

だがKさんは井筒俊彦全集を所蔵していることを大切に している人だった。いろいろ教わるうちに、二十年ぶりに りのKさんとは大事な交わりを得た。雑談の折に知ったの

浮かんでいる。

い。「本質」は虚構である。この了解から井筒俊彦は「本 質」を階梯的に考究していくようだ。本質が定義であるな されたもの。だから存在そのものに触れることができな た。意識は言葉でかたち作られている。本質は言葉で定義 『意識と本質』を読了できた。手元に残しておいてよかっ

らば、何度も定義し直さなければならない。「定義」の中

がここに存在しないというのはマルチバースの考え方に に「世界」が存在しない、ということだろうか。「世界」

井筒俊彦

『意識と本質』 岩波文庫

い。外部を包むどこかにあるものだ。 「本質」とマルチバースを重ねあわせて考えるのも変だ

に存在する。「世界」はいずれの泡の内部にも存在しな一似ている。泡のような境界面が、数えきれないほど同時69

る。「『本質』とは存在の限定付け、すなわち存在の部分 てしまっては理解が浅いだろうか。本質をこう定義してい 『意識と本質』のテーマを「本質の彼方へ」とくくっ

は、断片的。あるいは局所的限定を意味する」と。

うではない。一挙に示される図像的なものだった。 因果関係を生成する。 テッド・チャンの宇宙人の言語はそ 途上だが、探求のかたちは、このような道筋にぼんやり 意識は言語に限定される。人の言語の特徴は「線状」で

2019.02.24

ケン・リュウ 『生まれ変わり』 ハヤカワ・ポケミス 野村泰記 『マルチバース宇宙入門』 星海社新書 テッド・チャン 『あなたの人生の物語』 ハヤカワ文庫 2003 渡辺正峰 『脳の意識 機械の意識』 中公新書 ちくま現代文アンソロジー 『科学評論選』 筑摩書房 ケン・リュウ 『紙の動物園』 ハヤカワ文庫 2017

普通の本屋 (音信不通 ③)

ではという選択肢だ。

は? 名乗りは今をおいて他にない。伏竜のままでいいの

いうことだった。
いうことだった。
いうことだった。ここへ導いたのは石橋毅史さんのいくつかの本とだ。書店でもなく街の本屋と絞り込んでいる経緯に興味をた方がいた。 ランチやカフェと所を変え長時間話し込ん ひと月ほど前に 「街の本屋」 をはじめたいと相談にみえ

にか背水の覚悟と事情があるようだった。(とき)に利あらずというか、伏竜が登るための気流もみ(とき)に利あらずというか、伏竜が登るための気流もみていねいに話をうかがったのだが無理だと思えた。刻

縮小してしまったのだ。

恥ずかしければ「準備中」とカッコ付けすればいいのでろうか。書店名を決め、名刺に名乗りとして記すべきだ。さをみると、もうすでにあなたは「本屋」なのではないだうでしょう」と提案した。その不退転の確固たる意志の強「では成功しなくてもいい本屋をはじめるというのはど

なこか寺別の是案のようだが、「身の丈」を云がれないとい①いつでもやり直しが利くこと②手持ちの材料をいかす。成功しなくてもいい。でも二つ大切な注意項目がある。

すべてだ。そう繰り返し書いてある。関心が身の丈以下にすべてだ。そう繰り返し書いてある。関心が身の丈以下にきだいったんだ。住む人がはじめて見えた。二日で読了し、「人」を中心に書いた『僕はなぜ小屋で暮らすようになったか』も古書で求めた。すべての始まりは、小学生のときに突如も古書で求めた。すべての始まりは、小学生のときに突如ち書で求めた。すべての始まりは、小学生のときに突如ちずべてだ。そう繰り返し書いてある。関心が身の丈以下にすべてだ。そう繰り返し書いてある。関心が身の丈以下にすべてだ。そう繰り返し書いてある。関心が身の丈以下にすべてだ。そう繰り返し書いてある。関心が身の丈以下にすべてだ。そう繰り返し書いてある。関心が身の丈以下にするにかける。

インフラ供給を必要としないでやっていける本屋が、「成70の取次を前提とした「正常ルート」を受け付けない本屋だ。とは「オブグリッドの本屋」 だと思った。インフラとしてんだ家のことをいうらしい。 「成功しなくてもいい本屋」わかりにくいことばだが、外部からの電気や水の供給を拒わかりにくいことばだが、外部からの電気や水の供給を拒っています。

に残るものが「身の丈」だ。 功しなくてもいい本屋」だ。ライフラインを外して、そこ

縮小と同義で、ここではセレクトと自分の世界が重なる。7-

信不通』三十二号で鳥居貴彦さんが「ショハツショウドウ」デルとなるだろう。初発衝動はわかりにくい言葉だ。『音の起爆力と同じものだ。継続し生き残ればそのまま成功モじる本屋だ。でもこれは実はベンチャーのイノベーション成功しなくてもいい本屋は彼のように「初発衝動」に殉

が文に構造を与えている」と述べた。 構造を与えている」「存在しない文の終りは、存在しないえにある本を引用して、「未来が、現在起きていることにと言い換えていたが、それが正しい用法かもしれない。ま

…………、」と「、」(読点)へ向けて展開する構文で「…「ショハツショウドウ」を「文体」化すれば、「○○○

………、」の先が未来だ。わたしのように「終わった人」…………」と「」(読点)へ向けて展開する構文で「…

して未来は「…………。」の向こうにある。「未来」の位は「○○○………、○○○………。」と延長する。そ………、」の先が未来だ。わたしのように「終わった人」

ここでは「謎」のままでよいかと思う。した語り(ナラティヴ)なのだが、まだ時間があるので、した語り(ナラティヴ)なのだが、まだ時間があるので、しの核心の部分だ。「音信不通」は言葉目体未来を先取り取りが違うこととなる。謎々のような話だが、じつはわた

だ。つまりセレクトショップとなる。クオリティの追求はオフグリッドのスモール本屋はそのまま身の丈の体現

でいる生成の現場に立ち会うのが喜びだと言い換えても流れから好きなものを拾い上げて並べてみせるのでなく、流れから好きなものを拾い上げて並べてみせるのでなく、ったイングで取次の転任の方に訊かれた。でも少し違う。 定有堂はセレクトショップなの? と今日のランチミ と

ではないということなのだが、このことを「伝える」ことだから、定有堂は「普通の本屋」なのだ。オフグリッド

はいま難しい。

2019.03.26

(参考)

石橋毅史 『本屋な日々 青春篇』 トランスビュー 2石橋毅史 『本屋は死なない』 新潮社 2011

同 右 『僕はなぜ小屋で暮らすようになったか』 同文舘出版高村友也 『スモールハウス』 ちくま文庫 2018

この先の本屋

音信不通 ③)

到達したらその回終了で、またやり直さねばならない。一 どんな「ナリワイ」であれ変化しつづける必要がある。

って考えるのが好きだ。いまは京都の鳥居貴彦さんにとて と「ショハツショウドウ」(@鳥居さん)に回帰する。 わたしは「学び系の本屋」なので、他人の視界にのっか

層拡大するかそうでなければ縮小するしかない。縮小する

せてくれる。「ナリワイ」の宝庫のようだ。この視界が欲 しくて、定有堂を開業する年のはじめに少し彷徨ったこと わたしに京都はとても不思議な街だ。豊かな多様性をみ も関心を持っている。

もある う成り立ちで、まったく違う生き方」なんだ、と本質をつ きるあるひとが、小さな商いの本屋をさして、「彼らは違 いた教えを示してくれたことがあった。 地元の老舗大型書店の人でありながら町衆の気概で生

成功しなくてもいい本屋を始めるというのはどうでしょ

年の暮れに街の本屋を始めたいと訪れた人に、「では、

それが「この先の本屋」だ。 は、ここに「違う成立ち」「違う生き方」があるからだ。 った。一味同心の感じでうれしかった。響きが魅惑的なの 本屋』の響きのなんと素晴らしいこと」とお便りをくださ 本・長崎書店の齊藤仁昭さんは、「『成功しなくてもいい

う」と提案した。この言葉を『音信不通』で目にとめた熊

学ぶべきものはここにあると思える。 「違う成立ち」「違う生き方」って何だろう。わたしが

も知りたかった。三月半ばに大阪で会ったときに店名は未 九日に鳥居さんの本屋が開店したので足を運んでみたか った。店のたたずまいとそして立ち位置(ロケーション) 四月十五日(月)に久しぶりに京都へでかけた。三月二

るという事実に、とても感動した。間口二間四方だろう しかし新しい間尺の、つまり「この先の本屋」がここにあ 本屋は時代の間尺に合わなくなってどんどん消えていく。 いた。「雅号」のようなものなんだと理解した。 お店は「ショハツショウドウ」を体現したものだった。

命名済みだ。開風は好きなヨットにからんだものと前に聞

確定だったが、すでに「開風社 待賢ブックセンター」 と

ら湧き出たようにここにある。 のところわたしが夢見てきた「縮小する本屋」が、地面か か? とても小さい。 そして営業も金土日だけと短い。 こ

「違う時間」と「この先」は同義だ。 し続けていくのか、考えたいと思います」と記していた。 鳥居さんは少し前の便りに「違う時間をどう淀みなく流

ドはとてつもなく広い」と付け足した。彼は「たしかミシので並んでいる本も少ない、でも『こころ』のバックヤーに居を移した吉田海将さんにぜひ訪ねてみてとメールしこの感動をどう言葉にしていいか戸惑い、数年前に京都

知りたかった。
知りたかった。
知りたかった。
はは以前「図書館と書店」の記事連載(朝ところだった。彼は以前「図書館と書店」の記事連載(朝れた。いいタイミングだった。五月から東京に転勤になるれた。いいタイミングだった。五月から東京に転勤になるれた。いいタイミングだった。近は「たしかミシドはとてつもなく広い」と付け足した。彼は「たしかミシドはとてつもなく広い」と付け足した。彼は「たしかミシ

を作り込まない自然体はすがすがしい。

「り込む」しないということでもある。鳥居さんはデザインしない。あるがままだ。「評価」(ブランディング)る。「身の丈」にはじめるということだが、「デザイン」(で手持ちの材料を活かす。ここに「この先」の次元があるがあり込まない自然体はすがすがしい。

この言葉があまりに預言に満ちているので、「何を?」 鳥居さんは「待っているんです」とそのことを語った。

と聞くことはためらわれた。

さった。お店の写真は一枚も撮らなかった。 「開風社」 待賢ブックセンター」はこの日は非営業日で、「開風社」 待賢ブックセンター」はこの日は非営業日で、とが大事ですとも教えてくれた。

2019.04.21

かったからだ。

鳥居さんのレイヤーは写真に写せるものだとは思わな

参考)

京都市上京区大宮通椹木町上る菱屋町818「開風社 待賢ブックセンター」 (店主 ・ 鳥居貴彦さん)

果敢な本屋たち

音信不通 ③)

出版流通の世界で「常に果敢に発信しつづけている」一点 に興味がある、という単刀直入の返答だった。 屋なので戸惑うところもあり動機を訊ねた。困窮つづきの 先日県内の情報誌から取材の打診があった。下り坂の本

降りてくる響きにも聞こえた。 ここでこの「果敢」という言葉に出会い驚いた。天から

分の命や将来の情勢がどうなるかなどは構わず)やろうと 思う事を思い切ってする様子」という少々偏った解釈の、 『新明解』の理解を、ここではとりたい。わざわざよけい 辞書的にはいくつかのグラデーションがあったが、「(自

わせというと、最近「レイヤー」という言葉を好んで多用 な」と形容すると見えないものが重ねられてくる。重ねあ している。見えているものと見えないものの積み重ねをう 「小さな本屋」というと見えてるそのままだが、 「果敢

なことをする、そこを「果敢」と呼ぶ。

するものとして考えたい。共通するのは過剰な熱量だろう まくとらえた言葉だ。「果敢」と「レイヤー」を何か関係

「レイヤー」は ①階層・積み重ね ②画層・シートを重

ねる(グラフィック・ソフト)と説明される。

れている。「オフグリッド」というキーワードが効き目だ。 る。そのせいか気がついたらここ数カ月で五十冊ほども売 に『スモールハウス』(ちくま文庫)を話の枕に振ってい 最近「小さな本屋」の立ち位置を分かりやすくするため

外部からのライフラインに依存しない独立系なのだ。この な小さなお店が集まっている。この似ているところにもレ 「小さな」というのも、レイヤーの一つなのだ。 ここ最近気がついたのだが、街の一角になぜか似たよう

イヤーを読み取れる。

は、①競争型(攻め)②ストレス耐性型(受け身)③擾乱 坂という環境を果敢に選ぶ。 高山植物のようなストレス耐性型と見做せるだろう。下り 適応型(根性)と階層化する。小さな本屋は受け身なので、 ーで語る『植物はなぜ動かないのか』(ちくまプリマ―) ぐ魚、深海を泳ぐ魚と棲み分けがある。生存競争をレイヤ 例えば海の世界でいうと、海面近くを泳ぐ魚、中間を泳

観はすばらしい。安定した環境では強い植物が力を発揮4-ではなく味方」という気づきがそこにある。前掲書の世界 雑草の生存戦略は「争わない」ことらしい。「環境は敵

する。弱い植物は、予測不可能な変化が起こる不安定な環 境を選ぶ、と明快だ。

いきなり「何か」をする魂のことだ。それは「しなくても とだ。それは何かをするために何かを準備するのでなく、 定有堂でいう「果敢な」というのは「ミニコミ魂」のこ

いい」ことを見極めるところに生じる力だ。

す。レイヤーの二つ目の意味に注目したい。画層の説明だ。 この「ミニコミ魂」 は階層を縦断し、 レイヤーを生み出

まり複数のシートを重ねあわせて一つのレイヤーとする。 グラフィック・ソフトはシートを重ねることができる。つ

畳んで重ねようとする熱量を「果敢」といっていいのかも しれない。変えてよいもの、変えてはいけないものを身体 の本屋」になる。「街」は画層レイヤーなのだ。この折り 「小さな本屋」が画層のようにレイヤーを構築すると「街

取県立図書館隣りの中庭で本屋の集団に遭遇した。第2回 さて果敢な本屋さんたちだが、五月二六日(日)突然鳥

的に明確にすると、立ち位置が単純になり、果敢な立ち姿

となる。

ひさコーヒー書販部」「SUIRI」「歴史の泉書店」「県立 トットリヒトハコ」と銘打った「一箱古本市」だ。個性的 で果敢な店名を一つひとつ記しておきたい。「白壁書房 「ぱんだ書店」「黄砂屋」「さすらいのアリクイ」「たに

> 晴れ舞台と、青空の下に輝いていた。 ものお店」「Chiezo」「Books 腸感冒」「いろはに十色」 「明日堂」。この壮観さに驚いた。一人ひとりが、人生の

たち」「ぽっと BOOKS]「子ども文庫ピピロッタ」「こど

図書館の出前図書館」「ワン・コイン」「アカゲラブッ --

クス」「吉備川辺亭」「だるぶ××くすとゆかいな仲間 '

こで確かめるような気持ちで、買い求めた。定有堂に戻っ ま手元にない本ばかりだった。でも自分の存在証明を、こ て、たまたま来店した秦阜梅林さんに一冊プレゼントした 十冊ほど購入した。後で気がついたが昔持っていて、い

のはポール・オースターの『幽霊たち』だった。

な人が一緒に本をたのしむイベントです」と語っている。 めて個人的な体験です。その一方で、一箱古本市はいろん 「一箱古本市」の伝道師南陀楼綾繁さんは「読書はきわ 「一緒に」という言葉にも、果敢なレイヤーの一つを発

ポール・オースター 『幽霊たち』 新潮社 『スモールハウス』 ちくま文庫 『植物はなぜ動かないのか』 ちくまプリマ 『ヒトハコ創刊号』 書肆ヒトハコ 2018 2016 2016

稲垣栄洋 高村友也

『とっとり NOW』

季刊

鳥取県広報連絡協議会

南陀楼綾繁

音信不通

36

定有堂のレイヤー

ない輩のことだが、定有堂もそのように、すべてが書物頼 りで物事が進んでいる。 ブッキッシュというのは、世の中を書物でしか体験でき

無意識なのだ、と敷衍する。

は固い。固いから上の具材の階層を下支えできる。結果各 ンサンドのようなイメージだ。しかし、一番下の層のパン 階層はこの底部に世界観を決定されている。 最近レイヤーという言葉をよく用いる。ちょうどオープ

では「本のビオトープ」にあたる。『キュレーションの時 その固いパンの話だ。オープンサンドの名称は、定有堂

代』という本のなかでビオトープという言葉に出合った。 化する世界』もある。ビオトープがレイヤーになっている ちいさな圏域だ。この圏域に定有堂の本の世界がある。 読み書きのリテラシーという生態系が維持されるための ずいぶん遅れて気がついたのだが同じ著者に『レイヤー

読み書きリテラシーではなく、テクノロジーへと変貌して と重ね読みする。しかしすでにここでは固いパン(場)は、

う固いパンに支えられる故に接続されてしまう。しかも い」。リテラシーが一つの大海となったとき、それをメデ の予言するところだ。主張の核心は、メディアは私たちの ィアと総称する。これは『大人のためのメディア論講義』 「私たちは(テクノロジーの文字を)読むことができな そこでは孤立していたビオトープが、テクノロジーとい

ティブというキーワードが方法論として立ちあがる。 出来事の両義性を手がかりにして読みを変貌させる、ナラ すという話だ。「わかる」と思う気持ちは、感情以外のな 示すものとして存在する。これはストーリーは意味をめざ とが、読者にとっては大切だということだろうか。ここに (物語内容)を、自分の身の丈の因果関係に落とし込むこ にものでもないという。 時間順に叙述されるストーリー ヤーを見ていくと『人はなぜ物語を求めるのか』が方向を 豊かにナラティブの展開をみせる物語としては、ケン・ これらが定有堂レイヤーの固いパン(場)だが、各レイ

線状展開の地球言語に衝撃を与える話に驚く。 「人間的」76-のが『あなたの人生の物語』だ。異星人の言語の図像性が に多様なシーンを示してくれる。それとぜひ付け加えたい リュウの『紙の動物園』と『もののあわれ』が短編集ゆえ

という認識の限界を越境させるのが共通の企てだ。 に出合うことではないか。「未知」は人間的知見を拡張し ブッキッシュな読書の眼目は、「知」ではなく「未知」

宙論』はそんなときに現れた。「世界」が全体を包括できげることによってこの壁は俯瞰できる。『マルチバース字ゆえに知りえない」という境界性だろう。視座の階層をあてくれるからだ。もし人間に壁があるとしたら「知ってる

所に踏み分けていかないだろうか。視座を見定めれば「知りえないゆえに少し知る」という場

るのでなく地域的なくくりへと格下げされる物語だ。そう

認識は天空を舞うことになる。ブッキッシュだから…戸し路がケートリカス・オー

が青空だ。だから「青空」とは肯定することのコトバ的表どのようにして立ち現れるのだろう。引き算して残るもの…。 青空ということばは好きでこれもよく用いる。 青空は

か』という本がある。本当の強さとはなにか、と問いかけりの大もレイヤーのひとつだ。『植物はなぜ動かないのれだ。そして身の丈が残る。

この定有堂レイヤーの扉として『スモールハウス』というのだろうか。
乱を身の丈に縮んでやりすごす選択だ。レジリエンスというのだろうか。
という本がある。本当の強さとはなにか、と問いかけか』という本がある。本当の強さとはなにか、と問いかけか

りこまないということも付け加わる。有堂ビオトープのつながり合いは「学び系」。結論をつくリッド」。ここでは独立系と言っておこう。ちなみに定っか本を一歩前に押し出している。キーワードは「オフグ7-

佐々木俊尚 『キュレーションの時代』ちくま新書 2011

石田英敬 『大人のためのメディア論講義』 ちくま新書 2016佐々木俊尚 『レイヤー化する世界』NHK新書 2013

ケン・リュウ 『紙の動物園』 ハヤカワ文庫 2017

稲垣栄洋 『植物はなぜ動かないのか』 ちくまプリマー新書野村泰紀 『マルチバース宇宙論入門』 星海社新書 2017

高村友也『スモールハウス』ちくま文庫 2018

2016

音信不通 37)

うか。

本屋の青空

捨てがたい語感があって手放せないでいる。本屋と青空は 空の関係をうまく説明することはたやすくない。それでも 「本屋の青空」ということばを好んで使うが、 本屋と青

同じようなものだと思っているのだろうか。

久しくじつは本当の青空を見たことがない。バンアレン

たしの「青空」は架空の青空だ。 ことだ。街に興味を失うともっと空をながめるだろう。わ ないというのは視界が街に閉ざされているというだけの 帯の崩壊で裏日本の鳥取にも青空が増えている。青空を見

ような」ということばがある。視野を妨げるものがないわ ければ青くはならない。 けだ。晴れ上がるというのは雲がない空だ。でも大気がな 青空は破壊と創造の境目にある。青空の形容に「抜ける

ことができる。

最近「物質は粒子であり、同時に波動である」「物質と

宇宙が広がり、光が突き抜けることが、可能になる状態を いう。一つの終りと一つの始まりの結節点だろうか。 宇宙の晴れ上がりという言葉もある。ビッグバンの後、

> 空はじつは同義だ。 本屋は路上と接続されている方が楽しい。この接続と青

青空には光がある。本屋には本がある。本は光なのだろ

だ。なにか突き抜けた解放感がある。 時間が生まれる。この特別な時間も祝祭という意味で青空 でない市が立つ。いろんな業種がブースを並べる。特別な バザールということばもある。公共性の高い路上に常設

本屋には解放感があるといってもよかったのかもしれ

先日定有堂の店内で小原さんと長話をしていたとき(客

路上でとりとめもなく話し込んでいた。一人の友人は「て な話をしていたなと後で思い起こした。それも教室でなく って受験しなかった。いま思えばそれは少し変だと気づく つがく」をしなければならないから進学する暇がないとい の少ない休日の昼下がりだった)、高校生のときよくこん

重なり合ってくるような気がした。この飛躍がじつは「て78-シュタインを超える』という新書が典拠のようだったの いうのはすごくのろい光」という議論を読んだ。『アイン で、これは古書で取り寄せた。なんとなく仏教と物理学が

つがく」なのかもしれない。

いたらこの著者は理系の出身でのち仏教者となったひと版の『般若心経』(佐々木閑)だった。「なぜ? 」と聞有堂のあそこの棚にもあるよ」と導いてくれた。NHK出ので、いつも正面から応じてくれる。「そのテーマなら定ので、いう話を小原さんにした。小原さんは国語の先生な

この禅僧の方と店内で遭遇し、問いを投げかけた。同じ著遅れて紐解いたことになる。縁だろうかしかもその数日後無料で配布されたもので印象に残り必備の本にした。一年た本だった。しかも自分のギャラで生徒の数だけ購入され

禅僧の方が、昨年カルチャーセンターでテキストに採用し

だから、同じ道筋をたどって説明してくれるよ」と。その

夜から読み始めた。ふと思い起こしたら、この本は市内の

これは品切れだったので、取り急ぎ県立図書館で借りだし者に『仏教は宇宙をどう見たか』というのもあると教わり、

高校生のときの「てつがく」は「果」があるから「因」高校生のときの「てつがく」は「果」があるから「因」の全体なのだと明快に解き明かされる。の全体なのだと明快に解き明かされる。「極微」の集積の全体なのだが一つのことだというのがわたしの「てつらわれのようだが一つのことだというのがわたしの「てつられのようだが一つのことだというのがわたしの「てつられている。

日々りられてれが友け客っていたに賃担り占りら遣がな極微をめぐる「てつがく」が念頭を去らない。(それから長い年月が経ったのだけれど、やはり同じようい。)

り光が直進するこの光景を「本屋の青空」という。書物とつためには路上と接続している必要がある。日々が遠ざかはこの「本屋」しかない。そして本屋がそういう機能を持増える。この「てつがく」に出合えるところは、わたしに増えるのあれこれが抜け落ちていくと青空の占める量が

2019.07.24

光は一つことだと思う。

中沢新一 ・夢枕漠 ・ 宮崎信也 『ブッダの方舟』 河出文庫

ス 1997 ミチオ・カク他 『アインシュタインを超える』 ブルーバック

佐々木閑 『仏教は宇宙をどう見たか』 化学同人 2013佐々木閑 『般若心経』 NHK出版「100分 de 名著」2014

本が大事

音信不通 ③)

国立大の学生の前で話をしてみないかという誘いがあ国立大の学生の前で話をしてみないかという誘いないがら「本が大と応答があった。そして「本」を読まないから、「本が大いう習慣がないから「本」のほうがまだ話題が見えやすい、一般学生に「本屋」の話は難しいだろう、本屋になじむと一般学生に「本屋」の話は難しいだろう、本屋になじむとった。「本屋の話? それとも本の話?」と問い返したら、国立大の学生の前で話をしてみないかという誘いがあ

っかりしたようだ。そしてりっぱな書籍売り場がある、国のだ。二年二回実施したが何も起動しなかった。彼女はが本を読まないのは校内に書籍売り場がないからだ、仮設売本を読まないのは校内に書籍売り場がないからだ、仮設売「三週間本屋」という企画を公立大学で行なった。学生が前に学生の牛木のどかさんが、定有堂の仮店舗として

路傍の石ころに等しい。

立大学でも、学生は本を買わない。

定有堂にも学生が訪れ会話を交わすことがある。地元は

本(再生産される文化的蓄積)の違いなのだろうか。 と一緒に来店する。一時間ほど滞在して二万円弱の支払いと一緒に来店する。一時間ほど滞在して二万円弱の支払いわる。買わない。一方ときたま近くの進学校の生徒が母親わる。買わない。一方ときたま近くの進学校の生徒が母親とんな本を読んだらいいですか? 」「これとこれがオスとのな本の話をする。「いろいろ気になる本がありますね。して本の話をする。「いろいろ気になる本がありますね。もちろん、ときには隣県の国立大学の学生も顔を出す。そもちろん、ときには隣県の国立大学の学生も顔を出す。そ

に人が訪れる。本は読みたい人が読むし、縁のない人にはかしい。定有堂教室「読む会」という読書会にはひんぱんかしい。定有堂教室「読む会」と話すのも考えてみればおと思う人がいると告げる、それだけで事は終わる。
「本が大事」というり返しのつかないもどかしさがある。
「本が大事」という

わたしが学生の前で「本は大事」と話しても、すでにと

事なのはユニコーンという物語性(あるまとまった内容)ますが、現実の東京には存在しません」という。ここで大「ユニコーンは映画や物語という『意味の場』では存在し存在しないのか』だった。別の本でだが、ガブリエルは、八月のテキストはマルクス・ガブリエルの『なぜ世界は

としての世界は存在しないが、この物語性は個々の人間の に確固として存在するなにかを、足場としている。 中に存在する。「新しい実在論」はこのように、個々の中

はこの「縁」がはじまる数少ない一つの「場」なのだ。

方のことである」P.101 の意味の場だけです」P.106「意味とは対象が現象する仕 「世界は存在しない。存在しているのは、無限に数多く

えられ方)は異なっているが、指し示している当のもの(つ という。「現象」といってもいい。この数式は「意味」(与 「2+2」や「3+1」は与えられ方であり、これを「意味」

この「意味の場」が本を読むという行為の場所のようだ。

まり4)は同一である。

示していく「当のもの」は同一である。「本」の中で体験 世界は体験によって生成されるものであって、わたしたち は世界を体験するわけではない。異なる体験であれ、指し

い。「体験」は「経験」の外部なのだ。そしてその「体験 は「本」の中にある。 を成長させ、外部(マルチバース)を予感することが楽し

でもそのためにはすでに本を読んでいなければならない。 一味同心の阿吽だからだ。 「本を読む人」に出合って「本のたのしさ」が広がる。

「本」と袖すり合い「縁」の中で再生産されていく。本屋 「本」とは、この「与えられ方」の多様な展開の場だ。

> 共有(体験)するということなのだ。 人が訪れる。本のあるところ「情報」が豊かに漂う。ユニ コーンを幻視する人としない人が今日もここですれ違っ ようなことがらではない。本屋には本を買う人と買わない コーンを実在させる「意味の場」という「与えられ方」を、 の場」を語る本を読みあう。本を読むということは、ユニ 場」を語る本を読みあう。ようほう 「意味・本に縁ある人が集まり、その本との縁という、「意味・81 これはすでに現象していることであって、人を説得する

2019.08.22

マルクス ・ ガブリエル『なぜ世界は存在しないのか』 マルクス ・ ガブリエル 『資本主義の終わりか、 談社選書メチエ 2018 人間の終 講

焉か? 未来への大分岐』 集英社新書 2019

昨日までの世界

音信不通 ③)

であるスリップが廃止され消えつつある。はじまりは二〇 しばらく遅れて、ファックスで説明の通達が届いた。 一八年四月、角川文庫から突然消えた。事故かと思ったが ここ近年の事件はスリップレスだろうか。本に挟み込ん

役割を終えたという理由だった。そこにはショートラン印 にしたいという動機がみえた。発注をPOSレジデータの 刷(小ロット印刷)への未来も含ませてあり、売りっ放し アルゴリズム(判断)に委ねている大型書店には、違和感 POS(販売時点情報管理)の普及で、紙のスリップが

のない制度変更だった。

踏み切ったのには驚いた。違う事態が幕を上げたと思っ れた形でショックだった。ちいさなデータのゆらぎの中で スリップを作りはじめた。その後平凡社がスリップレスに 本の品揃えに努めているからだ。仕方がないので、私製の てだが、ちいさな街角の本屋である定有堂は、はじき出さ アルゴリズムが有効なのはビッグデータの処理に際し

まった。悩んでいる姿がありありと感じられた。

き込み用の白紙スリップを無償提供するという対応に収

りますか? 」と来訪があった。その後十月から書店で書

筑摩書房からは今年の六月に「スリップがなくなると困

でちくま文庫に特化して力を入れているからだ。スリップ (2018.8~2019.7)。理由は文庫の森羅万象というテーマ 定有堂はちくま文庫に限れば山陰で一番売上げている

を自分で集計し、既刊本を根気よく発掘している。POS

と、①この作業ができなくなる②売り上げデータを筑摩書 れられた後ろ向きの探書だからだ。スリップがなくなる レジデータとは全く重ならない銘柄の領域だ。データに忘

観を読者と共有するために、ここ半年で文庫目録を一五〇 くま文庫を中心に森羅万象を意図しているので、この世界

房に送ることができなくなるので双方向性が失われる。ち

なくなると、こんなお願いもできなくなる 今日一日が大事で明日のことは誰にもわからない。こうい 冊ほどいただいている。双方向性が消えデータの裏づけが 時代はリスク回避のショートラン(売り逃げ)に向かう。

見えになった。「人と話すとき、奈良さんは出版業界の -82 八月末に南陀楼綾繁さんが『地域人50号』の取材でお う未来がはじまっている。日銭仕事になっているのだろう

と記される。はじめての指摘でその観察眼に驚いた。ープ』『それからのはじまり』など謎めいた言葉を話す」用語をほとんど使わない。その代わりに『青空』『ビオト

わろうと、本が好きだから本を並べるだけで一直線に進ん

紅旗征戎吾事ニ非ズという言葉があるが、状況がどう変

げた事が二度ある。南陀楼綾繁さんと歸山健一さんのお二カフェで会話している折に、たまたま手元にあって差し上いたか忘却するのでときどき抜き刷りを作って確認する。が、たゆまず月々刊行して三十九号になる。自分で何を書で一直線に終わるだけだ。この消息が『音信不通』なのだで一直線に終わるだけだ。この消息が『音信不通』なのだ

ハードカバーの本だ。したらこの抜き刷りが製本してあった。背表紙のある青い先日歸山(かえりやま)さんから宅急便が届いた。開封

をほんの数個贈った。「じつは製本は知人に頼んだので少しもこの一期を功徳としたかったので、鳥取の旬の「梨」期一会を「かたち」にしてくださったのだと思った。わたショートランの反対は一期一会だと思う。歸山さんは一

なかったが、これは「昨日までの世界」の記録だ。十人のがあった。このご縁に再読した。初読のときには気がつかその知人の方が関わった書物に『本を贈る』(三輪舎)

しお裾分けしました」と返事があった。

《本とは、本棚にならんだときに「背」が見えること…精神的な負荷がちいさくなるとは……》見つめることによって「本」から見つめられている世界だ。一つの魂の声に聞こえた。「本」への祈りだ。「本」を一つの魂の声に聞こえた。「本」への祈りだ。「本」を

「本」に関わる方々が寄稿されていて、心が解け合って8-

《お客さんが残していった「痕跡」を通じて、その心のがなくなってしまう》

中をそっと垣間見ていく……》

…》《背がない中綴じの本は本棚に収まった瞬間に存在

たしかにその通りだ。づけてきているので、「背」の存在論には意表をつかれた。づけてきているので、「背」の存在論には意表をつかれた。リップのこと。わたしは中綴じの冊子ばかりを長年作りつ同質の魂の声なので引用元はあげないが、「痕跡」はス

昨日までの世界が喧騒を拭って露出する。のことだからだ。紅旗征戎、つわものの消えたあとには、じつは未来はない。「未来」とはいつも「昨日までの世界」る。でも今日一日だけを生き延びようとしている人たちにる。いま出版流通の世界は「未来」へと前のめりになっていいま出版流通の世界は「未来」へと前のめりになってい

2019.09.22

十人の寄稿者『本を贈る』三輪舎 2018考)

音信不通 40

をつくるのだと思えた。 ない時代、形而上学でなく、人の思考がより先鋭的に未来 とができた。全体に、人文書とビジネス書が溶解しはじめ 倍くらい置いてあったので、そういう判断なのだと学ぶこ 行したので、その存在をうかがってみたかった。新刊コー 世話で共済会を通し、水道橋の東京ドームホテルだったの ナーをはじめ数か所に並べてあった。二点のうち片方が二 にネットを中心としたメディアが紙ものの書籍を二点刊 センターの間を散策した。三省堂では、ついでにこの十月 の古書コーナーと並列してしまっていた。安定した指針の ているようにも感じた。昨日までの本格的な人文書は上階 で、一駅神保町へも足を伸ばした。三省堂と神保町ブック 十月半ばに三日ほど上京した。宿が、日販(取次)のお

和食の韻松亭で縁者六人の会食をした。上野の森は数十年

三日滞在の狭間の日は、上野公園の中の、古くからある

ている。ここには風景を重ねる人もいるし、そうでない人

『方丈記私記』堀田善衛をポケットに入れていたのだが、 階の平台から『彼岸の図書館』夕書房を手にした。地域 喫茶店での一休みに読もうと思い、鳥取を出るときから

> 戦後の災厄を重ね読みする。乱後に階層差が「平らかにな 動乱を背景にするものだが、堀田善衛は太平洋戦争の戦前 あったあたりのテーブルで、店内の軽い喧騒に耳をすまし とてもおいしかった。『方丈記私記』は、源平の交代期の 暮らし・本というテーマだった。 ター)でコーヒーをいただいた。今日は少し離れて書棚の 前来たときは、柴田信さんの書店事務室(岩波ブックセン る」予感が高まり、しかしあえなく消える刹那の刻だ。以 神保町ブックセンターでは暖かいコーヒーを注文した。

ぶりで、樹木の丈が高くなっていて驚いた。まるで自分が ていた記憶もある。視点を、かくれやすいものを守る方4-8 明治大学史資料センター研究調査員で、永くこの本の街に 縮んだかのように錯覚するものがあった。 でもある。二十代の頃から地方史誌の評を雑誌に連載され ていたものだ。飯澤さんは出版社の「PR誌」研究の権威 尽力されている。以前は毎号柴田信さんが送ってくださっ 『神保町が好きだ! 』2019 第13号が同封してあった。 同じ月に旧友の飯澤文夫さんから便りがあって、冊子

れるが、『日本古書通信』(日本古書通信社)にも現在『続 ただけで、専門家のように扱われる」(便り文)と謙遜さ 集されている。ご本人は「PR誌のこと、たった一年調べ 向にそそぐ人なのだ。「出版社・書店等PR誌一覧」も編

PR紙誌探索』を連載している。十月号(通巻 1083 号)

のアクチュアリティを見つめる。PR誌の情報は早すぎのアクチュアリティを見つめる。PR誌の情報は早すぎある。わたしは本屋なのでそういう歴史資料意識に関してある。わたしは本屋なのでそういう歴史資料意識に関してある。わたしは本屋なのでそういう歴史資料意識に関してある。わたしは本屋なのでそういう歴史資料意識に関してのアクチュアリティを見つめる。PR誌の内容は、どんなで第七回。

I am here

遅れる方がいいのかもしれない。て、ときに本屋の現場の判断を誤らせることがある。少して、と

れる。しかし、地方だからこそ輝くという、本屋の気概をの頃、地方の疲弊と共にいっそう厳しい状況に本屋が置か号が刊行されて寄贈を受けた。本屋の存続が危ぶまれるこ屋が楽しい まちが楽しい」という特集の『地域人』第50 同じころ、神保町からは遠く地方に視点をうつして、「本

求める特集だ。「楽しい」をテーマに全国横断するのだが、

山陰は土地勘のある南陀楼綾繁さんが訪問されている。本

合う『小さな一冊の衝撃』にくらくら」と小見出しがついきる人だ。定有堂も取り上げられている。「この店で出」屋をショップとしてだけでなく、人として語ることので85-

もともと本屋的人間としての、おのれの原点でもあった。ぶしい。自分のできなかったこと、しなかったことを思います。十月は上野の森そして神保町にたたずみ、また、あいるい姿の地域の本屋特集を目にし、自分がすっかり縮み本屋の特集を読むのは苦手だ。それぞれの初発衝動がま本屋の特集を読むのは苦手だ。それぞれの初発衝動がま

2019. 10. 26

飯澤文夫『地方史文献年鑑 2017(第21 巻)』岩田書院青木真兵・海青子『彼岸の図書館』夕書房(2019堀田義衛『方丈記私記』ちくま文庫(2019)

音信不通 ④)

を行なった。 取大学で、「『本屋』の仕事」と題した、「本屋トーク」 十一月二七日、「知のカフェ」主催の会に招かれて、鳥

声をかけていたら、どんな対話があっただろう、と出張ト る勇気が出せなかった、という話を耳にしたからだ。もし ない②本の中身より本を読む人の話、といういつもの店頭 ークを行なったわけだ。 にすすめられて本屋に顔を出し、でも本屋の人に声をかけ でのやりとりを再現するものだ。きっかけは、学生が先生 「本屋トーク」というのは、①学び系だが結論をつくら

っぱら本に熱中している人だから、「ブッキッシュ(机上 っぱら○○」と熱中しているという意味だ。ここでは、も 本屋は本が好きな人がやっている。「屋」というのは「も

> いで本屋となる。この「勢い」のことを「初発衝動」と名 付けてみた。これが一つ目の話だ。 の空論)」な人ということになる。熱中したあまりその勢

集まった。 店は四十年つづくので、ほぼ十年周期で「個性」を切り換 ものには賞味期限があり、ほぼ十年という話だ。定有堂書 発衝動という物語の上に、それぞれの本屋の商いがある。 えてきた。長く続くということはそういうことのようだ。 学生や参加していた人たちの関心の多くは、この一点に 「小商い」は、初発衝動で始めるものだ。だからこの初 もう一つは「十年説」だ。初発衝動つまり個性で始めた

なる。なぜ、個性を切り換えることができるのかというと、 右の銘も書き添えておいた。 個性それ自体が「勢い」 のものだからだ。 配布資料には座 さてここからが「本屋トーク」で、ブッキッシュな話と

の「プレ・カンファレンス講義」が「未来へつなぐ柳父86-ンだ。余談だが(本屋トークは本性上脱線する) 今年の九 月に立教大学で行われた日本通訳翻訳学会シンポジウム 人の言葉だ。わたしの初発衝動ともいえる考え方のオリジ わたしがかつて師事した、翻訳論という学問を確立した 《ものを考えるということの働きは、ことばを組み立て。 文を作っていくという工夫のうちにある》(柳父章)

と興味を持たれ、会の冒頭に「定有堂書店 奈良敏行氏メ 付け加えた。 翻訳学」だった。再評価の機運が高まっている学者だ。若

とすすめ、ついでに、自分を変革して生きる人たちの「語8-

り」を集めた『かかわり方のまなび方』(西村佳哲)も

本屋の物語を 「語り」 によって少しずつ変容させる。 そ

い頃長く在野の人だったが、その頃の弟子に本屋がいる、

があった。 れた。お誘いも受けたがさすがに出席するには臆するもの ッセージ」が事務局の北代美和子さんによって読み上げら 思念は「ことば」と「文脈」でつくられているという考

だ。ブッキッシュな本屋的人間は、こういう道筋をたどっ えだ。つくられているのなら、変更することも可能なはず

て考える。

ト・ストーリーといい、ゆるいものをオルタナティブ・ス と、ブッキッシュな引き合いだが、強固なものをドミナン つくりの強固なもの、比較的にゆるいものと見ていく

なければ、と悩んでいる。どんな本を読ませればいいだろ 就職して悩んでいる。職場で自信がもてない、自分を変え トーリーとする視点がある。 今日の店頭で常連の方が、うちの二十四歳の息子が今年

り」は変えやすいというテーマの本がありますよ、「ナラ う、と会話がはじまった。「物語」は変えにくいけど「語

と共同性』(野口裕二)が最新の本ですし、息子さんなら ティブ」という考え方です。少し専門的だと『ナラティヴ

西村佳哲『かかわり方のまなび方』ちくま文庫 2014

『人はなぜ物語を求めるのか』(千野帽子)がいいですね、

現在の「語り」は「本のビオトープ」だが、それは『音信 不通』で現在進行中の「ことば」と「文脈」のことでもあ のようにして定有堂はこの場所(レイヤー)にある。いま 千野帽子『人はなぜ物語を求めるのか』ちくまプリマ― 野口裕二『ナラティヴと共同性』青土社 2018 柳父章『現代日本語の発見』てらこや出版 1983 2019.11.29 2017

本屋と「読む会」

(音信不通 @)

が、ときおり立ち寄る機会があり、定有堂の「読む会」を知 ど、なにか指針を教えて欲しいとのことだった。県外の方だ 先日知らない人からメールがあって、読書会をやりたいけ

ったらしい。

う。 ろう。自分でもよくわからない。でもきっと何かあるのだろ ほどつづいている。きっとなにか秘訣があると思われたのだ 定有堂教室「読む会」は一九八八年三月にはじまり三十年

は位置している。 とわたしには思えた。微妙な違いだがこのあわいに「読む会」 でもそれは勉強会であって、読書会とは少々異なるのでは、 くり変える』という本を読もうとしている、と具体的だった。 問いかけてきた人はすでに準備に入っていて、『学校をつ

質な人たちが参加しているからだ。「読む会」は異種で多様 変わらず片隅で、無言で耳を傾けているだけなので、そんな の「集い」なので共通理解を求めていない。わたしは三十年 会は結論を見出していこうとする。結論が共有できるのは同 「読む会」は「学び系」だが「結論をつくらない」。 勉強

> どんなひとたちなのだろう。 割と分別している。 ながくつづく理由は「人」だと思う。そんな人が数人いる。

だ。むろん店頭には反映されていく。そこからがわたしの役

んと読まないし、発言もしないし耳学問を積み重ねるだけ

風に見える、というだけの話だ。テキストも売るだけできち

主張したひとだ。 る時期から、自分より所有するのにふさわしい人に、この会 があった。いくつかの本にも、似たような風景がうかがえた。 ち込まないという深い反省のもとに、考えを深め合うことを 同研究転向』にもかかわった人で、「日常」に形而上学を持 のいい方なので立ち位置がきっと共鳴するとひらめきがあ のがある。もうひとつは別の人にあげたのだが、めんどうみ で出合うとあげてしまうようになったので、いまは手元にな った。それは『日常的思想の可能性』だった。この著者は『共 ではないのだが多様性を大事にするという点で似通ったも 同通信の記者に、 転勤移動の機会にゆずった。 異種で多様の い。ひとつは『共同研究転向』。熱心に会に参加していた共 「集い」の中で考えを深めあった本だ。「読む会」は勉強会 そんな読書会論のような、二点の本を以前持っていた。あ そんなひとに交わってきて、こういうことかと気づくこと

「集い」というといつもこの本のエッセンスを思い起こす。8--

と「きっかけ」を大事にしているということだ。集いにはテクル論」という一節があった。サークルは長く続いて欲しい。サークルと呼んでいた時代がある。そんな頃のことで「サーチークルと呼んでいた時代がある。そんな頃のことで「サーチーのので記憶は正しくないかもしれない。人の集いを

と、なにかしなければならなくなって、会が立ち消えになる。いので、結論をつくる必要もない。なまじ結論が明確になるいので、結論をつくる必要もない。なまじ結論が明確になるとっているとしていいはずだ。意見を交換するだけでもたのしいから参加する、とーマつまり「主題」がある。でも「集まる」ということ自体、

が、一本薪をおいていけば火は絶えない。むろん焚火守りも絶やさないということも大事だ。立ち寄り去っていくひとと寄っていって暖まろうと人が集まる。あたたまったら去っないかという。往来にあたたかそうな焚火がみえる。ちょっ

大切なことがあるという。例をあげて、焚火に似ているでは

たのしいから長続きするという説だが、しかしもうひとつ

外誰も聞いていない。かかまも聞いていない。かかないう動きをだれもしない。わたしは店を閉めて遅れて参も多い。でも黙って見ていると、とくにその人を仲間にしよ

毎月かわる。店頭でその月のテーマにひかれ飛び入りする人様の「集い」をたのしんでいるので、無方法だ。テキストは一

「読む会」にはたしかにそんなひとたちがいる。 異種で多 8-

この焚火守りのひとたちそれぞれの個性もおもしろいのこの焚火守りのひとたちそれぞれの個性もおもしろいのとカードを添えている。それだけで以心伝心買ってくれるひとカードを添えている。それだけで以心伝心買ってくれるひとが多い。

鶴見俊輔『日常的思想の可能性』筑摩書房 1967のようにわたしには見えています。 2019.12.27(参考) 2019には見えています。 2019.12.27(参考)

浜崎洋三『伝えたいこと』定有堂書店 1997

見えない世界を見えるように

(音信不通 ④)

ーブリック」そして「定有堂」と月一ペースの本屋探訪だ。はじめる。「双子のライオン堂」「文喫」「ブックスキュち帰り、昨年からオンライン総合メディアで本屋のルポを会のリアルに関心を寄せる人だ。本が好きという原点に立夜中の陽だまり』(文芸春秋)で夜間保育園のルポなど社で月九日、ライターの三宅玲子さんが取材にみえた。『真一月九日、ライターの三宅玲子さんが取材にみえた。『真

写す問いだと面白く思っていた。そんな折三宅さんが「好う」という問いかけがあり、質問自体が質問者の姿を鏡に遇について知りたいとき、その人にまずする質問は何だろちょうどいま読んでいる『地図と領土』に「ある人の境

きな本は何ですか?」と直截な切込みで問いかけてきた。

切さについて語っていたので、この文脈に乗って、ランボうまく返せるか戸惑ったが、この日、「変わる」ことの大ランボオの『地獄の季節』だと答えた。「なぜですか?」そのタイミングもあり一瞬息づまるような緊張を感じた。

れたはずで、ありきたりの読者体験にすぎない。するも突然投げ出しアフリカへ消え武器などの交易商人になったというものだ。本を読む人生から本を売る人生にになったというものだ。本を読む人生から本を売る人生には、この変容ありきのランボオの言葉とドラマに引き込ます。この変容ありきのランボオの言葉とドラマに引き込まするも突然投げ出しアフリカへ消え武器などの交易商人れたはずで、ありきたりの読者体験にすぎない。

オの「変わり方」に興味があるからと説明した。

て。でもふといままで気づかなかった読みに気づいあった。でもふといままで気づかなかった読みに気づいていた経緯もていた影響で、ランボオ周辺の本を読み返していた経緯もじつは年末に松崎の小原さんと文学談義を熱く交わし

思想と説明される。 権威やエリート主義に対して懐疑的な立場をとる主義やが、でも残りの半分でそう考えてみる。辞書的には、知的主義的な感情があったのではないか。半分は正しくない主義的な感情があったのが、

戦時ドイツからフランスへの引揚げ列車で出合った、富裕スとイタリアの合作映画で原題は「Le train」。 第二次大ある。 そのときは 『離愁』 と答えた。 一九七三年のフラン以前雑誌の取材で 「好きな映画は?」 と聞かれたことが

層のユダヤ人女性とフランスの普通の男の恋物語だ。終90

作小説は女を見捨てる。この、ストーリーに割り込むプロ共に処刑の運命を選ぶ。しかしジョルジュ・シムノンの原する。知らないといえばそれで放免。しかし否定しないで点で離れ離れとなり三年後にゲシュタボの取調室で再会

この映画の叙情は市民社会の一時的な崩壊を描くとこットの二重性に魅かれる。

本を読む圏域は強く文脈に支えられ拘束される。本を売ろに漂うと思う。

るような気がする。捨てて自由になったのは文脈の拘束か説明できないが、ここにランボオのアフリカの光景が見えるという小商いの圏域には少し違った自由がある。うまく

があまりに高いのに驚き、気功の本『気脈のエコロジー』木俊尚『「当事者」の時代』にたどりつき、津村喬の評価、このところ「現場性」が気になり読み漁っていて、佐々

は」、「現実の秩序を否定して別の秩序を作っていこうと「見えない世界を見えるように語り、行動するというのを読み返してみた。身体性へと露出していく本だ。

重ねていたら、量子力学的な問いと重なってきた。佐々木実存的な不可思議の謎を知ろうとして仏教の本を読みになったということだ。。がらだと語る。逆にいうと現実のリアリティが希薄は」、「現実の秩序を否定して別の秩序を作っていこうと

思考の文脈の拘束性は好きでない。推論するひらめきをはあるようにあるというのは確かだ。解できる、という結論がたのしい。理解できないがこの世ど)。「世界」の外に出て、四次元に身を置けば簡単に理

閑『科学するブッダ』などだ。謎は結局「粒子と波の二91-

重性」を入口に「二重スリット実験」などで説明されて '

いくがよくわからない。(森田邦久『量子力学の哲学』な

棚はこのように作られる。見えない世界を見えるように語て、現象を自分なりに説明する方向へと扉を開く。本屋のていると思いはじめると、文脈の分別をゆるく崩壊させ重視するアブダクションの方が好きだ。これとこれとは似

2020.01.24

るエモーションだろうか。

佐々木俊尚『「当事者」の時代』光文社新書 2012 ロミー・シュナイダー出演『離愁 Le train』仏独合作映画1973ランボオ『地獄の季節』小林秀雄訳 ランボオ『地獄の季節』小林秀雄訳

森田邦久『量子力学の哲学』現代新書 2011佐々木閑『科学するブッダ』角川文庫 2013津村喬『気脈のエコロジー』創元社 1993

本屋の圏域

(音信不通 44)

ころ公共性とか公共圏について興味があったので渡りに 観た。鳥取県立図書館を中心とした上映会だった。このと 二月十五日(土)に映画「ニューヨーク公共図書館」を

船とすぐさまチケットを予約した。百七十の席が売切れ寸

わたしたちも、もっと望んでいいのだという意欲をもつ。 が、でもその営みの多様性を知ることによって遠く日本の てる。利用できるのは近隣の人に有利なように思われる 前だった。みんなどんな期待をもって集まったのだろう? 図書館があることで多くの人が豊かな幸せな時間を持

ことだろう。県立図書館の役割も、できることの多様性を 公共図書館への期待をたかめる起爆剤になることかと感 幅広く具現することによって、県内隅々の住民が、近隣の 大事なのは可能性の「スケール」を具体的に示すという

そんな感想をもった。

いところにしか立ち位置はない、と逆に考えるようになっ 映画鑑賞をきっかけに、本屋の圏域は狭い方がいい、狭

> らだったかも知れない。本屋の公共圏は、狭さの中にしか えるよりも、狭い半径の圏域を大事にした方がいいと思っ た。「本のビオトープ」と称しているのもそんな気持ちか 存在しないと、あらためて感じる。多くの人の期待にこた た。多様性よりもピンポイントだ。

態の世界』の予定だ。『紙の動物園』は中国系アメリカ人 ードだ。わたしは「中動態」と「公共圏」を重ねあわせて 劇だ。ほかの二つに共通するのは「中動態」というキーワ リシャ語の時間』、二月は『紙の動物園』、三月は『中動 とにあった。定有堂教室「読む会」の一月のテキストは『ギ 考えてもいいのではないかと思い始めている。 の母と子の歴史的公共圏のアイデンティティの違いの悲 公共圏に関心をもつきっかけはつぎのような流れのも

通りだ。 だ。でも小林秀雄賞を受賞しているのだから、きっと考え ら始めた方がよかったのではと言っている。たしかにその は末尾の「ビリー・バッド」(メルヴィルの小説)の話か るヒントに満ちた本なのだろう。選考委員の関川夏央さん 『中動態の世界』はギリシャ文法などの説明が多く難解

れたビリーが上官を殺害する。艦長に気に入られ、一種2-十八世紀末、イギリス軍艦の航海中に、海上で臨時徴用さ テーマは、善良素朴な船乗り、ビリー・バッドの悲劇だ。

措かず極刑となるべき事件だ。裁判もなく処刑も即日執りちで、艦長や乗組員に共有される。情状酌量の余地ありとがう狭い公共圏では、事件の経緯がビリーに同情するかたのねたみやいじめ、そして誤解がここにはあった。 軍艦とのねたみやいじめ、そして誤解がここにはあった。 軍艦とのおきのから

狭い方がいい。本屋は狭い公共圏を実現できる。くる、とわたしは道筋を理解してみた。だから、公共圏はスが薄れることによって中動態が隠れ、受動態が出現してた。それが中動態の存在と関わりが深く、このコモンセンた。それが中動態の存在と関わりが深く、このコモンセンス)があっ行われる。

目にした旧友飯澤文夫さんは《「聖地」と言われることにトープ ー 鳥取「定有堂書店」》と題して公開された。に《書店員の「聖地」は本を求める人々が深呼吸するビオさんのレポートがウエブマガジン「ニッポン・ドットコム」二月二十五日にはノンフィクションライター三宅玲子

在ですね。素晴らしいです。》とコメント。自分ではだん通」寄稿者の一人である古賀啓三さんは《定有堂神話、健嬉しそうな顔も》とメールを寄せてくださった。「音信不「深呼吸する」はいいですね。それに、写真の奈良さんの

分ではすべてが終わっているといいつづけて長い。 る「神話」という言葉が言い当てていると得心する。 盲っだん当事者意識が希薄になってるので、独り歩きしていっ

翌二十六日には、一九九八年刊行の濱崎洋三著『伝えたいこと』定有堂書店刊が、二〇二〇年度の同志社大学の日本史入試問題に採用されたという知らせが届いた。水戸学本史入試問題に採用されたという知らせが届いた。水戸学本史入試問題に採用されたという知らせが届いた。水戸学本度有覚最初で最後の出版とうたった『伝えたいこと』と実討幕へねじれていく瞬間をよくとらえた論考だ。実前幕へねじれていく瞬間をよくとらえた論考だ。実前幕へねじれていく瞬間をよくとらえた論考だ。東討幕へねじれていく瞬間をよくとらえた論考だ。東前幕へねじれていく瞬間をよくとらえた論考だ。で、この会は三十年過ぎていまも続いている。この果報にで、この会は三十年過ぎていまも続いている。この果報に想いを馳せて、本のビオトープという狭い公共圏で、ゆったり深呼吸してみた。

(参考)

2020.02.28

奈良さんはどのように感じておられるか分かりませんが、

国分功一郎『中動態の世界』医学書院 2017ケン・リュウ『紙の動物園』ハヤカワ文庫 2019ハン・ガン『ギリシャ語の時間』晶文社 2019

濱崎洋三著『伝えたいこと』定有堂書店刊 1998

読書の彼方に

(音信不通 ⑮)

ちの、しばし貴重な避難所かも知れない。 気遣いで、街は閑散としている。定有堂は日頃から閑散と しているので、閉じこもるためにも本が不可欠という人た 二月来のコロナウイルス不安がつづき、人込みを避ける

町の三省堂で購入し感銘を受けた本だった。 リトリーの奈良県内で懇意になったそうだ。刊行直後神保 今日立ち寄るかもしれないというお知らせだった。取材テ 青木真兵・海青子さんが、昨日から鳥取に入っているので 取にいた萱原健一さんからメールがあった。「電話しても いい? 」という内容で、『彼岸の図書館』夕書房の著者 二十二日、日曜でまだ寝床にいたのだが、一年前まで鳥

開店できた。 る様子だったので、あわてて朝食を済ませ、十時十五分に 日曜で十二時開店の予定だったが、十時過ぎに到着され

「汽水空港」に招かれ講演をされたと知った。萱原さん(毎

とても知的なお二人ですてきだった。昨日は松崎の本屋

寄り道をお願いしてくださった様子だ。もの静かで目に力 のあるお二人だった。自宅を開き「人文系私設図書館ルチ ャ・リブロ」を開設されているので有名だ。 日新聞記者)が、わたしに出会いを作ってくださる為に、

松崎の「汽水空港」はクルマで一時間弱。ときどき訪ね

へと概念をつないでくれたこともあった。一年考え、セル 崎の小原修治さんが、この本屋の本棚で「セルフビルド」 フビルドは軸足が設計者にあるので、少し違うといまは考 て「オフグリッド」に関心を寄せていたわたしに、同じ松 で集合体を形成している一角だ。「スモールハウス」そし て刺激を得ている。ゲストハウスや湖に面したカフェなど

えるようになった。

乱」のドキュメント映画を小原さんにお見せいただいた直 後だったので、会えてうれしかった。 あって帰りによく定有堂にも立ち寄ってくださる。『バイ ヘイさんとの対談の後だった。高円寺のかつての「素人の 河久典さんもそうだ。 「音信不通」 寄稿者のワクサカソウ トやめる学校』タバブックスの山下陽光さん・編集者の大 汽水空港に招かれた人たちは、ご主人森さんのご厚意も

て?」と先日メールでお尋ねになった。 る力』コアマガジンをすごく評価しているけどどうし 小原修治さんは、「奈良さんはワクサカさんの『ふざけ

さんの底力だ。どんな力かというと「ふざける力」だ。店 がないのだ。定有堂に置き場がない、というのがワクサカ 堂は学び系の品揃えをうたっているが、異色なので置き場 作者だ。定有堂では入口フロントに特設コーナーを設けて 内には繁栄を願って招き猫を各所に見え隠れさせている いる。すごい待遇だねとみんなが言うが、少し違う。定有 ワクサカさんは、著書が十点ほどある、中堅の多才な著

ル・アーツ第一人者・鬼才」と書いた。戸田山和久さんは 『論文の教室』NHKのカリスマ的な仕事で敬愛してい 最近『教養の書』筑摩書房を読んだ。ポップに「リベラ

が、ワクサカ本も同様の縁起ものかもしれない。結界を切

り崩すマグマのような存在だ。

合わせて読んだ。ここでいう「教養」と定有堂の「学び系」 る。同じころ『勉強の哲学』千葉雅也も文春文庫に入り、 だが、学びの「枠」に導引されそうなのが違和感だった。 尻尾の煮え切らなさでやはり別ものだった。日常の枠組み は重なるのかなという問いを持ったからだ。「系」という から自由になるために読書をしようというところは同じ

いう本を思い出したからだ。ルソーに興味があった頃読ん 「読書の彼方に」というのは、ふと『根源の彼方に』と 二階堂奥歯『八本脚の蝶』河出文庫

る必要がある。

「ふざける力」の方が生きる力だ。市井の学びは日常に帰

る。読書が「力」でなければ意味がない。最近、毎日一冊 ペースで読書し、若くして命を絶った人の事を知り、読書 の彼方に思いをはせている。結論はまだ出ない。 ーのように根源をめざす。しかし市井の学びは日常に還 '

だ本だ。根源の彼方にあるものは表層だ。読書は、ルソ95-

2020.03.22

青木真兵・海青子『彼岸の図書館 ぼくたちの「移住」のかたち』

山下陽光『バイトやめる学校』タバブックス 2017 大河久典編集本 = 大井実『ローカルブックストアである 岡ブックスキューブリック』晶文社 2017 福

戸田山和久『教養の書』筑摩書房 戸田山和久『論文の教室 新版』NHK出版 2012 ワクサカソウヘイ『ふざけるカ』コアマガジン 2015

ジャック・デリダ『根源の彼方に グラマトロジーについて 上 千葉雅也『勉強の哲学 増補版』文春文庫

2020

下』現代思潮新社 1972 2020

具体と抽象

(音信不通 **46**

をいただいていたのだが、新型コロナに配慮し延期または中 止の状態となった。 える」というテーマで、ミニ講演とシンポジウムを行う予定 五月十六日に米子の「本の学校」で「本のある暮らしを考

さった。これほど丁寧に他人の手助けをあおぐのは初めてだ った。たくさんの収穫があった。 の機会に少々襟を正して視野を広げて勉強しようと取り組 書に、この課題を初歩から指導してもらうことを企てた。 んだ。具体的には、鳥取県立図書館相談担当の高橋真太郎司 十数点の書籍と三十点ほどのコピー資料を用意してくだ いつも定有堂の半径わずかの範囲でしか考えないので、こ

た。さらに読書の効用と一口にいうけれど、「読書の毒」と だった。後者は古典から最近までの考察例を集めてくださっ 事から取捨選択してコピーしてくださり、現在進行形の情報 そして読書の効用、この二点だった。前者は新聞や雑誌の記 いう視点もありますよと、両面合せて用意してくださった。 豊富な資料を手にして思ったのは、自分は本屋なのだが、 相談した内容は、集団で読書をすることの可能性と実例、

加)の時代だったのだ。

ないという姿勢に終始していた。 が参考になりますよという指導法で、「結論」をさしはさま この著者がいいというのでなく、ここに書かれている「情報」 読書指導が非常に具体的だったということ。つまり、この本、 なかったという気づきだった。もう一つは、相談を受けての 本の文化的世界の総体に、職業人として広く関心を寄せてい

十年本屋を営んできてはじめての気づきだった。 本屋をはじ

職業人としての読書に欠けているということの発見は、四

想」と「思想史」の狭間にも存在した。アンガージュマン(参 学」というものがあることを知って驚いた。この驚きが「思 は個人の生死の狭間にあるものだった。大学生になって「神 想史」だった。納得したが、それでも疑問は残った。わたし として存在するのか不思議だった。よく聞けば、それは「思 るとき「思想」を専門に大学で学んでいるという仲間に出会 た。自分では漠然と「思想」を求めていたつもりだった。あ の育った地方は「かくれキリシタン」の殉教の街だった。「信」 める前の一時期、本を間に据えた議論を仲間と熱心にしてい った。少しびっくりした。思想は生きるもの、どうして「学」

体と抽象」のグラデーションの中に定在するものだ。具体は6-思う。人は生活圏を広くも狭くもできる。自分の信念も「具 これは「具体と抽象」というカテゴリーの問題だといまは

殉教の方向だ。いろんな生き方があるのに、それでも狭い道

は一回性の出来事にしか興味がもてない。概念的なものが好 へと引き寄せられる、そんな情動がたしかにある。 職業人としての読書は歴史意識を求められる。一方わたし

きなわりには、じつは具体性の「地べた」から離れられなか ったようだ。

る」ものだ。選んでもらった書物の中に石井洋二郎『毒書案 に、『二十歳のエチュード』が挙げてあった。これはわたし に導き、逃れがたいシンパシーへと引き寄せる本の数々の中 でなく紹介だからだ。しかし的を射た本だった。読者を異端 内』飛鳥新社があった。自分では絶対に手にしない本だ。論 「毒になる読書」というのは、読めば読むほど「道が狭ま

が十八のときに出合ったある年長者に贈られた本だった。ラ

ンボオにつながる失墜の美学をそこで知った。

う。なぜ乱読してしまうのだろうか? 現在進行形で気にな 多読の日々だけど、自分の視野の狭さをときに危うく思

を知った。貪欲に世界を食べ尽くし、すべてが消滅する。そ う荒野』(見城徹)『三体』(劉慈欣)。いずれも狂気を孕 る本は三冊ある。『八本脚の蝶』(二階堂奥歯)『読書とい のまま何一つ変わらず存在していた。この構造上、世界はあ して消えたはずの世界は「あおむしくん」のお腹の中に、そ んだ書物だ。一冊目の中で、『くいしんぼうのあおむしくん』

> らかじめ疎外されたものとして現象するしかない。 れているので、幸いこれまで長り・・二冊目の狂気は、世界でなく他者への熱愛として方向づけ・27年間の狂気は、世界でなく他者への熱愛として方向づけ・97年間の狂気は、世界でなく他者の熱愛としかない。

られているので、幸いこれまで裏切られることもなく、熱量 が人の心へときちんと届く。

いことだと思ったことが本当は害毒だったという話だ。そこ 三冊目、「三体」事件の中核には『沈黙の春』がある。良

から極論して、人類はそもそもが邪悪な存在だと、異星人に

だったのかもしれない。高橋司書はそんなことをメタレベル 前で「読書の効用」を語ることは、そもそも不似合いなこと シンポジウムは先送りになっているが、こんなわたしが人

滅亡させる道を選ぶ。

な選書で気づかせてくれた。

原口統三『二十歳のエチュード』角川文庫 1952

見城徹『読書という荒野』幻冬舎文庫 2020 二階堂奥歯『八本脚の蝶』河出文庫

槇ひろし・前川欣三『くいしんぼうのあおむしくん』 福音館書店 劉慈欣『三体』早川書房

2012

レーチェル・カーソン『沈黙の春 改版』新潮文庫 2004

書けなかった話

(音信不通 <u>47</u>

トマガジンへの寄稿だった。 のお誘いがあった。認知症支援を中心とした団体の、サイ 高齢者の読書について書いてみませんか? という趣旨

考えてみようと決めた。認知症と本というテーマで鳥取県 たいと思った。学ぶのだから資料を幅広く集め、土台から どう本とポジティブに向き合えるかというテーマでも 立図書館の情報相談担当の方に指導を仰いだ。 あった。大事なテーマなので、いい機会だから勉強してみ 基本は「年を重ねたからこそ読みたい本」で、高齢者が

するのが日常だ。

狭い店内だけでなく、もう少し広い公共圏で考えてみたい ピーなど二十点ほどを用意してくださった。最近は課題を と試みている。自分を変える機会を求めつづけている。 でも書けなかった。書くのをストップしたというのが 書籍八冊、図書館での取り組みパンフレットや、記事コ

正しいかもしれない。「本」と認知症(高齢者)という現

はり共に味わい喜ぶ人が側にいた方がいい。 わたしは本 添う必要がある。「回想法」という着火法も有効だが、や だ。関わり方も、選書して終わりでなく、本を携えて寄り ないという結論だった。本はいくつになっても、いままで 象を天秤にかけると、とてものことに重さが違う。私の手 屋なので、どうしても「本」頼みのところが強い。「「本」 とは違った形であっても、未来へ向かっての希望の光源 失われていても「未来」は失われていない、失ってはいけ 本位制で「行い」に乏しい。口先だけの本屋トークで終始 ス行動」でなければ、とても釣り合うものではなかった。 に負えない。「本」の手にも、容易に負えない。「本プラ 与えられたたくさんの資料を目にしての考えは、過去は

堂でも多いが確かにそうだ。それでも、文庫より単行本と はないでしょうか」と答えた。以前岩波書店の読者は七十、 は?」と聞かれ「問題は本の内容でなく活字の大きさで 注文されることは多い。本屋に来る人たちは、読書の動機 付けを外部から与えられなくても自分で十分持っている。 八十代と聞いたことがある。「世界」の定期購読者は定有 前に「たとえば高齢のおばあちゃんにおすすめする本

でも、ある日ふと姿を見なくなることが悲しい。 ・ 依頼された課題の中には、年をとると若い時の本を読り 8

と。のもあるのではないか、という読書の成熟についてもあっのもあるのではないか、という読書の成熟についてもあっ年を重ねからこそ 何度でも読み返したくなる本というもみ返して、 何か新しい発見があったりするのではないか、

を考える、それが本屋的人間だと思う。そこではいつも「未のだと思う。本を読むより本を売る。売文家という言葉がのだと思う。本を読むより本を売る。売文家という言葉があるが、売本家という言葉はない。たぶんそれが本屋的人間なあるが、売本家という言葉はない。たぶんそれが本屋的人間なあるが、売本家という言葉はないのだろうか。路上で路上あるが、売本家という言葉はないのだろうか。路上で路上あるが、売本家という言葉はないのだろうか。路上で路上あるが、売本家という言葉はないのだろうか。路上で路上あるが、売本家という言葉はないのだろうか。路上で路上あるが、売本家という言葉はないのだろうか。路上で路上あるが、売本家という言葉はないのだろうか。路上で路上で路上のできたが、本屋の店頭では時代が加速度的におきえる。そこではいつも「未を考える、それが本屋的人間だと思う。そこではいつも「未を考える、それが本屋的人間だと思う。そこではいつも「未を考える、それが本屋的人間だと思う。そこではいつも「未

に内容を教わることの方が多い。でも売れると思って仕入る。わたしは店頭の本にそれほど目を通さない。お客さんの圏域をはずれたものはアクチュアリティを持ちえない。店頭 (路上) では読者の時間感覚と空間感覚があり、そ店頭 (路上) では読者の時間感覚と空間感覚があり、そ

本の置き場所が悪かったと反省することもある。

目を通すことがよくある。なるほどと思うときもあるし、れた本が、期限を迎え返品せざるを得ないとき、興味深く

来」を語る「本」を待っている。

立ち去る人がいた。プレヴォー『マノン・レスコー』光文うだ。先日も一分くらいで清算し、次の注文メモを置いて書は欠かせないので注文を計画的にして日常を過ごすよー

新型コロナで不要の外出をひかえる年配の読者は、読9-

社古典新訳文庫、栗原康『村に火をつけ、白痴になれ』、

青木省三 『ぼくらの中の 「トラウマ」 』 ちくまプリマ―新

読むのだろうと想像した。足下を照らす未来読書だと思書などだ。年配者だけど目が丈夫なんだ。きっとゆっくり

の青年の未来読書と先ほどの年配者の未来読書は同質のて本を買い続ける青年がいた。大学生が読むような本だった。大学が決まったので、高校図書館の買い付けかなと見ていたら、じつは高校生だった。大学が決まったので、これからゆっくり読高校生だった。大学が決まったので、これからゆっくり読書館の買い付けかなと見ていたら、じつはコロナの直前、長い時間滞在してダンボールに積み重ねコロナの直前、長い時間滞在してダンボールに積み重ね

が、天秤上で均衡をとりあっているようにいつも見える。いろんな読書があるけれど、街の本屋では「未来」と「本」

ものだと感じた。

2020.05.24

「共通理解」のあり場所 (音信不通 48

を傾けられ、寡黙な姿勢が印象深かったので、「読む会」 には一年ほど前から参加されている。先日店頭での立ち話 面白がってくださっていると理解した。 への興味の傾斜が少し読み取れる気がした。街の読書会を んですね」と口にされた。いつももの静かに人の発言に耳 で「テキストは新書が多く、原典購読という形式ではない から「音信不通」 に寄稿してくださる丸祐一さんは読書会 在も継続している。魅力的な人たちが集いつづける。今号 定有堂教室「読む会」は一九八八年の三月に始まり、現

い。しかしその一歩手前でなにか腑に落ちるものが自分の うなものが阿吽の呼吸で生まれる。それが感じられた頃場 を読んでいる人」の気配を共有する中に「共通理解」のよ が暖まり「ではまた来月」と毎回散会になる。結論は出な まっているので、本来意見がかみ合うはずもない。でも「本 街にはいろんな人がいる。「本」を読むという一点で集

内へと回収される。

③学習する姿勢で原典に取り組むということがない、の三 意を払い合う。だから意見が違えば違うほど面白い。 意がなくてはできないことだ。 人は、 若いときには一方向 そんな読書会が終焉した後にあえてする読書会が「読む ほど、しばらくすると路が分かれる。それは成果だと思う。 ①新書では物足りない。②いつも著者を批判して終わる。 のみを見る。街で出会う人は、年齢とは関係なく同等に敬 でなく、意見を散らす。参加している人たちへの互いの敬 つだった。全くその通りだと思ったのでいまも忘れない。 読書会を立ち上げたいと相談を受けたことがある。理由は 共同でやる学習は長く続かない。テーマが絞り込まれる 十年くらい前だろうか、「読む会」に物足りなくて別の

び交差し合えている。そこがいい。そして共通理解のため 買えた人と買えなかった人の読書は、延長線上で大きく分 かれるのだろうか。でもその分かれた線が街の読書会で再 も抵抗を感じる。二十歳前後に、一冊五千円の本を自由に に旬の「新書」を取り上げる。街の読書の独特な世界がは る。そして権威が確立している(だから古典なのだが)の 原典というか古典に準ずる本は値段が高いのが気にな

沢新一)、『ハンナ・アーレント 全体主義の起原』もよ 詔子)だった。『レヴィ=ストロース 野生の思考』(中 誕二○○年に向けて作られた『はじめてのソロー』(伊藤 ストを楽しみにしている。最初にいいなと思ったのは、生 かった。いまは『カント 純粋理性批判』(西研)を読ん

でいる。 にある。だから物自体には到達しない。 の枠組みは現実世界に属するのでなく私たちの感性の中 の認識能力は空間と時間という枠組みに基づくのだが、そ 古典は時代と場所によっていつも解釈が更新される。そ カントは人は「物自体」は知り得ないといっている。人

(参考)

だが、「客観世界への一致は不可能だが、世界について皆 リアに対し、「カントはこの問題を、主観と客観を一致さ が共有しうる認識は成り立つ」と説明される。認識のアポ れが古典に要求される条件でもある。テキストからの引用 解決した、と続く。学問や科学はあくまでも「一致」を課 せるのではなく、主観と主観同士を一致させるという形で

は可能だ、という。

題とする。「認識」ではこの一致は困難だが、「実践」で

街の読書はいつも実践の経験を前提とする。むろん自分

に何かが残ったとしたら、そこに「自由」が生まれる。認 の身の丈の実践だ。意見を散らしたあげく引き算したあと

> 識の束縛が引き算され、はじまるところの「自由」だ。 街の集まりは、同一性が少ない。自分の結論を突き崩

すために貌付き合わせることとなる。 伊藤詔子 『はじめてのソロー 森に息づくメッセージ』 NHKカルチャ 2020.06.23

仲正昌樹『ハンナ・アーレント 中沢新一 『レヴィ=ストロース 西研 『カント 純粋理性批判』1〇〇分 は 名著 202 ーラジオ 2017 全体主義の起原』1〇〇分 は名著 野生の思考』100分 は 名著 2016

読書の学校

(音信不通

談だった。三砂さんは梅田蔦屋書店で人文書を担当されて たのが、三砂慶明さんが司会する「読書の学校」という鼎 り、ここ十日ほど青土社の「ユリイカ」や「現代思想」の 雑誌特集を読んでいた。「図書館の未来」「出版の未来」 「書店の未来」などだ。この書店特集でラインを一番引い 書店周辺のことを、少しまとめて考えるきっかけがあ 二十三日木曜日、定有堂に三砂慶明さんが見えた。

よ」と三回分をいただいた。 運んでいた。「読書の学校」は冊子にもなっているのだが、 が、梅田はたびたび出かけ、よく駅隣接の蔦屋書店に足を する梅田蔦屋書店の読書啓発運動だ。今年は自粛状態だ それは手にしたことがなかった。「ちょうど持参してます 「読書の学校」は三砂(みさご)さんがコーディネート

ングだと親しみを感じていたが、「読書」というのは思い

あったからだ。

「本の学校」とか「図書館の学校」とかは、いいネーミ

を、物語的な生であるビオスと、生物学的な生であるゾー 街の本屋に似ていると思い旗印にしていた。でも「bios」 教えてくれた。わたしは、生き物(bios)と場所(topos) 良さんはビオトープ自体を生態系と考えているけれど、む エー (zoe) と区別すると、考えが深化するという視点だ オトープってどう考えるべきですか?」と質問した。「奈 んに、「自分で言っててよく理解できていないんですがビ 日、冊子『音信不通』や「読む会」をともにする丸祐一さ の重なり合いが小さな生息環境をつくる、それが黄昏ゆく しろ生態系を可能とする何かと捉えてもいいのでは?」と つかなかった。なにか啓示的な出合いだった。 定有堂では「本のビオトープ」という旗印を使うが、先

た。「本」より「読書」が上位概念という啓示がそこに | らだ。それが「本屋」「物語」の同義化だった。 が「人」と融合してはじめて生態系「ビオス」となる。こ だけでは何かが足りないという無意識の思いがあったか 三十二年つづく定有堂教室「読む会」があるのは、「本」 れは気がつかなかった。本を売るだけでなく、その根底に そういう経緯で三砂慶明さんの「読書の学校」には驚い つまり「本」の存在だけだと「ゾーエー」なのだ。「本」

- 102

な転換だと思い、定有堂は現在も八十冊ほど在庫してい 好き。」という特集だった。従来は新刊書店と古書店は別々 写真が出てますよ」と教えてくれた。二〇一九年の「本屋 に特集されるものだったが、この号は一緒の扱いになって ていたら、「そういえばそこにある『マガジンハウス』に いる。そういう時代の到来を予感させる企画だった。大事 互いにマスクをしている状況だったので、顔をじっと見

されていると直感した。 「ユリイカ」の特集の司会付記の末尾の「私は、本に人

三砂さんの経歴からも「美しい品揃え」が方法論的に探求 る」フェア棚を背景とした写真だった。美しい立ち姿だ。 る。六十頁に大きく三砂慶明さんの立ち姿があった。人文

コンシェルジュとしての仕事として「食べることを考え

生を何度も助けてもらいました」という一行に、わたしは

る。フェア写真背景の「食べることを考える」選書とこの は「『おいしい』ことは悪なのか?」と題して寄稿してい 語り尽くせる話題でもなく遠慮した。二〇二〇年春号の ラインを引いていた。質問したかったが、とても立ち話で 『サンガジャパン』は「食べる」の特集だった。三砂さん

> が結びつかなければもったいないということだ。本に人一『味』なのか」だ。「人生を生き抜く力」と「おいしい」3 はないかと推測した。人柄に「美への制御」を感じたから を美しく「盛り付ける」という方法論へと制御させるので とても豊富だ。でも「本に救われる」という経験が、「本」 たからだろう。一日三冊の読書量と聞く。知識量はきっと 生を何度も助けられたのは「本」が「おいしい」ものだっ

ゆっくりその痕跡を反芻してみた。三砂さんは「心に響く か目にしたいものだと思った。 言葉を書き抜いたノート」を大事にしているという。いつ 動いた。人と人が出会えば瞬時のことでも「痕跡」が残る。 わたしの軸足が「読書のビオトープ」へとこのたび少し

『サンガジャパン Vol. 35』 特集:食べる 食と心の健康

『総特集出版の未来』ユリイカ臨時増刊号 青土社 2016.3 『総特集:書店の未来』ユリイカ臨時増刊号(青土社) サンガ 2020.05 2019.6

『特集:図書館の未来』現代思想(青土社)2018.12

許せば十八頁にわたるこの語りでコンシェルジュするん 文章は連動している。店内で棚の説明を求めたら、時間が

だと想像した。トークの入り口はきっと「『おいしい』は

柳父章さんと「語感」 (音信不通 <u>50</u>

た。本来は「翻訳論」という言語哲学者なのだ。帯文には 明かす文章読本」、そして「書き言葉≠話し言葉 その違 アクチュアルな入口が示される。「近代日本語の誕生から 人だ。没後二年半の文庫化で読者への位置づけが気になっ いを知れば、書ける」とあった。うまくまとめてある。し 父章)があった。むかし自主講座「寺小屋教室」で学んだ 七月の角川ソフィア文庫に『日本語をどう書くか』(柳

なのだ。 的日本語」が、明治二十年代過ぎに始まる「文」(sentence) 意識の中で、どのようにして失われていったかの研究の書 とぎすませ! 」と主張が簡潔に記される。 じつは「伝統 ○○二年には法政大学出版局で再刊)。帯文には「語感を かし「書ける」は少し違うかな? と感じた。 オリジナル本は一九八一年にPHPで刊行された。(二

> 業してからも交流はつづいた。 運ぶようになり、そこで柳父章さんと出合った。本屋を開 状態がつづく中、高田馬場で行われていた自主講座に足を

この自主講座には複数の講座があった。「在野の学び」

体論」など、マルクス=エンゲルスから土着思想まで幅広 ロッパ革命運動史研究講座」 講師の小阪修平さんにも、 本 いテーマが学び合われていた。柳父さんをはじめ、「ヨー 派研究」「柳田國男研究」「安藤昌益研究」「水戸学・国 でほとんどの記録は残っていないが、「フランクフルト学

屋の講演会に来てもらったことがある。

は確かにある」という評価ともいえない評価だった。 なく柳父さんの推しがあって、書いたものは自由に持込み が許されていた。「悪文で主観的な文章だけど、語感だけ だけで、研究というものには関心はなかった。でもなんと わたしは自己言及的に「自己意識」の迷宮に彷徨っていた 研究団体だったので『寺小屋雑誌』という紀要があった。 今にして思えば柳父翻訳言語論の骨子の一つは「語感」

単語論から始まり構文論・文体論へ進んだ。単語論の中104 宝石箱に例えたキーワードだった。柳父翻訳言語論は、 果」と名付ける。翻訳語は漢字二語で造語されることが多 にあったのかもしれない。概念化してそれを「カセット効 いが、高度な「観念の器」として青年を魅了する。それを

大学を卒業し、就職したのだが学ぶことへの不完全燃焼

心には「語感」がある。

概念を受容しようとするとき「大事なところで漢字の名詞 翻訳語における漢字二字の名詞の機能は大きい。新しい

「まともな伝統的日本語文は、ただ言いたいことの意味 -1うのは、伝統的な日本語文にはない、という主張だった。-

実の微妙なズレ」に気づくところに生じる。

る意味に制約され、「ズレ」が生じる。語感は「言葉と現 を頼りに思考を進める」のだが、漢字が本来的に持ってい

時枝誠記言語学は、詞(し)と辞(じ)を、「詞」は「概

念過程を経て成立したもの」「主体に対する客体界を表

柳父さんは参照する。わたしは、いつも「観念」と「現実_ 表現」と説明する。翻訳語はこの「辞」を抑圧するのだと 現」。「辞」は「概念過程を経ない主体それ自身の直接的

ないとき、どちらを選ぶか、と問いを立て自滅する。ここ

の齟齬の前に立ちすくんでいた。もし観念と現実がそぐわ

に「解」はないのだが、柳父さんは、それでも「語感があ

たのかもしれない。この「ソゴ」を主題として、その当時 る」と救いの手をさしのべてくれていた。概念で考える、 わたしは『定有』という小冊子を刊行していた。横断的に、 青年一般の難関(アポリア)に対する、普遍的解答であっ

意識が生まれたのであり、「文末をはっきりさせる」とい わたしの観念的生活圏の中の人たちが、寄稿してくれてい 文体論では、西欧語の文章の翻訳に対応して、「文」の

> されるだけだ。柳父さんは、「その人じしんの好み、気質 すい文」とは無縁の営みだと思う。「語感」が相手に手渡 る」(九七頁)と考えた。 助詞によって相手にうったえる」「終わりは相手にあずけ に従う以外にない」(二〇二頁)と、その文体論をしめく していく、それが自己言及的な文章だ。それは「分かりや 内容を伝えるだけでは終わっていない」(一四八頁)「終 自分で理解しきれていないことを書くことで明らかに

『寺小屋雑誌』寺小屋教室 編集・発行 小阪修平『イラスト西洋哲学史 新版』宝島社 2019 柳父章『日本語をどう書くか』角川ソフィア文庫 2020

コロナ・ディスタンスな日々 (音信不通 51

の入り口をくぐり抜ければ少数派が多数派になる。その

「窓」の一つが『スモールハウス』だ。

とマイノリティを逆転する「窓」が必要となる。つまりこ

らの本つながりだと、この本が中心に思えるから」と答え、 結局余分に買ってもらった。 めないで、そっちの本を止めにしたら」と言ってしまった。 ょっと買いすぎたようなので一冊やめる」と、『スモール ハウス』(ちくま文庫)を外そうとした。ふと「この本や 「どうして? 」と問われたので「たくさん買ってるそれ 先日、数冊の本をレジに持ってきた若い男の人が、「ち

口」だと、機会あるごとに説明している。定有堂には限ら 『スモールハウス』は、定有堂の品揃えの「窓」「入り

定する歩みへと誘われる。 だきます」という使い回しのきく便利な文言を知った。こ を強いる」と言っている。つまりシンプルとは「ライフラ 自分に対して誰か別の人でも眺めるような強烈な匿名性 れも「離脱」する言葉だ。人としてのスペックを少なく設 インを外す」ことの述語で、「離脱」への手段なのだ。 分の死」という観念がその方向性へと駆動させるという。 で具体的な住居形態ではない。著者の高村友也さんは、「自 小住宅」だが、「スモール」は「こころ」の引き算の方向 うのは「タイニーハウス」ではない。後者は具体的な「狭 「『死』の観念によって暴力的に生活から引き剥がされ、 ここでは「シンプル」がテーマだ。スモールハウスとい コロナ禍の中「こんな状況ですので、ご遠慮させていた

れた本しかない。本が少ないと思う人もいるし、いやとて 話だが、本屋にとっては重大事だ。で、まずマジョリティ かなような感じもする。好みにはまるか、はまらないかの る。マイノリティから見ると、自分が興味がある分野は豊 もあって欲しいし、網羅的でないこと自体に不満が生じ も多いという人もいる。マジョリティから見ると、なんで

という言葉を見つけた。今日のレッスン(太極拳教室)で に、「学を為せば日々増えていく、道を為せば日々減って いくつかこの老師の要諦のフレーズを紹介したら「何も いく、減ってまた減っていく、『何もしない』に行き着く」

ところで、現代日本の中国武術を牽引する老師の書物

学び」があれば面白いと気になった。

った。この概念を踏まえて三砂慶明さんが、筒井康隆の「耽 最近、定有堂教室「読む会」で「会読」という言葉を知

ないが、幸い県立図書館にあった。遺産で膨大な蔵書付き 読者の家」という短編を教えてくれた。品切れで入手でき の家を入手した伯父の住まいに若い男が居着いて読みふ 昨夜は読むものがなく、手元にあった文庫目録(河出) - 107 なくとも、意識が活字の轍にかみ合うだけで満ち足りる。7-

る。三人そろって「耽読」がはじまる。これも「スモール ハウス」の物語だ。「シンプル」「離脱」のストーリーだ

ける。そのうち従妹のヤンキーあがりの女子大生も加わ

からだ。

文脈を導いていく。しかしそんな思いもコロナ禍の中でそ 転だ。この逆転が文脈に構造を与える。『何もしない』が れは「逆転」の気分だ。マジョリティとマイノリティの逆 「音信不通」は「終わった」という気分から始まる。そ

うことの、自由な出発(リスタート)が魅惑的だ。何にも 入り口が「スモールハウス」だといいたかったのかもしれ ならないけど「本」を読みつづけていいのだと思う。この ない。「何もしない」方向への耽読の始まりだ。 の気分は心地よい。「何もしない」ために何かをするとい の「一時停止」の気分に追い越された感がある。しかしこ

> はいまさら億劫だ。知ってる本は興がそがれる。知らない を、寝床で開いた。リストで見つけても、その本を読むの 証拠かもしれない。 と、エンピツで印をつけ始めると、目がキラキラしてきた。 読むより売る方が楽しいと思うのは、十分「終わっている」 本には興味が失せる。この本を仕入れたらきっと売れる

2020.09.19

馬長勲『太極拳を語る』 BAB ジャパン 2018 筒井康隆『壊れかた指南』 文藝春秋 2006

高村友也『スモールハウス』 ちくま文庫 2018

頭を通り過ぎるだけでも一向に構わない。有意的な言葉で

どんな時でも活字を目で追うだけで心が安まる。内容は

本屋読書 (音信不通 52)

子さんのお話を聞いた。り、「変化する時代の図書館の価値」と題する菅谷明った。十月十六日にはオンライン・シンポジウムがあ鳥取県立図書館の開館三十周年記念のイベントがあ

リモートのせいで聞き取れず、インタビュアーだったーション」にからめて一歩進んだ説明があったのだが、物事には賞味期限があると理解した。同時に「イノベ残るのは変化できる者である」という教訓があった。残るのは変化できる者である」という教訓があった。結論にダーウインの「最も強い者が生き残るのでは結論にダーウインの「最も強い者が生き残るのでは

高橋司書にそんな話をしたところ、後日動画を巻き戻

して調べてくださった。『イノベーションのジレンマ』

(翔泳社)にもとづくお話だった。さっそく図書館で

実績ある優良企業が破壊的イノベーションに遭遇し借りて読んだ。

破壊的イノベーションの姿だ。そして外部にシンプルなサービスが生まれる。それがビスへと踏み外し、かえって顧客を失うという分析だ。だった。優良であるが故に、顧客の求めを超えるサー化」の兆しは「内部」には存在しないという事例の本

たとき、なすすべもなく崩壊するという摂理と、「変

大きな世界のことに理解は及ばないと書館という大きな世界のことに理解は及ばない。別書館という小さな商いにも似たようなことはある。 一から始め直せばいい。 そういう転位のが、本屋という小さな商いにも似たようなことはある。 商品では終わっているが、何がが決定的に足りなく思える。 商品構成やいるが、何がが決定的に足りなく思える。 商品構成やいるが、何がが決定的に足りなく思える。 商品構成やいるが、何がが決定的に足りなく思える。 商品構成やいるが、何かが決定的に足りなく思える。 商品構成やいるが、何かが決定的に足りなく思える。 商品構成としてといるが、何かが決定的に足りなく思える。 商品を収入される。 一から始め直せばいい。 そういう転位のあればいい。 一から始め直せばいい。 そういう転位のあればいい。 一から始め直せばいい。 そういう転位のあればいい。 一から始め直せばいい。 そういう転位のあればいい。 一から始め直せばいい。 そういう転位のあればいい。 一から始め直せばいい。 そういう転位のある。

店に聞くお店のはじめ方つづけ方、と副題にある。好108しまった『街灯りとしての本屋』(雷鳥社)だ。 11 書 - でオリジンをつかもうと『ネット興亡記』(日経新聞でオリジンをつかもうと『ネット興亡記』(日経新聞して読んでいる。これからはデジタル時代だというのシンポに刺激されて、変化すべく、二冊の本を平行シンポに刺激されて、変化すべく、二冊の本を平行

ーションだと思う。扱う商品の多様化の先に未来はな人のためにも役立っていた。これが破壊的本屋イノベーがる。違う成り立ち、違う生き方がそのイノベーショイノベーションはすでに「街灯り」としてはじまってイノベーションはすでに「街灯り」としてはじまって

きだから本屋をやる、を動機とする人たちだ。いまは

かし一方「終わり」のはじまりだともいえる。破壊的国をあげてデジタル社会のとばくちに立っている。し

い。「本が好き」という原点に、破壊的イノベーショ

本屋も特集されていた。偶然開いたところに、「音信つくる破壊的イノベーションだ。そして未来をつくるは「こども本の森 中之島」だった。こどもは未来をンターで『ソトコト』十一月号も見せてくれた。表紙この本を教えてくれた高橋司書は、資料相談のカウンは宿ると予感する。

つづきがそこからはじまる。定有堂教室「読む会」のう外部との出合いが途絶えないからだ。「終わり」の「終わった」と感じてもつづくのは、「ひと」とい

正銘街灯りの本屋だ。

て紹介されていた。作り込むことの何一つない、正直不通」寄稿者の鳥居貴彦さんの本屋が、六頁にわたっ

有堂の出口の印象を高めているのは間違いない。界を感じ、ついでに一冊とお客さんが買っていく。定本なので定有堂の棚の本とは性格が違う。ふと別の世わかりやすいようにレジ前に並べる。読書会レベルの-15キストは岩田直樹さんが選定されている。参加者に9-

田中佳祐・竹田信弥 『街灯りとしての本屋』雷鳥社 2019杉本貴司『ネット興亡記』日本経済新聞出版 2020改訂版』翔泳社 2001 増補クレイトン・クリステンセン『イノベーションのジレンマ 増補

『ソトコト』2020 11月号 株式会社RR

本屋トーク (Twitter抄) (音信不通 53

期一会の話が弾む。なぜこの本がここにあり、この人がこ こにいるのか、と。 きたくなる。お近くですかとも聞く。県外の方も多く、一 が合えば、 いい本をお買い上げですねと応答する。自分 が大切に並べた本なので、ついなぜ購入するのですかと聞 いい品揃えですねとたまにレジで声をかけられる。呼吸

運ぶ。自分を変えられる本に出合うこともあるしないかも は本屋に本を探しに行く。でもあてもなく訪れることも多 れは衝撃の一冊。 しれない。そして忘れたころに立ち現れる本があれば、そ い。きっとなにか変わりたいという気持ちに引かれて足を 冊の本の衝撃。ところどころ棚に記されている。ひと (2020-53-02)

> 屋はきっと勁い。 援で本を一筋と思えば失敗する。失敗したらなぜいけない のだろうと考える人は外部でなく自分を変える。そんな本 み込まれる。何を成功と考えるかの初心が消える。孤立無 でない商品に支援を求める。だんだん本もどきの世界に飲 (2020–53–03)

本が売れない。困ったと思う人は多様性の扉を開く。本

は治外法権で多数派に逆転する。ここではただ本屋好きと 辞書にはそう記されている。普通少数派だが、本屋の中で 上の空論。非実際的で役に立たない。世間的には愛想なし。 呼ばれるだけだ。 書物に凝る。堅苦しい。学を衒う。実生活に基づかない机 ブッキッシュ (bookish) という言葉が好きだ。本好き、 (2020–53–04)

(2020-53-01)

- Li鋏(ハサミ)とカニのハサミは似ているけど違うでし10 を包括的に統一する骨組みを求める。いつもの禅僧の方 | 人間が考えることは同じだからだという。賢い人はこの世 と重なるのに驚いた。なぜ似通うのか。ある人は頭のいい 仏教書で世界観を探求していたとき量子力学の世界観

ようと笑って答えた。

(2020-53-05)

としたか人の痕跡(トレール)が必要だ。本が並んでいれ りには、この土地にどういう読者がいてどういう本を必要 る。棚のトレーサビリティが消える。街角の本屋の棚づく コロナの時代の災厄。ひとと人とのつながりが疎遠にな

ば本屋といえるわけでもない。人と人との関係の中に本が 居場所を選ぶのだ。 (2020-53-06)

待てない。本のように広く永く残る必要もない。背くここ ろの性急さにつりあったところに冊子が生まれる。その不 を与えられる。冊子の居場所は棚ではない。情念は形式を で本とはいえないという説もある。本は棚に差して居場所 わたしは中とじの冊子という形式が好きだ。背がないの

確かさに安住を覚える

(2020-53-07)

そうだった。青空とはここでは強く肯定をうながすアイコ 固定観念は言葉からはじまる。本屋の青空という言葉も

> なぜ拡張が生まれるのか。言葉は言葉と出合うことによ 1ンなのだ。本屋は青空。意識の拡張はとても心地よい。 1 って言葉の言葉を生み出し、割り切れない計算を割り切っ

(2020-53-08)

てしまう。青空の高みで。

い。述語なのだ。 ことを思い切ってやるだけだ。本屋はここでは主語ではな ちや先々の情勢がどうなろうと気にしない。やろうと思う だ。やりたいからやるという情念にはじまる本屋を理解す ることは難しい。果敢な本屋だからだ。自分の明日のいの 違う成り立ち違う生き方というものがある。本屋のこと (2020-53-09)

2020.11.16

本屋トーク (document 抄) (音信不通 5)

どんな本を読んできましたかと聞く。本を選ぶのはアイデの人に投げかける質問はなんだろう。わたしは本屋だから出会った人に興味を持ちその人の人生に関心を示す。そ

(2020-54-01)

たいことに出合うのだろうか。したいことがあるから、本アつまり自分のしたいことを探すこと。本を読むので、し

に出合うのだろうか。

い。内容よりも出合っていること自体の喜びだ。そんな本自体がたのしいことがある。それを交話機能というらし流れ自体がここちよい。人と人とのふれあいで、会話それ読書にはじつは結論はいらない。読んでいる間の、時の

というのだろうか。

とのコンタクトを縮めていえば活字好きという。交話読書

(2020-54-02)

いことが大切。 (2020-54-03)書はそれ自身で文脈を形成する。要するに真っ直ぐ歩かな溺する。アディクションと読み替えるとすでに依存症。読ると、すべてが思考停止となることに気がついた。本に耽いう周辺の日常を見ていると、耽読という言葉が立ち現れいう周辺の日常を見ていると、耽読という言葉が立ち現れ

このところ耽読について考えてきた。本好き本屋好きと

うと思った。 の名目初老の男性が訪れ、紀行本のコーナーを尋ねる。 ある日初老の男性が訪れ、紀行本のコーナーを尋ねる。 のと思った。その人は探検部の後輩の本 を見つけて購入した。そして中東で過ごした人生を聞い を見つけて購入した。そして中東で過ごした人生を聞い を見つけて購入した。そして中東で過ごした人生を聞い を見つけて購入した。そして中東で過ごした人生を聞い を見つけて購入した。そして中東で過ごした人生を聞い を見つけて購入した。そして中東で過ごした人生を聞い を見つけて関入した。その人は探検部の後輩の本

ない広がりの未知の世界。ライフスタイルとは日常のも12は人の日常を入り口とする。しかし行く果てはとてつも ,らししかないと気づき本を手にする。本屋に並ぶ本の群れ本に暮らしのスタイルを求める。大事なものは日常の暮

う一つの日常と知る。本ではじまる日常がこの世の枠に収

まるはずはない。

(2020-54-05)

熱を帯びると、なにかしら確かな世界が成立する。しかした場合その一つを繰り返し探し求める。同義反復の読書が耽読にはバイアスがある。読書体験に一つの衝撃があっ

読書と顧みた。 (2020-54-06) そこにいる。こんな自分の耽読下の読書を、確証バイアス

ふと気づくと知り得た以上に話してしまっている自分が

語が更新され、棚の本も磨き上げられる。ふと地動説と天種々雑多な人たちが訪れる。会話が弾めばやはり自分の物語が補完されていく。自分は出かけないが、本屋には物語が補完されていく。自分という物語に新しい気づきが加わり旅をすると、いままで出合わなかった種類の人と巡り遇

本屋的人間。言葉が世界をつくっていると信じている

動説を連想した。

(2020-54-07)

(2020-54-08) (202

へと歩んでゆく。 (2020-54-09) へと歩んでゆく。 (2020-54-09) かけに生活のリスタートをくり返す。そして明るい方示される未来とは集合的な夢の方向性かもしれない。本をむ。指針を求めて本を読むという立場をいっているのかもむ。指針を求めて本を読むという立場をいっているのかもよれなが現在に構造を与える。そんな希望のもとに本を読未来が現在に構造を与える。そんな希望のもとに本を読

)20_12_26

(音信不通 55

なくの閉塞感がつづく。この気配の中で本のビオトープ いことが多い。気配だけが膨らんだり縮んだりしてなんと 「音信不通」の寄稿者の方も幾人か消息が途切れがちとな 新型コロナの災厄も一年になる。いまだよく理解できな

が弱くなる。

る。書き記す意欲が湧かないという理由のようだ。

た。思うこと感じることはあるのだが、それを連ねて一つ それで断章(百四十字)を九本並べていつもの分量に収め るものが必要となる。 連ねるには、因果関係のような「思い」の外側から介入す の文章にまとめることができなかった。思うことを文脈に わたしも十一月と十二月は長めの文章が書けなかった。

わることの積み重ねの中で因果関係が動き出し、語り始め よって自分の文脈が補完され、自分への見方が変わる。変 人との応酬もそんな事のひとつだ。他者と出合うことに

ることができる。

果関係が途切れがちになる。つまり外へと語りかける意欲 るものがあった。外部が消えるという気がしたからだ。こ が「読書」を旗印にしたら、もう後はないと思え震撼とす える。昨年出合った印象深い言葉は「会読」と「耽読」だ 遠になったその隙間を本が埋めあわせするかのように思 の間自分でも乱読状態がつづいた。読み過ぎると思考の因 った。本屋を開業して四十年目に訪れたイノベーション (明日への橋渡し)のキーワードが「読書」だった。本屋 近頃本をまとめ買いする人が増えた。人と人との間が疎

らない。不要不急の日々の中では結局「読書」だけが露出 うことは、その人がどんな本を読んできたか、そしていま してきた。 える。 本屋的人間という側面でいうならば、その人はわた 憶に残ることが少ない。人に興味を持ちその人を知るとい しにどんな本を教えてくれたかその一点でしか記憶が残 どんな本を読もうとしているか、その二つだけで十分に思 わたしは人のプライバシーに関した話を耳にしても、記

さん向きだね」と手にする本に『空間は実在するか』と 『認知バイアス』があった。わたし自身の求めている観14 店頭でときおり会話がはじまる。数人の人が「これナラ

者の方を中心にして本の世界を求めがちだ。ていることを崩壊させるという二方向がある。わたしは後た。本には知らなかったことを知ろうとする方向と、知っ念と定有堂という本屋の課題のようなものを意味してい

ージョンという言葉は日高敏隆『動物と人間の世界認識』界つまりイリュージョンの上だと説明される。このイリュ立すると語る。時間や空間が成立する場所は、人間の環世で、時間は人間の記憶ひいては生命システムに基づいて成『空間は実在するか』はむしろ時間に主眼をおいたもの

(環世界)のブロックなのだ。そしてときに本屋も、それその世界を独自に開く。つまり書物とはイリュージョン媒介としたイリュージョンがある。書物は概念構築によりの基盤もそのようなレイヤーだ。そして本屋には当然本をイリュージョンには階層構造がある。生物としての人間

にならって一つの環世界を擬態する。

ころと関係している。

に「イリュージョンによって生まれた現実がまた次のイリ

ュージョンをつくり出す」と階層構造として説明されると

(参考)

界」という外部へ向かうのだろう。その「世界」は環世界ためだ。人は知覚し感じとる。それがなぜ知覚できない「世

不規則な現象をなんとか秩序あるものとして理解したい

繰り返し本を読み人に教わる。それは自分が抱く不確実

「沈黙」しかないのがいつまでも不思議に思える。うか。「世界」(概念)に耳を傾けると、しかしそこには

えるということは概念を積み重ねるだけのことなのだろ‐1(イリュージョン)でアプリオリに与えられている。考5‐

2021. 01. 16

鈴木宏昭 『認知バイアス』講談社ブルーバックス 2020橋元淳一郎 『空間は実在するか』集英社新書 2020

日高敏隆

『動物と人間の世界認識』 ちくま学芸文庫 2007

|本のある暮らし、ただし本屋(音信不通 56)

瞬乗り気になったが、ためらってしまった。コロナ禍の一でしまった。「本のある暮らし」がテーマだったので、一座談会形式のシンポジウムに誘われたが二の足を踏ん

年で視野が狭くなり、意見がかみ合いづらくなっている気

ととなる。視野が狭くなるというのはそういう事態と無関情動が生成しないので、いまここにある情報を精査するこ少した。その結果まなざしが内向きになった。あたらしい出かけることも少なくなったし、出版関係者の訪問も減がする。 分断のはじまりだろうか。

よう務めています」と答えた。こんなときだからこそ読もで、表紙がなるべく見えるようにして、速攻買いができる本を選ぶのに時間をかけたくないという気持ちがあるのどんな工夫をしていますか? という問いに、「みなさん一月下旬に地元の新聞社から取材を受けた。コロナ禍で

うというのか人文書がよく動く。

までは?」と聞かれ、「一度売れて補充で戻ってきた本です」と答える。直近、人がどんな本を求めたかがわかる。 と答える。直近、人がどんな本を求めたかがわかる。 にはまだスリップが残っているものが多い。売れ行き上位にはまだスリップが残っているものが多い。売れ行き上位にはまだスリップが残っているものが多い。売れ行き上位にはまだスリップが残っているものが多い。売れ行き上位でないことが知れる。パレートの法則というのがある。 「これ 目立つコーナーに無規則に本を展示している。「これ 身をとってその二割をしつこくあちこちに表紙陳列して

気分が変われば、このベーシックセオリーも、それにつれの源流は、読者のひとたちの「こころ」の反映だ。読者のでもあり、ベーシックセオリーと呼ぶこともできる。生成色だ。それが本屋の方法、セオリーなのだが、考えの土台が固有に形成されるのが、本屋における本との暮らしの特が固有に形成されるのが、本屋における本との暮らしの特本との日々がくり返されるうち、絞り込みやとりまとめ

をしたが、それはハイレゾリューション(高解像度)傾 _容傾向はそうではない。ベーシックセオリーといういい方セオリーはざっくりした「とりまとめ」だが、書物の内

向にある。スペイン風邪のパンデミックは収束に三年を16

るからだ。そのため移りゆく世界をとらえるグランドセオ る。その体験は分断を深める。知覚のレイヤーが多層化す 年は長い。世界が変わる瞬間をわたしたちは体験してい 費やしたというが、新型コロナもおそらく同様の経過をた の暮らし、ただし本屋、での「二割」の場所は、新しいべ リーはハイレゾリューションになる。内向きになった本と どると推測される。三年を乗り切れない人も大勢いるし三

く。哲学者は概念を提示する。その概念はそのままグラン読者の「こころ」の気分は、こんな景色の中を過ぎていーシックセオリーへと向かっている。

なった。

さんで、脱成長コミュニズムという概念で、「人新世」をドセオリーだと、「中動態」を提示するのは、國分功一郎

と歌い踊る、そのグランドセオリーも、相補って新型コロてこそ」の講釈師、栗原康さんの説く、概念よりも感情だ望の「キ」の字だけがあったと述べたが、希望の概念はい望の「キ」の字だけがあったと述べたが、希望の概念はい渡せる。芸術革命のブルトンは「ナジャ」で、そこには希語る斎藤幸平さんの、歩みの向こうにコロナの三年後が見

はこの「当事者」の場所を抜きには語れないと思うようにはこの「当事者」の場所を抜きには語れないと思うように度で語られることに驚く。そして次なるグランドセオリー界がハイレゾリューション化していると語り、教えてくれ界がハイレゾリューション化していると語り、教えてくれの後メールで補足してくれる人もいる。また或る人は、世界がの対話があった。ハイレゾリューションの世界が簡郎さんの対話があった。ハイレゾリューションの世界が簡郎さんの対話があった。ハイレゾリューションの世界が簡郎さんの対話があった。ハイレゾリューションの世界が簡郎さんの対話があった。こんな本が読まれています7-1見える化」したいからだ。こんな本が読まれています7-1見える化」したいからだ。こんな本が読まれています7-1見える化」したいからだ。こんな本が読まれています7-1

2021.02.17

栗原康『はたらかないで、たらふく食べたい増補版』ちくま文究』新曜社 2020 図分功一郎・熊谷晋一郎『〈責任〉の生成――中動態と当事者研

タルク1 からないて、たらふく食へたい増補版』せらま☆はだらかないて、たらふく食へたい増補版』せらま☆

に、この地域というよりも往来のベーシックセオリーを、

直近の読者が購入した本を並べているのは、本屋空間

ナ三年へのリアリティを導くように思える。本屋のベーシ

ックセオリーはこの周辺を右往左往している。

本屋トーク(ハイレゾリューション)(音信不通 57

ここで出合う一冊はいままでの本とは何かが違う。入り口 う言葉に出合う。あるいは表紙を表にして自己主張する本 が目にとまる。もしいずれかに惹かれたらそこが入り口。 の扉もそこにある。 い。例えば棚の一角で、「猫が好きな人は本が好き」とい 入り口は内部にある。外見は往来にとけ込んで普通がい (2021-57-01)

らぬ気配があれば、それは新しいことのはじまり。知って てくれる。知っていることはもういい。知らないことに出 いることの組み合わせを変える知見が、未開の土地へ誘っ って何だろう。知っていることの書かれた本の群れに見知 なにか新しいことがあるかなと棚に向かう。新しいこと (2021-57-02)

> はないだろうか。 界といえるだろうか。それぞれのイリュージョンが生成 る。そしてこのとりまとめ方には個性がある。一種の環世 がここにあり、とりまとめることによって行為が生まれ し、そして固有に生きる。しかしそれは分断のはじまりで ハイレゾリューション、高解像度。知覚する情報の過剰 (2021-57-03)

ながら外へ出ようとするといつまでたっても扉へたどり るのはなぜか。解像度が違うからだ。虫メガネで足下を見 か。知っていることより知らないことへと知見をつみ重ね る。まだ外へは出たくない。 着けないといった人がいた。 高解像度はリアルを毀損す 見えるものより見えないものを語ろうとするのはなぜ

(2021-57-04)

ージの喚起を楽しむ人はゆっくり読む。意識を断片化して 人は結論を重視しないのでにえきらない。 思索系の人は18 ひとつの理念へ収束させる人は読むのが速い。 学び系の 本をゆっくり読む人とあわただしく読む人がいる。イメ

結論を急ぎつながりを重視する。学び系のひとは悔恨をか かえる人かもしれない。

(2021-57-05)

でに、身の丈の人ばかり。

にビニールパックした二冊の本を差し出した。「これ新品 みせる。帰り際に二、三歩戻ってきてA4のダンボール板 しばらく見ないなと気にしていた客が忘れた頃に顔を

だからあげる」。スリップも付いたまま。アマゾンで二重

買いしたらしい。いい本だったので「ブルータス」と交換

した。物々交換の思い出。

(2021-57-06)

度。縮小を結節点として本屋は甦りの物語を編む。 すべて ション・グローバリゼーション・インターネットと拡散傾 向。縮みは自己を時間と空間の中にどう再置するかの支 縮み志向の本屋。いまは広がりの時代。モータリーゼ―

(2021-57-07)

に応える力もないし必要もないと気づくと、何度でもやり

直す力が湧き上がる。

ことの愚かしさを四十年たって知る。五坪弱で本屋をはじ ールに入っている。何かをするために何かをするという 1初発衝動のぶっ飛ぶ力。スタートを切ったらすでにゴ9-の丈がいいともいいつづけた。が、いつの間にか周囲はす めた人がまぶしい。十年くらい前から、縮小する本屋、身 (2021-57-07)

る。思考を生成する言葉の遡行・追行も可能だ。結局、言 人は誰か。イリュージョン・環世界は本によって形成され 合うことも多い。その本をなぜ手にしたか。教えてくれた 読んでいるか語れるだろうか。一つ前に読んだ本の中で出

読書の痕跡、トレーサビリティ。手にしている本をなぜ

葉は属人性の由来をもつ。 (2021-57-09)

定有堂の「推し本」 (音信不通 8)

うに大きく茫漠とした問いだ。「大学生なの?」と聞く。められた。問いがあまりに大きくて一瞬たじろぐ。森のよある。若い男性に「クリエイティブな本を読みたい」と求店頭で、本をすすめて欲しいと、声をかけられることが

で問いの出自がせばまった。で問いの出自がせばまった。「大学生なの?」と聞く。うに大きく茫漠とした問いだ。「大学生なの?」と聞くを未へと倍率を変えていく。鳥取出身、九州の大学で水産ら木へと倍率を変えていく。鳥取出身、九州の大学で水産ら木へと倍率を変えていく。鳥取出身、九州の大学で水産ら木へと倍率を変えていく。鳥取出身、九州の大学で水産のおりれた。問いがあまりに大きくて一瞬たじろぐ。森のよめられた。問いがあまりに大きくて一瞬たじろぐ。森のよめられた。問いがあまりに大きくて一瞬たじろぐ。森のよ

いる本ありますか?」と尋ねた。『料理の四面体』かな、書もある。丸山さんの心の扉を開きたくて、「大切にしてさんと話をした。丸山さんは二年ほど前から鳥取に定住しないと思った。ちょうど数日前、近くの食堂カルマの丸山

ない、思ってもみなかった」と言い、買って帰った。でもあるらしいよとも付け加えた。「ボクは料理嫌いじゃと教えてくれた。大学生にその話をした。文化人類学の本

る。一人一人の視野の解像度が上がり、ハイレゾリューシてくる。個の属性がふくらみ「つながり」が粗になってく結果、「このもの性」(個人性)そして当事者性が際立っることが多い。いま共通の心象風景は「分散」だろうか。を有堂は「読む会」という人文書の読書会を三十年以上定有堂は「読む会」という人文書の読書会を三十年以上

たらふく食べたい』(栗原康)の四点だ。「人新世の「資本論」』(斎藤幸平)、『はたらかないで、「のかいで、『人新世の「資本論」』(斎藤幸平)、『はたらかないで、『人新世の「資本論」』(綾屋紗月・熊谷晋一郎)、『つながりの作法』(綾屋紗月・熊谷晋一郎)、『のからないのような本を店頭では話題にこういう理解のもとに次のような本を店頭では話題に

ョン(高解像度)の状態になる。

き上がる」という発見だ。ねじれは「責任」を成立させ結論は「免責されたからメカニズムが解明され、引責が浮応答(レスポンス)という形でときほぐしたことだろう。功績は、意志と責任(レスポンシビリティ)のねじれを、功績は、意志と責任(レスポンシビリティ)のねじれを、ある人が「コナトゥス」という言葉が大事だよと教えてある人が「コナトゥス」という言葉が大事だよと教えて

るために「意志」を後付けしたところにあった。そして12

共振する。 この作業は、当事者研究の熊谷晋一郎の立場と、はげしく

えに「身体内外からの情報を細かく大量に拾いすぎてしま散」の風景に光がさし込んでくる。アスペルガー症候群ゆ綾屋・熊谷の『つながりの作法』はとても面白い。「分

う」(解像度が高い)人と、脳性まひゆえにつながりにく

い、正反対の二人の事例交換だ。健常者は解像度があらい

イレゾリューションとなった、新しい日常を生きている。きる。わたしたちはいま、閉塞状態の中で「分散」されハので、いいかげんな「まとめ上げ」で平気でいることがで

ざっくりした「まとめ上げ」ができなくなったおかげで、

なった。なった。なった。

去から時間が止まっている。しかしそこで見た「相互扶助」集めている。地球の危機が可視化されつつある今、もう身集めている。地球の危機が可視化されつつある今、もう身に成長コミュニズムという未来を、つくり出すべきだとい脱成長コミュニズムという未来を、つくり出すべきだとい脱成長コミュニズムという未来を、つくり出すべきだとい脱成長コミュニズムという未来を、つくり出すべきだといいが、気候変動の危うさいが、気候変動の危うさいが、気候変動の危うさいが、

だけは手放さない。キリスト教的な一直線の時間意識と、

みる」という決断にある。 しを感謝という見返りに変えるな」という一言に強く心しを感謝という見返りに変えるな」という一言に強く心しを感謝という見返りに変えるな」という一言に強く心し東洋的循環の思想との対比だ。わたしは栗原の「ほどこ1東洋的循環の思想との対比だ。

本屋の「推し本」だ。本屋の「推し本」だ。本屋の「推し本」だ。とおうのがのだ。今日をていねいに生きる「ちいさな声」を拾うのが場所でもない。出合いが、今日と明日を少し明るくするだ場所でもない。出合いが、今日と明日を少し明るくするだ場所でもない。出合いが、今日と明日を少し明るくするだるをで変わされるのは「ちいさな声」だ。未来を論じる本屋の「推し本」だ。

2021.04.17

丸山伊太朗『アイデアどんぶり料理』徳間書店

玉村豊男『料理の四面体』中公文庫 2010

栗原康『はたらかないで、たらふく食べたい』ちくま文庫 2020斎藤幸平『人新世の「資本論」』集英社新書 2020綾屋紗月・熊谷晋一郎『つながりの作法』NHK新書 2010國分功一郎・熊谷晋一郎 『〈責任〉の生成』新曜社 2020

閉塞と覚醒(音信不通

醒」というのは、概念(言葉)が、暮らしの中に侵入してい、そうだろうか、というようなことがらのはなしだ。「覚引かれている。言葉は必ずしも対応する実体を持っていなこのところ、唯名論と、それに対立する概念に、興味を

調になったということだ。本を読む時間がおのずと増えくる事態を示す。停滞、足踏みが久しくつづく。日々が単

で、書物に始まる衝撃が訪れる。それが「覚醒」の内実世紀に、アラビア経由でキリスト教世界に伝わってきたとはじまるものであったらしい。アリストテレス哲学が十二になっていたからだ。この覚醒もどうやら書物が、以前から気本屋の棚にある『中世の覚醒』という言葉を用いるかというと、本屋であれば書物に耽溺するのが自然なことかもしれい。本屋であれば書物に耽溺するのが自然なことかもしれる。こんなとき酒屋であれば酒に耽溺するのかもしれなる。こんなとき酒屋であれば酒に耽溺するのかもしれなる。こんなとき酒屋であれば酒に耽溺するのかもしれな

本のある暮らし、というテーマで考えている人に出会っ

ことこそが、「覚醒」ではないだろうか。
れも覚醒といえる。権利上存在しうるものが、顕在化する論的に、書物が現実の体験となってくる。少しヘンだがこ読書は健全なことだ。しかしその量が域を超えると、普遍読書は健全なことだ。しかしその量が域を超えると、普遍読書は健全なことだ。しかしその量が域を超えると、普遍

最近読んでいた本の中で、「遊牧民は決して旅立たない。 最近読んでいた本の中で、「遊牧民は決して旅立たない」とに旅に出たくないだけなのだが、「決して旅立たない」とに旅に出たくないだけなのだが、「決して旅立たない」とは好きではない。 日常の輪郭があいまいとな際立つことは好きではない。 日常の輪郭があいまいとない。自己崩壊に引きずり込まれそうになるからだ。 要するに旅に出たくないだけなのだが、「決して旅立たない」という、ノマディズムの大きな物語に自分を重ねると、何かいう、ノマディズムの大きな物語に自分を重ねると、何かい方、ノマディズムの大きな物語に自分を重ねると、何かい方、ノマディズムの大きな物語に自分を重ねると、何かい方、ノマディズムの大きな物語に自分を重ねると、何かい方、ノマディズムの大きな物語に自分を重ねると、何かい方、ノマディズムの大きな物語に自分を重ねると、何かい方、ノマディズムの大きな物語に自分を重ねると、何かい方、ノマディズムの大きな物語に自分を重ねると、何かい方、ノマディズムの大きな物語に自分を重ねると、何かい方、ノマディズムの大きな物語に自分を重ねると、何かい方はない方は、アンディスの大きながある。

たなく苦難を機転でのりこえた、というパターンが印22 がために、フィレンツェ郊外に引きこもって、退屈しのないために、フィレンツェ郊外に引きこもって、退屈しのないために、フィレンツェ郊外に引きこもって、退屈しのな構造を持っている。ペスト・パンデミックの現実を見んな構造を持っている。ペスト・パンデミックの現実を見んとなく苦難を機転でのりこえた、というパターンが印22 にからに関する。読書もそうだと思う。何かを見ないために何かをする。読書もそんとなく苦難を機転でのりこえた、というパターンが印22 に対した。持ち回りの話も、十日とつづき数多いのだろうか。きっとんとなく苦難を機転でのりこえた、というパターンが回り、ロー・122

当だろうか。エドガー・アラン・ポーの作品に、『赤死病 過ごしていても、いつかは外部に平和が訪れる。しかし本 象に残る。ここでは「語り」だが、本を読んだりしてやり に、ある日仮面の男がまぎれ込む。一瞬のうちに全員が感 まん延する中、城砦に閉じこもり、宴に浸る貴族たちの中 の仮面』がある。出血死する、赤死病と呼ばれた疫病が、

せて行為するのでなく、観念性のひそみに身を委ねることところでノマディズムというのは、現実対応に身をまかが、 おそろしい。

染し、死に絶える。長くつづく宴と、一瞬の終焉というの

ちなりけり

覚醒するものは、そのような「いのち」なのかもしれな

の形態だろうか。ここ一年余の閉塞の中、現実が与えてく思い描き、外界に投影していくしかない。荒れ地での覚醒たしかな現実はそこにない。あらかじめ確固とした現実をでもある。移動を常とするわけだから、身を任せるほどのせて行為するのでなく、観念性のひそみに身を委ねること

隙に、現実が仮面をかぶって立ち現れるかもしれない。逃聴に、現実が仮面をかぶって立ち現れるかもしれない。としたで現実味を提供してくれる。書物の中には、概念や観念が、で現実味を提供してくれる。書物の中には、概念や観念が、で現実味を提供してくれる。書物の中には、概念や観念が、おりまれる豊かさは遠のいていく。幸い書物は補うようなかたちの形態だろうが、ここ一年余の閉塞の中 現実か与えてく

げ切れるだろうか。それが問題だ。

春ごとに花のさかりはありなめどあひ見むことはいのの屈折が、概念的な読みへと道筋をはこんでしまう。む中で、ふと心引かれる和歌に想いを重ねてみた。こころむ中で、ふと心引かれる和歌に想いを重ねてみた。こころかな種類がある。閉塞的だが、移り変わることを -1 書物は、概念的な内容のものや感性的なものや、数多 -23

2021. 05. 17

エドガー・アラン・ポー「赤死病の仮面」『ポー傑作集』中公文ボッカッチョ 『デカメロン上中下』河出文庫 2017 船木亨『ドゥルーズ』清水書院 2010エドガー・アラン・ポー「赤死病の仮面」『ポー傑作集』中公文エドガー・アラン・ポー「赤死病の仮面」『ポー傑作集』中公文エドガー・アラン・ポー「赤死病の仮面」『ポータンのでは、

小町谷照彦『古今和歌集』ちくま学芸文庫 2010

何度でもやり直す (音信不通 6)

な時間を過ごしたかったからだ。離だが、各駅停車で九十分かけての移動を選んだ。スロー総会に出席した。クルマだと、玄関から七十分くらいの距穴蔵から顔を覗かせたような気分の高まりで、書店組合の六月下旬、久しぶりにJRに乗って、県中部へ出かけた。

な感覚だ。停滞は性に合わないので、逆向きに歩くのはど後ろに流れていた。その時間と意識が、同期してきたよう気がする。いつも数歩先に意識を構え、現実の時間は数歩書店を含めいろんなことが、時間に追い越されたという

いうのはどうだろう。それが何度でもやり直すということうだろうと思いはじめている。時間を逆向きに追い越すとな感覚だ。 停滞は性に合わないので、逆向きに歩くのはどな感覚だ。 停滞は性に合わないので、逆向きに歩くのはど

ろ読者の人と対話していると、読者は「思いがけないものいけないことと、自分に言い聞かせてきた。でもこのとこに添えるようになった。いままでは、読者の前を歩くのは最近「定有堂の推し本」というカードを、いくつかの本

前を歩くのではなく、時間を逆に巻き戻すという方向で考から「推し」てもいいのだと気づきはじめた。でもやはりだがじつは求めていたもの」との出合いを求めている、だ

例えばその一つに、山内志朗『目的なき人生を生きる』がある。目的がいらないなんて思いがけない主張だ。しかしじつは、目的をリセットするという内容で、自分が求めしじつは、目的をリセットするという内容で、自分が求めに入っている世界だと気づく。スコラ哲学の本なのだ。「欲望はに入っている。対象を持たない」、という話の核が、気原初形態において対象を持たない」、という話の核が、気に入っている。対象において対象を持たない」、という話の核が、気に入っている。対象において対象を持たない」、という話の核が、気に入っている。対象において対象を持たない」、という話の核が、気に入っている。対象において、対象をリセットすべきが。何度でも欲望の現在を確認して、やり直す必要がある。がある。目的がいらないなんて思いがけない主張だ。しかいまは追い越そうと接近する時間を無視して、スローに呼吸し、後ろ向きに歩み、もう一度欲望の初発へとたどり直吸し、後ろ向きに歩み、もう一度欲望の初発へとたどり直吸し、後ろ向きに歩み、もう一度欲望の初発へとたどり直吸し、後ろ向きに歩み、もう一度欲望の初発へとたどり直のも、いいなと考える。

ロナ禍と時を同じくして一年余の休載がつづいた。それ24レポート「本屋な日々」が添えられ、愛読している。コ ,カラーの新刊案内が送られる。フロクに、石橋毅史さんの直取り集団トランスビューと取引する本屋には、分厚い

夫『21世紀企画書 日本的インターネットの可能性』が 象が、欲望の源流にリセットされた、と解釈した。一年余 矢は「あなたへ伝えたい本」という切り口だった。いまま を感じた。さいわい五月から復活した。復活やり直しの嚆 橋さんの声が聞けない。ここにも時間に追い越された風景 はわたしにとっては事件だった。一番聞きたいときに、石 の空白が「欲望」の原初形態を見いだしたようだ。橘川幸 でのように「伝えたい本屋」ではなく「伝えたい本」。対

この身の丈のサーバー(砦)と向う岸のネット世界の間に は個人の電話機がサーバーになる」、ということのようだ。 興奮のるつぼだった。 著者の橘川さんの結論は、「インターネットの最終形態

ばその年に、定有堂は手づくりでHPを立ち上げた。日々 頃の自分が再び頭をもたげる」と締めくくっている。思え 寄せる。二日で読み終えた。新世界が登場しても、人は自 紹介されていた。2000年刊行の本だ。急ぎ古書で取り

商いの筋という意味だろうか。

分の文脈を手放さない、と理解した。石橋さんは、「あの

となる。それがメディウムで、人もメディウムの一つとな 望の対象だと、初期設定を明確にする。 てくると受け止める。中間にあるメディウムが、自分の欲 る可能性をもつ。わたしは「一人メディア」の時代がやっ あって、中抜きが加速するほど、間を取りもつ存在が必要

> な一つのメディアだ。著者のもう一つの結論は、人と人を 日、小さなメディアからのやり直しが始まる。本屋は小さ ディア)の一つなのだ。そこには「商いの筋」があり、 は強く問いかける。大きなメディアが力を失いつつある今 活に入っていくとはどういうことなのか」と、この企画書 に触れるものだと指摘する。人のこころに寄り添うのが、 つなげる最大のメディアは、「意識の根底にある悲しみ」 「人を集めるということはどういうことなのか」「人の生 イア)の一つなのだ。そこには「商いの筋」があり、 1を屋は「商い」という表象において、メディウム (メケー)

こから何度でもやり直せる。やり直すうちに、目的は他で もない、自分の根底に向かって歩んでいただけだと気がつ 世が移ろいそして果てに残るのは欲望の原初形態だ。こ

橘川幸夫『21世紀企画書 日本型インターネットの可能性』 山内志朗『目的なき人生を生きる』 角川新書 2018 石橋毅史『本屋な日々 青春篇』トランスビュー 石橋毅史「本屋な日々」トランスビュー新刊案内折り込み連載

晶文社

2000

読書思考圏域(音信不通)

をできた。 七月のはじめは、県内に大雨被害が多かった。本屋に訪察できた。

レゼントし、本を詰めて手渡した。せめてもの好意をしめ気後れした。それで手持ちのデニム地のトートバックをプ親密感を抱いた。小冊子の『音信不通』も、持ち帰ってく親密感を抱いた。小冊子の『音信不通』も、持ち帰ってくれていた。いっそう一体感を感じた。声をかけたかったが、いくつかあった。伊藤亜紗編『「利他」とは何か』、が、いくつかあった。伊藤亜紗編『「利他」とは何か』、

したかった。

61

一も、案内したかったが果たせなかった。一も、案内したかったが果たせなかった。「目的なき人生すすめたかった。仏語対照がめずらしい。『目的なき人生すすめたかった。仏語対照がめずらしい。『目的なき人生しが正さる』は、版元品切れがつづいていて、希少だともいを生きる』は、版元品切れがつづいていて、希少だともいるようで、「目的なき人生しずすめたかったが、とれ以上言えなかったが、三万円以上買っているので、それ以上言えなかったが、三万円以上買っているので、それ以上言えなかったが、三万円以上買っているので、それ以上言えなかったが、三万円以上買っているので、それ以上言えなかったが、

果に見返りを期待しないこと。あたり前ですが…」と記26は何か?』には、「純粋利他の大原則=自分の行為の結 ,生き方をしたことにはならないのか? 」。『「利他」とこは蒼ざめた倫理学/幸福な死に方をしなければ、幸福な「推し本」カードだが、『目的なき人生…』には、「こ

している。

うれしかった。そこには、「身体内部の情報を細かく大量 作法』を購入し、カードも持ち帰りたいという女性がいて、 に拾いすぎて、外の世界と『つながり』にくくなった人へ」 そういえば数日前、綾屋紗月・熊谷晋一郎『つながりの

学もいたが、同様のわかりにくさの同一線上にあり、愛読 ういえば、「花が存在する」「存在が花する」といった碩 ビトゥスの上で咲く〈花〉なのである」と結んでいる。そ と書いている。 (くじ) くところにしか、真実は現れない」と断言し、し 者にはよくわかる理路なのだ。冒頭では「言葉や論理を挫 山内志朗さんは『自分探し…』の巻末を、「自分とはハ

六月の定有堂教室「読む会」のテキストは、『人新世の

びれてしまった。いま一番気になる人だ。

境危機を踏まえた、ポストキャピタリズムとしてのコミュ 分岐』の中で「Think Big!」と、立場を示している。環 の反乱』を購読した。この Think Big と「地べた」の両 ニズムの視野だ。四月にはブレイディみかこ『労働者階級 「資本論』だった。著者の斎藤幸平さんは、『未来への大

の約束」には、懐疑的なところがある。やってみないと善 んな議論があったがいつも結論はでない。わたしは、「先 極を視野に入れるのが、定有堂での読書思考圏域だ。いろ

し悪しはわからないが、「いま」の危機意識をバネにすっ127

る短い判断を信頼したい。

なものによって個体であるのか」と述べてある。その理路 げてみたいと考えている。スコトゥスの『形而上学問題集』 のというよりも、世界という場面の中に輝くもの」と、「こ に重ねて山内志朗は、「個体の中に独立して宿っているも に「石の本性はそれ自体で個体なのか、それともある外的 わたしにはまだ理解が及ばない。でもこの方向に圏域を広 ドは「コナトゥス」「ハビトゥス」「このもの性」だが、 もたないから「地べた」を知らない。山内志朗のキーワー ラ哲学者なのだが、天使主義を批判していう、それは「規 範性や道徳性を尊厳としてのみ見る者」 だと。 天使は肉を 第三項として、いま山内志朗に興味を持っている。スコ

のかと理解した。 示唆され驚いた。数十年を経て同じ場所に立ち戻っていた に「定有」を旗印にしているのですから当然ですよね、と のもの性」を説明している。 「このもの性」を中心に最近考えているが、先日ある人

(参考)

レヴィ・ストロース『野生の思考』 みすず書房 1976

伊藤亜紗・ 中島岳志・ 若松英輔 『「利他」とは何か』

新書 2021

集英社

山内志朗 『目的なき人生を生きる』 ハンナ・アーレント 『人間の条件』 ちくま学芸文庫 角川新書 2018

1994

矢田部英正 『日本人の坐り方』 集英社新書 2011

奥本大三郎 『ランボーはなぜ詩を棄てたのか』 集英社新書

アルテュール・ランボー 中地義和 『対訳ランボー詩集』 岩波

山内志朗 『自分探しの倫理学』 トランスビュー 2021

『無駄な死など、どこにもない』 未来哲学研究所

2021

山内志朗

文庫 2020

『つながりの作法』 NHK新書 2010

綾屋紗月・熊谷晋一郎

斎藤幸平・編

『未来への大分岐』

集英社新書

2019

マルクス・ガブリエル マイケル・ハート ポール・メイソン

- 128 -

(音信不通 62

このもの性

さんは「最近死ぬことばかり考えている」と口にした。一 歩の途中だと定有堂に立ち寄り、近況を交換し合った。T 瞬ドキッとしたが、『生物はなぜ死ぬのか』という本を読 んだ、という話題だった。こういうテーマは好きなので、 暑い日がつづき、しばらく姿を見なかったTさんが、散

生命は、限られた地球上の物質を再利用しながら、持続し ている。そのため、消え去るものもあるし、いつまでも残 簡単にいうと、進化の時間軸で考える、ということだ。

話が弾んだ。

るのだろう。 物質と反物質というものがあるらしい。すべてが対にな

し、やがて全宇宙規模のできごととなる。そこからどうな

と腑に落ちる状態に自分を保持できれば、それはそれで笑 がない。でも生活者としてのわたしは、「なるほど納得 この推論を更新していく。しかしいつまでもここには正解 りあえず何らかの「秩序」を描き出そうとする。推論の一 はじめると、いつもこのように堂々巡りをしてしまう。 ないもの」とは何だろう。「生命システム」について考え 隣の次元(マルチバース)に染み込んで、引っ越ししてし 種だが、そのこころの動きを「アブダクション」という。 どう考えてもわからないものが、横たわる。この「わから ニバース)は、折りたたまれて消滅する。結局ここには、 まうのか、それはわからない。でもわたしたちの宇宙(ユ れば、宇宙全体が消滅する。まったくのゼロになるのか 仮説的推論のことだ。人に尋ねたり、本を読んだりして、 人は自分の心の中に定形できない現象をかかえると、と

アブダクションの一つだが、タマゴが先かニワトリが先

って死ねる。

的に支えていた物質は、細いけれどもつながっていく。し

よって意識は失われるが、その意識をかたちづくり、形態 りつづけるものもある。この摂理を解き明かす本だ。死に

違いということらしい。タマゴは系統発生の視点、ニワ かという設問がある。これは後先の問題ではなく、次元の

ずれその銀河も消え失せる。消滅ごとにカテゴリーが上昇

消えていくものは、地球という形態であり、その素になる

何かは、宇宙のチリとなって銀河の中に残りつづける。い

かしなんだかんだいっても地球はいつかは解体していく。

ば派生物だ。このように、階層を重ねて形成される意識の げて、「心」が生まれる。心(意識)も、タマゴから見れ みに「意識」も、個体と次元を異にする、何ものかだ。生 命システムには次元の階層がある。個体の中で、階層を上

果、わからなくてもいいような気がしてきた。わたし的 -131なく気になって、関連本を十冊程度読んでしまった。結1-

記号学』だった。そこに「〈このもの性〉という深淵」と に、山内志朗のエッセンスと思ったのは、『新版 天使の

いう一節があり、なるほど「深淵」というのが述語だった

世界を、「環境世界」というらしい。木下清一郎『心の起

は、足元(物質)から更新されていく宿命にはない。ニワ トリはタマゴへとリセットされていく、という仕組みに、 源』から学んだ知見だ。 生物はなぜ死ぬのかという問題だが、築かれた環境世界

この世界がもともとそうなっている、というだけで、それ 念な名残惜しい気持ちも、そこにある。 だけのことだ。ただ個体存在としての自分自身は、少々残 この残念な思いをどうすればいいのだろう。そんなこと

もう一つの彼のキーワードは、「ハビトゥス」だ。先祖が を考えていたら、「このもの性」という言葉に出合った。 『湯殿山の哲学』で知った山内志朗の、キーワードだった。

るのがおもしろい。

山伏というスコラ哲学者で、二つの次元に半身をおいてい

あまりにアブダクション的理解だろうか。タマゴとニワト 「このもの性」って、「環世界」と言ってしまっては、

性」という言葉は、わたしには理解できない。でもなんと リでいうと、ニワトリだ。本当のところ、この「このもの

> きつづければ、その先に笑って死ねる青空が開けるような のかと思い至った。わからないけど手の内でこの言葉を磨

2021. 08. 15

木下清一郎 小林武彦 『生物はなぜ死ぬのか』 講談社現代新書 『心の起源』 2021

山内志朗 山内志朗 『天使の記号学 『湯殿山の哲学』 新版』 ぷねうま舎 2017

(音信不通 63

思いの手放し

る』だ。 された校正刷りと原書を、見せていただいた。カバーだけ Genjokoan」という書物の翻訳余話だ。十月一日付けで春 宮川敬之さんに寄稿していただいた。「Realizing すでに出来上がっていた。書名は『「現成公按」を現成す 秋社から刊行される。九月十二日に、「念校8/2] と記 「音信不通」六十号に、「翻訳まで」というタイトルで、

指導に携わっている。行としては座禅修行だが、予備知識 のない欧米人や様々の民族の人びとを、相手にしなければ 原著者は奥村正博師で二十代からアメリカで道元禅の

はじつはこの世界のことは何もしらない。本屋なので眼に 著は『正法眼蔵』だが、「現成公按」はその第一巻目とし ならない。そのため宗祖道元禅師の「現成公按」をテキス し耳にするというだけのことだ。宮川さんとの触れ合いも て一般人に向けて書かれたと耳にしたことがある。わたし トとして用意されたわけだ。もちろん英文でだ。道元の主

> とうるさがられているかも知れない。「何を学べばいいで 定有堂によくお見えになる禅僧の方として畏敬の念を抱 すか?」と問うわたしに、いつも「コナトゥス」とくり返 し応じられる。この一語を求めていろんな本をあさってい いているだけだ。いろんなことを質問して選書のじゃまだ

える。知ることと体得することは違う。だから、くり返し を共有するためには、「思いの手放し」が必要だと付け加 く優しく響いてくる。それは表層としては宮川さんの文章 宮川さんの言葉が一体となって説話のように聞こえてく ける。わたしには仏教知識がないので、道元禅師・奥村師・ たくさんの比喩やエピソードを交えて、懇切丁寧に説き続 い。書物の肉声というのだろうか。魅力的な書物だ。 の力だが、その深層も重なり合って分別することができな る。文体の語り口がとても読者に寄り添っていて、心地よ いる」と語られる。これが結論のようだ。そしてこの結論 いている実際の瞬間においては、花はただ花として咲いて 奥村師はこの本のなかで、お伝えしたいことは「花が咲

する。真実は普遍の側にあり、実感は「このもの性」と32 でいい」という自分中心主義だ。真実よりも実感を優先 一個の「このもの性」を重視する。「笑って死ねればそれ

わたしは生活者なので、常々普遍的な真実よりも、自分

してあらわれる。

こと。どちらの果てへも認識は届かないし、かりに届いたるのはつづめていえば、極大と極小、そして過去と未来のて、「現在の瞬間こそは、私たちが経験できるただ一つのて、「現在の瞬間こそは、私たちが経験できるただ一つの「刹那生死」という言葉があった(P.151 頁)。説明し

「今、ここ」を見失って、余命わずかのなげきしかない。という実存の表示だった。こわいものがなかった。いまは、我が家で叫んでいる。二十歳の頃にも同じことをいってい我が家で叫んでいる。二十歳の頃にも同じことをいってい気づけば、ここ一月やはり「おれたちに明日はない」、と日はない」(「Bonnie and Clyd」)と叫んでいた。ふと日はない」(「Bomie and Clyd」)と叫んでいた。ふとという実存の表示だった。これない。若い頃「おれたちに明としてもそこには何も存在しない。若い頃「おれたちに明としてもそこには何も存在しない。若い頃「おれたちに明

ごとは「刹那」のみと理解する。耳慣れないが「生命実物」ここ」だけと説かれている。過去も未来も他人ごとで、私この校正刷りを読んでいたら、ほんとうにあるのは「今、

として思い至れと教えられていると知った。

こわいことだらけだ。

ら逃れられない。固定観念と言い換える人もいる。と理解できないが、わたしはオブセッションという言葉かでいたら「アディクション」と説明する人もいた。きちん「思いを手放す」、何を手放すのだろう。別の本を読ん

地続きの何かを感じた。 「応量器」というのだろうか、行のあれこれをうかがった。「なぜそうするのですか?」 と関うと、「美しいでしょう」と応えられた。なぜだったか問うと、「美しいでしょう」と応えられた。なぜだったか問うと、「美しいでしょう」と応えられた。なぜだったかりに読みふけっている刹那、その光景が突然甦ってきた。所も無力がある。 「なぜそうするのですか?」と地続きの何かを感じた。

省の折、隣にあった喫茶店でお話する機会があった。修一宮川さんが永平寺で修行されていた頃、久しぶりの帰る

ると信じている。 ぶ。コロナ後のそれからを生きる支えが、きっとここにあー十月には、この翻訳書が定有堂そして全国の書店に並

2021 09 14

奥村正博 (著)宮川敬之(翻訳)『「現成公按」を現成する』

(参考)

安谷白雲『正法眼蔵参究現成公案 新装版』春秋社 1999 『Realizing Genjokoan: The Key to Dogen's Shobogenzo by Shohaku Okumura (2010-07-06)』 Wisdom Publications

0107

これまでの本屋、これからの本屋 (音信不通 64)

本屋」を一望している。 BOOKSTORE」「誠光社」だった。ここ二十年で本屋は半分に減って残り一万店くらいらしい。そんなあげくの「町のに減って残り一万店くらいらしい。そんなあげくの「町のは載の順序でいうと」「Title」「ブックスキューブリーを開いている。

と感じた。

憶をコンパクトにまとめた永江さんの結論が、ここにある

にあるという風景が欲しい」という編集者の注文だった。名前が記されている。依頼されて撮ったのだが、「町の中定有堂のファサードフォトには撮影者としてわたしの本屋」を一望している。

少し考えた。「街の本屋」と言いつづけてきたが、最近は

ップとしての本屋は壊滅寸前だ。「これまでの本屋」の記べは知の本屋」もいいなど、少し気が変わりはじめていた。 では残念ながら歩いて八分、商店街の中ほどという案内では残念ながら歩いて八分、商店街の中ほどという案内では残念ながら拡大印刷するのには解像度が低かった。 では残念ながら拡大印刷するのには解像度が低かった。 では残念ながら拡大印刷するのには解像度が低かった。 では残念ながら拡大印刷するのには解像度が低かった。 では残念ながら拡大印刷するのには解像度が低かった。 では残念ながら拡大印刷するのには解像度が低かった。 では残念ながら拡大印刷するのには解像度が低かった。 では残念ながら拡大印刷するのには解像度が低かった。 定有堂 水江さんの意図は、生き残った本屋、そして置かれた場 水江さんの意図は、生き残った本屋、そして置かれた場 水江さんの意図は、生き残った本屋、そして置かれた場 水江さんの意図は、生き残った本屋、

れる人を知らない。 鳥居さんの本屋のことを語るのは難しい。まだきちんと語先に思い浮かべる。しかし、ここには登場していなかった。社 待賢ブックセンター」の鳥居貴彦さんのことを、 真っ「これからの本屋」というとき、 わたしは京都の 「開風

先日、六十代半ばを過ぎて本屋を始めるという人と語3-

から一箱古本市に出店され、際だった良書を出品されてい り合った。六十過ぎて鳥取に帰省された人だ。二年ほど前 て記憶に残った。開業の計画を聞かせてもらった。きっと

早々に開業される段取りもできあがっていた。でも考えて 成功されると感じた。研究され尽くされていた。年明け

いる方向が少し気になった。研究されていたのは「これま

を延ばすと便りがあった。でもやはり「これまでの本屋」 鳥居さんの本屋だと力説した。しばらくして、開業の時期

での本屋」だったからだ。わたしは「これからの本屋」は

を追求されるだろうと寂しく思った。

いんじゃない」というのが返事だった。これこそがわたし 鳥居さんに、本屋を始めるときどう考えるべきか質問し 「開業のとき、本は十冊くらい並んでても、それでい

ことと、本屋で生計をたてるということがどうしても両立 た。この真意は誰にも届かなかった。本屋が楽しいという りをいち早く読み取った柴田信(岩波ブックセンター)さ しなくなるだろうという危機意識だった。具体的な解決策 の鳥居さんだとわくわくした。むかし本屋全体の行き詰ま んが、これからの本屋として、「普通の本屋」構想を語っ

> 歩んでいる人に違いない。 十年限定で余生の本屋を営む。とりあえず本は十冊も - 135-5んでいる人に違いない。

並んでいればいい。本は売れなくても、人は途絶えること なく訪れる。 本屋的人間という言葉が好きだ。 「いのち」

を使い切る、その手立てとして「本」しか思いつかない人

間のことだ。生活は簡単なほうがいい。わたしにはできな からの本屋」を語ることのできる人の登場を待ち望んでい かったが、鳥居さんにはそれができている。そんな「これ

(参考)

永江朗 『てんとう虫11月号』 クレディセゾン 2021 『菊地君の本屋』 アルメディア 1 9 9 4

は、年金をもらえる人たちが集まって、本屋を営むことだ

いないだろうが、まさに「これからの本屋」のセンターを った。鳥居さんは若いので年金は遠い先のことで考えても

三砂慶明さんの「千年の読書」(音信不通 65)

目にしていたからだ。その一言を中心に、この本について「私は本に人生を何度もだすけられてきた」という発言をきとして活躍している。気になりつづけていたのは前にだ。読書家で本についての知識が深く、大きな書店で目利堂新光社から届いて読んだ。著者の三砂さんは気になる人年明けに刊行される『千年の読書』のゲラ刷りが、誠文年明けに刊行される『千年の読書』のゲラ刷りが、誠文

覚えていないが、いろいろ質問を重ねたとき、答えに代え要するのかもしれない。また、どういういきさつだったかしここから始まった以上、語り尽くすには「千年」の時をい事柄だ。幸いこの本はこの言葉から始まっていた。しかこの一言は、時間をかけてなんどもなんども聞いてみた

考えてみた。

界だった。
フリーの話だろうか。三砂さんの『千年の読書』もそういう世で、と思われた。これも、本に人生をたすけられる、といいの話だった。それだけの設定なのに、この読書は千年つけの話だった。それだけの設定なのに、この読書は千年つけの話だった。

もち知りたかったのは、三砂さんが「本」にたすけられたありたい。知ってどうするという細かい疑問はかえりみず、ただい。知ってどうするという細かい疑問はかえりみず、ただい。だから何処へも出かける必要はない。「何でも知りただ。だから何処へも出かける必要はない。「何でも知りただ。だから何処へも出かける必要はない。「何でも知りただ。だがら何処へも出かける必要はない。「何でも知りただ。だがら何処へも出かける必要はない。「何でも知りただ。だが言葉は果てしのない迷宮なのだろうか。読書は心の旅路

その限りにおいて生きられる、という秘密だったのかもし三砂さんがいいたかったのは、じつは本が精神を駆動するソードは一つだけだった。しかしわたしは間違っていた。は想像しただけで面白そうだ。この本の中で具体的なエピ「事実」の数々だった。そんな経験をした人のエピソード

という点では似ているのかもしれない。 しかし征服する ,本を読むことと山に登るのは似ているだろうか。高揚感

たことがある。筒井康隆の『壊れかた指南』の中の短編だて、「耽読者の家」を読んでみたらいいですよ、と教わっ

った。これは読書の概念をひっくり返す衝撃の物語だっ

山頂というものは読書にはない。でも登山家も「登って136

ういう「一体化」について『フロー 喜びの現象学』で解 ないし、必要があるとも思えない。そう考えていたら、そ も答えようがない。登っている瞬間にこそ行動と思考が一 体化していて、この生きられる瞬間を語ることは容易では いるとき何を考えているの? なぜ登るの? 」と聞かれて

き明かされているのを知った。

「フロー」というのは「一つの活動に深く没入している

読んでいるそのときの精神の駆動(高揚感)そのものなの はなく、山を登っているときのその瞬間の体験のように、 流にある。読書の体験とは、そこにある情報との出会いで る。フローは、三砂さんが見出した、二百数冊の書物の奔 感覚だ。『千年の読書』にはそんな流れがほとばしってい ので他の何ものも問題にならなくなる状態」で最適経験 (自分の最高の状態) ともいうらしい。 流れにのっている

だ。三砂さんはその「駆動」を自在にあやつる。 する重要な要素であるが、それ自体は幸福をもたらさな ところで『フロー』の著者は、「快楽は生活の質を構成

が「楽しいこと」は人を成長させる。そこのところを三砂 長させる力がみなぎっている。「快楽」は人を停滞させる は心理的エネルギーの躍動があり、自分を変え、自己を成 しいこと」の追求だと注意を喚起する。「楽しさ」の中に い」という。「フロー」の状態は快楽の追求ではなく「楽

> 返す。読書は一時的な快楽とは異なり、読後に人を変成-1さんは「読んだとき世界の見方がかわりました」とくり7-を、フローの世界へと変更(転回)させた人間だ。その転 させる力としてある。その変成と幸福はひとつことだ。 なかった人間は、どこかで自分自身の初期設定そのもの 中に喜びと幸福があるだけだ。本をたくさん読んで何処に 例えば歩行(ウォーキング)は目的地を設定するが、舞踏 回を、三砂さんは、「たすけられた」といったのかもしれ いく? そして何をする? 本にたすけられなければなら (ダンス)はどこへ行くわけでもない。踊りつづけるその 目的は外部にいらない。「自己目的的な自己」でいい。

三砂慶明『千年の読書』誠文堂新光社 2022

筒井康隆『壊れかた指南』 文春文庫 2012

ミハイ・チクセントミハイ『フロー体験 喜びの現象学』 思想社 1996 世界

二つの書評

(音信不通 66)

のなのでお伝えしたかった書籍です。評」再録です。いずれも定有堂の棚づくりの核心となるも評」再録にで、最近紹介する機会のあった、二つの本の「書

出版『つながりの作法』綾屋紗月・熊谷晋一郎 NHK

ている。と「つながり」にくくなった、という気がする人に読まれと「つながり」にくくなった、という気がする人に読まれ身体内外の情報を、細かく大量に拾いすぎて、外の世界

求められはじめている、ということだ。この流れの入り口語とした世界がひっくり返り、身体感覚を主語にした本が最近、本屋の店頭で感じるのは、いままでの、常識を主

そして二人とも、自分という環世界を説明する力のある人共著で、 一人は脳性まひ、 一人はアスペルガー症候群。

に『つながりの作法』という本がある。

せいにしてしまう。ここがおかしいという結論に到達すせいにしてしまう。ここがおかしいという結論に到達する人とつながりにくい二人の「つながり」騒動の話だ。三人は、何かしら自分たちは、普通の人たちとは違うと感じ、でもその「普通」って何だろうと考えはじめる。この手続のもと、いつの間にか、みんなの「つながり」の研の手続のもと、いつの間にか、みんなの「つながり」の研の手続のもと、いつの間にか、みんなの「つながり」の研の手続のもと、いつの間にか、みんなの「つながり」の研究となる。コミュニケーションというのは双方あってはじめて成立することがらなのに、実際はその限界を一方側のめて成立することがらなのに、実際はその限界を一方側のがあり、というには、対しいという結論に到達すせいにしてしまう。ここがおかしいという結論に到達すせいにしてしまっている。

して、「普通」の仕組みをも解き明かしていく、この本の 力は大きい。 日本海新聞十月五日 (火)

「現成公按」を現成する』 奥村正博 原著

宮川敬之 春秋社

学びの基本が語られる。宮川敬之氏によって翻訳され日本 を実現したという一点にある。 に伝来するこのテキストの意義は、氏によれば「世界基準」 の巻で、世俗の弟子のために記したともいわれる。つまり 「現成公按」というのは道元の主著『正法眼蔵』の冒頭

して語られる。それは見えているものと見えていないもの 八頁ほどしかない。この宮川訳の書物では三三二頁を費や 人には周知の事実だ。「現成公按」は岩波文庫版でいえば 入門に極意が秘められるとは、何かを極めようと志した

りる。風土と伝統の包み込みがそこにあるからだ。しかし ものの背後に見えないものの影を執拗に感じるからだ。そ める人の世界観がここにある。なぜ修行が必要か。見える とを、縦横に織り上げるのに不可欠の文量だった。 して「信」ではなく「論理」で解明したいというところに 「世界基準」の知見がはじまる。本来宗教は「信」で事足 どんな人に必要な書物なのだろう。修行を抜きがたく求

> れてくる異国人がいる。そして、彼らのつながりでアメーその風土が贈与する「信」に懐疑し海を渡って日本へ流り リカに禅センターができる。 宮川氏はこの本の解説で「信」という言葉を用いない。

氏は「座禅を根底にしながら学問的態度をもって一般にわ した本なのだ。 の中で生育したひとに届く、つまり世界基準の強度を完成 キストはアメリカで英語を母語とする人たちと翻訳チー かりやすく伝える実践を行ってきた家風」という。このテ は沢木興道―内山興道―奥村正博に一貫する姿勢だ。宮川 このテキストでは「学問的強度」がその代替をする。これ ムを結成し一語一語を吟味したものだ。多様な風土・伝統

はその認識を確かなものとし読解や理解が必要となる。そ 物」を忘却している。そのことによって苦しみの中にある えるもの」に惑わされ「見えない」が本来重要な「生命実 の手放し」と「生命実物」という発見だ。わたしたちは「見 伝えしたかったことは、沢木―内山に脈々と流れる「思い してここには幸い「座禅」がそのメソッドとしてある。 のならば、その誤った「思い」を手放せばいい。まず最初 その成果を宮川氏は逆輸入した。原著者奥村さんは、お

ぶ。大事なのはどちらだろう。じつは重要なのは「と」な

「見えるもの」と「見えないもの」が認識の視野に浮か

準との同時性を共有することとなる。在性」を追求する哲学の現在と重なりあい、認識の世界基の知見は「事実に密着するという衝動」「実在としての潜のだ。このように「現成」のありようが展開するとき、このだ。このように「現成」のありようが展開するとき、こ

範囲の人たちに向けた下書き初稿をここではとりあげています。くの人にわかりやすいように二回改稿したのですが、あえて、狭い山陰中央新報十月三十日(土)に掲載されたものの初稿。広く多

2021.12.21

読書のバイアス

(音信不通 67)

性と本屋の個性が、読書のバイアスという面で重なり合いう場所で考えているので、偏り傾向が強くなる。人の個バイアスというのは偏りのことだ。街角の小さな本屋と

驚きのない読書はおもしろくない。これもバイアスなの 驚きのない読書はおもしろくない。これもバイアスなの だが、逆に言うとバイアスのない本屋はおもしろくないの だが、逆に言うとバイアスのない本屋はおもしろくないの だが、逆に言うとバイアスのない本屋はおもしろくないの

者なので本屋トークの端々にバイアスが露出するようで、あ。門外漢だが最近量子力学に驚きを見出している。独学がけば失われ、バイアスの中に共感購入という余地が生じがは失われ、バイアスの中に共感購入という余地が生じた。高者の方に向かって選書しても売れない時代が長い。売な気がしないだろうか。

読を重ねていたある日アブダクション的な「解」に出合42

そこには滅びるのが嫌だ、という心の叫びがある。乱 |

同様量子力学では原子のレベルで考える。読む会で他人ののへの懐疑に始まる。結果、現象でなく「極微」で考える。学者になったひとの著書だ。「空」観は目に見えているも宙をどう見たか』だ。工学部で科学哲学を学び、のち仏教宙をどう見たか』だ。工学部で科学哲学を学び、のち仏教育をがられているが、「読む会」選者の岩田先生が、数同情して下さったのか、「読む会」選者の岩田先生が、数

意見が聞けるのが楽しみだ。

つけた数行だ。わたしのオブセッションのアイコンのよううを説明すると、「知る」ことに、わたしのオブセッション(やむにやまれぬこと)があるのだ。そして狭さとアブン(やむにやまれぬこと)があるのだ。そして狭さとアブン(やむにやまれぬこと)があるのだ。そして狭さとアブン(やむにやまれぬこと)があるのだ。そして狭さとアブン(やむにやまれぬこと)があるのだ。そして狭さとアブン(やむになずや滅び去るべき生物体のなかに、滅びる葉がある。「必ずや滅び去るべき生物体のなかに、滅びる葉がある。「必ずや滅び去るべき生物体のなかに、滅びるまがある。「必ずや滅び去るべき生物体のなかに、滅びるはいなことには関わりたくないからだ。この狭さのありよけいなことには関わりたくないからだ。この狭さのように、対している。

果律を切断すればいいという知解だ。その時はちょうど った。「滅びること」と「滅びに気づく」という二項の因

うたくさんの切断点ができる。つまり時間(因果)が無く 効果的にするためには、「極微」なあり方であればいっそ なり、」という。薪が燃えて灰となる。この因果律を切断 要約できる。「生も一時のくらゐなり、死も一時のくらゐ すれば、薪(生)と灰(死)が別個にあるだけだ。切断を 自身のとらわれている基準を相対化すること」への教えと 『正法眼蔵入門』(頼住光子)を読んでいた。「われわれ

なる。基準の相対化が完成する。 イアスという言葉もある。結論を見出すと、同一の発見を 結論は因果律を切断するということだ。ところで確証バ

くり返したがるという心の習慣だ。 例を挙げると次のような本を読んでいる。『世界はあり

のままに見ることができない』、『時間は存在しない』、 『動物と人間の世界認識』、『マルチバース宇宙論入門』、

ンターフェースのデスクトップ画面であり、物体はそのア ありのままに見ることができない』の世界観は「時空はイ はあるか』、『身体化された心』など。いずれも「極微 の世界観だ。現象が「情報」として理解される。『世界は 『意識と本質』、『「人間以後」の哲学』、『DNAに魂

イコンである」、ドットは素粒子であると語る。アブダク

ション的にわかりやすいが本当だろうか。 のまま本屋のバイアスとなって棚の一角を占有している。 一個人のアブダクション的な話だが、本屋なので、そ 13ョン的にわかりやすいが本当だろうか。

こんな読書のバイアスに興味ありませんか。

2022.01 25

頼住光子 『正法眼蔵入門』 角川ソフィア文庫 『仏教は宇宙をどう見たか』 化学同人 2021 『心の起源』 中央公論新社 2002 2014

青土社 カルロ・ロヴェッリ 2020 『時間は存在しない』 NHK出版

ドナルド・ホフマン

『世界はありのままに見ることができない』

木下清一郎 佐々木閑

野村泰紀 フランシス・クリック 『DNAに魂はあるか』 篠原雅武 井筒俊彦 日高敏隆 『「人間以後」の哲学』 講談社選書メチエ 『意識と本質』 『マルチバース宇宙論入門』 『動物と人間の世界認識』 ちくま文庫 岩波文庫 1991星海社新書 講談社 1995

フランシスコ·J.ヴァレーラ他『身体化された心』

工作舎

2001

権力を取らずに世界を変える(音信不通 68

石橋毅史さんの『「本屋」は死なない』を、久しぶりに

だ。歳月を実感した。 後書きに記してある。もうひとつは、先日会った出版社の ずに世界を変える』という本の思い出だったからだ。この 送られてきた、「本屋な日々」の最新号が、『権力を取ら 手にした。二〇一一年刊行の本だから、十年の年月が過ぎ 本は、『「本屋」は死なない』執筆のモチーフだったと、 二十五歳の青年が、この石橋さんの本を知らなかったから ている。きっかけは二つあった。ひとつは、石橋さんから

祝ぎたかった。二十歳の頃だろうか、「もっと強く願って はどうでしょう? とメールした。気持ちとしては、金銭 橋さんに、「権力を取らずにウナギを食べる」、というの にゆとりがなくても、エイヤとウナギを食べた快挙を、言 いいのだ / わたしたちは「明石の鯛を食べたいと」、と ウナギ丼を、お取り寄せで食したばかりだったので、石

ことだが、そんな巨大な合意のもとではなく、千人単位 の小さな合意で、ユートピアは築けるという意識の転換44

きは、権力を取るというのは、国家を支配下におくという 支配してきたパラダイムです」と述べる。石橋さんの気づ その営みの発見だった。著者ホロウェイは、「国家を通じ

て世界を変える。これが一世紀以上にわたって革命思想を

りだった。わたしの二十歳は、革命を起こしても、願いは だった。すでに敗北していたのだ。 鯛を食べることくらい、という願いの小ささの、 おかしさ いう茨木のり子の詩を耳にした。読まれた昭和三〇年ころ のこの詩のメッセージは、「もっと貪婪に」という歯ぎし

らずに世界を変える生き方だった、ということに。序章・ で、「気持ちを分かち合いたい」という望みだった。しか だが、そこでは疎外されつづけた。だから小さな本屋千店 る。身の丈から世界を撃つという構成だったのだろうか。 かなかった。石橋さんにとって、「本屋」とは、権力を取 し石橋さんの読みは、「権力を取らずに世界を変える」、 五坪の本屋の店主の気持ちは、大きな書店で働いていた人 できたら、世の中は変わる。」という言葉を拾っている。 一章・終章と、五坪のちいさな本屋についてこだわってい 「情熱を捨てられず始める小さな本屋。それが全国に千店 『「本屋」は死なない』を最初に読んだときには気がつ

と答える。石橋さんは、この抽象的な問いかけを、日本のるかについて外から限界を押しつけられるのを拒むこと」しょうか」とホロウェイは問いかける。「自分がなんであ「国家の支配をめぐる闘いに代わるものとは、何なので

十年前から夢見ている。 ーワードを合い言葉にするそうだ。石橋さんは同じことを二十五歳の青年の出版社は、今年は「共有地」というキ

支配をめぐる闘いに代わるものとは、何なのだろう。「共

五坪の本屋のはじまりに見出したのかも知れない。

るだけだ。連載は九○回に近づこうとしている。屋な日々」と言う。具体的な本屋的人間の生きる日常があ有地」という、あるようなないような言葉は使わない。「本有地」というのは、コモンというと少し雑多な主張になる有地」というのは、コモンというと少し雑多な主張になる

を手立てとした「やり直しの形式」なのかもしれない。そのけて「もっと強く願っていいのだ」という励ましなのだ。なかった人間の、七転び八起きの話なのだと思う。本屋になかった人間の、七転び八起きの話なのだと思う。本屋にながった人間の、七転び八起きの話なのだと思う。本屋に本屋が仮に身の丈の営みならば、そこには「本」と関わ

こには「ピュア」な何事かがつながりつづけている。

2022.02.23

茨木のり子 「もっと強く」 ジョン・ホロウェイ 石橋毅史 石橋毅史 版』 大窪一志・四茂野修・訳 同時代社 でた本・来月でる本」発行、トランスビュー編集 2022 『「本屋」は死なない』 |本屋な日々 第88回 『権力を取らずに世界を変える 詩集『対話』 本 2009-」 共同DM 「今月 2011 202 童話屋 2 0 0 1 増補修訂

記憶を折り畳む (音信不通

<u>69</u>

卒業式でした。でも、院に二年残るのでまたよろしくお願 う? 夕方、「読む会」のメンバーのH・Mさんが「今日 体力学の研究をするそうだ。 式があったらしい。大学は二つある、どちらだったのだろ いします」と挨拶に見えた。鳥取大学の卒業式だった。流 今日は県民文化会館の駐車場が満員だった。大学の卒業

寄稿者のR・Mさんだ。卒論で「読む会」と本屋のことを 会」をとおしてみえた世界―』というタイトルだ。卒業後 書いている。『本がある、人がいる ―定有堂教室「読む

「読む会」にはもう一人鳥大生がいる。「音信不通」の

は映像メディアに就職がきまっていて、なるほどと思わせ

るドキュメンタリータッチの論文で、感性豊かに描かれて いた。大学でも評価が高かったらしい。 公立鳥取環境大学に入学する早々「音信不通」に寄稿し

ていた、北海道出身のN・Uさんも四年が過ぎた。後半年

土壌に与える影響』という論文だった。専門的で研究成果 の判断はできないが、論文構成のしっかりした理系の研究 ニホンジカ(Cervus Nippon centralis Temminck)の分布が

ほどは残るらしい。卒論は『鳥取県東部の小流域における

そうだ。幸い空き家を貸してくれる人がいて、集会所を兼 禍でリアル授業が失われ、自力で大学生活を工夫している 都の待賢ブックセンターの鳥居さんの紹介だった。コロナ ている。店内写真を見せてくれたが居心地良さそうな空間 ねて本屋を営んでいる。本の仕入れは鳥居さんが力添えし 三月上旬には九州の大学生(二回性)が訪ねてきた。京

だった。仕事と生き方、それもオルタナティヴというつな 分からないとのことだったので、付録の章の「傷と運命 がりだろうか。『暇と退屈の倫理学』はちょっと読み方が 方』『暇と退屈の倫理学』『ルポ路上生活』『まちがった ねた。旅の途中訪れた本屋で、こんな本を購入しました、 った。最後の本は知らなかった。影山知明著クルミド出版 っていいじゃないか』『続・ゆっくり、いそげ』の五冊だ と鞄から取り出して見せてくれた。『かかわり方のまなび 興味を持ったのでいまどんな本を読んでますか? と尋

を説明するという手法が面白い。 むといいですよと告げた。「サリエンシー」という概念の 創出がユニークだからだ。自分で概念を創出し、その概念

者研究」は自分の関心事だが、踏み込み過ぎてはいけない 迷い、内沼晋太郎さんの『本の逆襲』をすすめた。「当事 印帳」にサインを求めて旅している。そしてサインをもら ので本屋つながりにしておいた。旅の「最後にいいことが ったら必ず本を一冊購入するルールらしい。さて定有堂の 一冊は? 今だと『つながりの作法』だと思ったが、少し このT・Nさんは鳥居さんが作ってあげた「本屋のご朱

と書き加えた。その日のうちに行ったのだが、お休みだっと、あわてて「ご朱印帳」の行く先を増やし、「汽水空港」あるそうです」というので、ここを終点にしてはいけない

たそうだ。

鳥取大学生だった。いずれ転身の時期が必ず来るから、「やどう考えたらいいのだろう? と問いかけた若者がいた。少し前には、ボクサーになりたいけど、仕事と生き方を

今はコロナ禍で学園生活が閉ざされている。でも考えて事だろう。 のためには、人のつながりを豊かにしておくのが大た。そのためには、人のつながりを豊かにしておくのが大

内沼晋太郎

「本の逆襲」

朝日出版社 2013

みれば、わたしたちも大学紛争で学園は閉ざされていた。

國友公司 『ルポ路上生活』 KADOKAWA 2021 西村佳哲 『かかわり方のまなび方』 ちくま文庫 2014

綾屋紗月 熊谷晋一郎 『つながりの作法』 NHK 新書 2010國分功一郎 『暇と退屈の倫理学』 新潮文庫 2022 影山知明 『続・ゆっくり、いそげ』 クルミド出版 2018 森毅 『まちがったっていいじゃないか』 ちくま文庫 1988

えている。きっかけは定有堂の三階にあるカフェが、四月 から「ブックカフェ」に衣替えしたからだ。 最近カフェにある本と本屋にある本の違いについて考

がある。カフェで読書したりモノを書いたりしていると 店内には久しく前から「カフェブック」と銘打った一角

とはないだろう。本を手にして会話するというのは、自分 行き、その高揚感を共有するための本と付け加えてもい き、きっとなにかしら心に高揚感が訪れる。その高揚感に つり合える本をイメージしたものだ。二、三人でカフェに い。二、三人で行く場合、黙って各自読みふけるというこ

える。つまりそれだけ個性の強い本でなければ、カフェと 秒位で内容の全体像がイメージできればとてもいいと考 いうステージを支えきれないはずだ。それがわたしの構想 カフェに置いてある本は読まれなくてもいい本だし、三十 の好みや個性をくっきり示すいい機会だと思う。わたしは う?」と質問した。 「書店にある本」→ 話題

する「カフェブック」だ。

くなった。 かり人を見据えている。わたしは、カフェでは、特定され ある幻想領域の形相化だと夢見る。そう思った瞬間、他の ないどこかにいるようでどこにもいない、読者を想定す 人はこの違いについてどう考えているのだろうと知りた る。カフェブックは、人そのものでなく、人と人との間に ている。そして手にする人の顔も見えているらしい。しっ でもブックカフェの側は、じっくり読んで欲しいと考え

さんは、「あらためてそう問われて、戸惑いました」、少 店に勤めている。カフェで読書会も継続している。「カフ おられるのでもっともだと納得。一番期待して質問したI ェ、書店、本屋にある本って個性的にどう異なるのでしょ 毎月目を通してくれているT・Iさんは愛知県の大きな書 し時間を下さいね、というお返事だった。「音信不通」に 食店に本があるのがおかしい」と即答。日頃本を慈しんで 「音信不通」寄稿者の愛書家のMさんは、「そもそも飲

主)の哲学っぽいもの 個人的 「本屋にある本」→ 店主 地域 一冊づつ 小さな世界 趣味趣向 お店(店

身近 ロングセラー ニッチ 賞味期限が早48 -

流行

新刊

すさ 「カフェにある本」→ ライフスタイル 暮らし 物量 オールラウンド 万人向け

定番 わかりや

と整理してくれた。テレビで説明図や項目リストを書き ファッション 日常 旅 視覚的 人とモノコト

騒いだ。 出したものをフリップボードというが、この整頓された一 覧をボードにすれば、数時間ディスカッションできると心 結局ここには、本への焦点距離の深浅がある。小さな本

更新調整していく必要がある。 る。だからいつもこの焦点を時代に合わせ、往来に合わせ

屋は個性派とよくいわれるが、個性には賞味期限が必ずく

において本が人と人とをつなげていく。数日前「読む会」 の初期に話題になっていた木村敏の『心の病理を考える』 のち)とトポス(場所)の意味だ。そしてその表象の仕方 いる。これも本との焦点の合わせ方の一つだ。バイオ(い ここ数年定有堂は「本のビオトープ」と名のりを上げて

が、自宅の積み重なった本の中から出てきた。まったく内

容を含め忘れていた。読み返したら「ビオス」と「ゾーエ

る特定の個人の有限の生命。ゾーエーは個体の分離を超え ー」という一節があり驚いた。ビオスはバイオの語源。あ

て連続する生命。ゾーエー的生命はビオス的限定によって

的」(アクチュアリティ)の焦点への適応調整というもの って生きる拠点となる。そしてその拠点の素材が「本」 -1はじめて個別化される。つまりトポスはその限定性により-の品揃え」の根底には「潜在性」(リアリティ)と「現働 であるとすれば 「本のビオトープ」 が現象する。 結局 「本

別の物語として語られなければならない。 があったのかもしれない。賞味期限を免れるためには、こ クチュアリティ)の範疇にあるものだろう。本の「潜在性」 のような「生成変化」の意識が必要だったと思える。 (リアリティ)は闇の底へと限りなく深まる。それはまた ブックカフェもカフェブックもこのような「現働性」(ア

(音信不通 71

固定観念

もう一つは原題が『OBSESSION』だったと知ったこと。 に、原作の日本語訳は、この度が初めてだったということ。 かった。驚きは三つだった。世間を騒がした作品だったの た。ゴダールの有名な映画だが、原作があったとは知らな 新潮文庫の新刊に、『気狂いピエロ』が入っていて驚い

現実に根拠はなく観念レベルの衝動なのだ。ヴァレリーの ともいえる。ただ訳語としては「固定観念」を選びとる。 思考のアイコンのように多用している。私的衝動の初発性 強迫観念の意味だ。わたしはこの言葉の使い勝手がよく、 オブセッションとは観念に取り憑かれることで、妄想、

『テスト氏』を読んだ頃に知った言葉だ。後に『固定観念』 (Lidée fixe)という著書があることも知った。

とだ。この指摘にあうまで気がつかなかった。調べたらヴ ファタル」という破滅をまねく女だ、と解説してあったこ 三つ目は、このオブセッションの志向対象が、「ファム・

> 性があるからだろう。そぐわない、手が届かないとわかっ シムノン『離愁』が思い浮かぶ。 は、そういう系列にあったのだろうか? ジイド『狭き門』、 グレアムグリーン『情事の終わり』、モラヴィア『倦怠』、 ファム・ファタルが運命を狂わせるのは、そこに非対称

わぬ恋が動機だった。そういえば、意図せず惹かれる作品 ァレリーの『固定観念』も肖像彫刻家の若い女性へのかな

ているから、慾動が立ち上がる。

こで何かが発火する。 はありえる。しかしその次元はわたしのものではない。こ 利上ありえる。この次元ではありえないが、異なる次元で いた。四角い三角のようなものだ。事実上ありえないが権 向がある。「テスト氏」はたしか「可能性の魔」といって わたしのオブセッションは解答のないものに向かう傾

のないところにオブセッションが生まれる。 に似ている。答えのないのはわかっているし、むしろ答え に「どこから来て、どこにあり、どこへ行く」という問い 存在論的にはわたしのオブセッションは、ゴーギャン風

『概念と生』という本を読んだ。本が好きという事は「概 ところでタイトルに「概念」という言葉があったせいで

ものが超越的でないものの『中にある』ことが可能なの150 念の魔」に取り憑かれていることだ。「どうして超越的な

か」という一節が気になった。カテゴリーの階層が違うの 執拗に念頭を去らないオブセッションの一つだ。 にくぐり抜けて通じることの不思議だ。解けない謎だが、

―22)。仏教書だが量子力学の知見をとり入れた本だ。こ自分自身の組成と、その機能を客観的に理解する」(PP.21在を究極の要素にまで分析することではじめて、私たちはか』だ。そこにひとつの解が読みとれる。「この世の緒存もう一つ読みかけの本がある。『仏教は宇宙をどう見た

ご。ご。一次のところ「量子力学の存在論」という切り口でいろんな人のところ「量子力学の存在論のであり、一次できるというのが、一次できるというのがのが、一次できるというのがのが、一次できるというのがのところ「量子力学の存在論」という切り口でいろんな人のところ「量子力学の存在論」という切り口でいろんな人のところ「量子力学の存在論」という切り口でいろんな人のところ「量子力学の存在論」という切り口でいろんな人のところ「量子力学の存在論」という切り口でいるんな人のところ「量子力学の存在論」という切り口でいるというない。

ないが、小林秀雄訳では「また見つかった、――何が、―ランボオの詩があった。字幕でどう訳してあったか記憶に『気狂いピエロ』の原作にはないが、映画のラストには

けしてないのはオブセッションの収束の刻のことだ。 鴉』は Never more(けしてない)と結論を語っている。 へのくぐり抜けは存在しないと気づいてしまった。生成変 へのくぐり抜けは存在しないと気づいてしまった。生成変 ブセッションに終焉はなく、何かと溶け合うほかに外部・1 ていたのだが、『固定観念』の成り立ちをたどると、オ1-51

2022.05.09

ポオル・ヴァレリイ 『固定観念』 白水社 1931ヴァレリイ 『テスト氏』 福武文庫 1990ライオネル・ホワイト 『気狂いピエロ』 新潮文庫 2022

アルベルト・モラーヴィア 『倦怠 新装版』 河出文庫 2014グレーアム・グリーン 『情事の終り』 新潮文庫 2014

アンドレ・ジード 『狭き門 改版』

新潮文庫

ジョルジュ・シムノン 『離愁』 ハヤカワ文庫

1975

野村泰紀 『なぜ宇宙は存在するのか』 講談社ブルーバックス野村泰紀 『マルチバース宇宙論入門』 星海社新書 2017佐々木閑 『仏教は宇宙をどう見たか』 化学同人 2021多賀茂 『概念と生』 名古屋大学出版会 2022

はヴァレリーの知性が「認識」において制御したと納得し

の「見者」というオブセッションが狂気をはらみ、やがて

-永遠が、海と溶け合う太陽が」 となっている。 ランボオ

闇の奥 (音信不通 72

『ふざける力』(コア新書)という本がある。著者はワクサカ 定有堂書店でここ一年留まることなく売れ続けている、

た。ワクサカさんの知人が買っているのかなと思ったが、購 るかな? 」と記した。その頃から顕著に売れるようになっ た。それで本にポップをつけ、文末に「ワクサカさんどうして い。それで、入り口ど真ん中に、特設コーナーを作っている。 当然、店内に本を置くのだが、適切な置き場を思いつかな かけると気軽に、『音信不通』に寄稿してくれる。親しいので 入者に聞くとそうでもない。タイトルが気になるという理 くなって七年以上になるだろうか。プロの文筆家だが、声を ソウヘイさん。鳥取と東京の二重生活をしている人だ。親し コロナ禍の中で、東京に足止めされ鳥取に来られなくなっ

く離れた異郷に魔術的な力(アウラ)の存在を感じるという 由だった。 『闇の奥』というのはコンラッドの小説で、文明の光から遠

> してしまった。いつか「未来都市トットリ」という著書も構想 この小説を読んでいたらふとワクサカさんのことを思い出 している、と聞いたこともある。 話だ。そんなカルト的な世界と関係ないのかも知れないが、 しかし発端は、なぜか『ふざける力』がポツポツと売れ続

けていたという発見と驚きだ。

どこでもない場所に置いている。神棚のようなものだ、とい くしてくれるんだろう」だ。ところで定有堂は、「意味」を求 いう。この本の主張は一つ。「ふざけるって、なんて心を楽し る力」の本質要件だ。 ものはじつは存在しない。それで入り口ど真ん中に、つまり める本を、並べる本屋だ。だからワクサカ本の置き場という われてきました。だから無意味の価値を、信じています」と なくもない郊外だ。「二重」そして多重ということは「ふざけ に」鳥取に居住地を持ったことを挙げる。やや過疎地といえ 「ふざける力」の一例としてワクサカさんは、東京とは「別 ワクサカさんは、「私は常に、意味のないものによって、救

大事なキーワードだ。構図にがんじがらめになって苦しむ。 152 と、ヒケツを述べる。この「構図」というのは、この本の一番 「構図からなにかが一瞬抜け出した時に、笑うようです」

ワクサカさんは多才でコントのシナリオも書く。経験で、

まこの瞬間に気がついた。

もすぐ再び構図が締め付けてくる。それ故たくさんの構図 ける力」。 を持たなければならない。そして抜け出す手立ては「ふざ だから構図から抜け出すことが人生の一大事。抜け出して 味化(生成変化)も、いま現在は最前線に位置する意味のあ - 153へ逃れたいという。でも「規範」から「逸脱」するという非意 55 る営為なのだ。

学生のとき歴史の先生が、授業を脱線して語った一言を、 ぎりのところで手にした、説明し切れない発見だからだ。中 て言葉はな、死以外には使っちゃいけないんだ」という言葉 「衝撃的」な言葉としてワクサカさんは忘れない。「『絶対』っ

ーナーに処を得るだろう。でもワクサカ本は少し違う。ぎり

ふざけて生きようというテーマだったら、自己啓発本のコ

ら、生きていくことはできない、とそのとき気づいたのだ。 絶対との対蹠点に「ふざける」がある。意味を求めるその先 くないんです」。つまり、「絶対」という「構図」に追いつかれた だった。「それからずっと、死の恐怖に怯えています。死にた

れてきました。無意味を意味ある言葉で語ることに、ぐった には「無」しかない。存在の充実感は、「無」と「無」との間の、 念と現実との相互干渉のことだ。そこに相互承認があれば りして来ました」と。 網の目上にしかないのだ。 著書の後半に至って、ワクサカさんはいう。「正直、私、疲 定有堂は「意味」を求める本屋だといった。「意味」とは理

「意味のあるもの」となる。ワクサカさんは「意味のないもの」

先日空港に向かう直前に立ち寄ってくれたワクサカさんの

とを考えてみた。『ふざける力』は、闇に分け入る奥深い本 まなざしの奥に、「闇の奥」を見たような気がして、こんなこ

なのだ。

ジョウゼフ・コンラッド ワクサカソウヘイ『ふざけるカ』コア新書 コアマガジン 『闇の奥』 光文社古典新訳文庫 2015 2009

読書の四面体

(音信不通 73

取り上げられている。この本は、料理をする人として生き ることになったきっかけだ、と聞いて気になった。 ェアという方法を取り入れ成功したという意味で、雑誌 『spectator』の「新しい食堂」という特集でも、巻頭に 『料理の四面体』という本がある。新形態というのは、シ 近所で、新形態の食堂を営んでいる、Mさんに教わった、

つまり四面体となる。 素材いわば「逸脱」したものが、料理という形態、「規範」 の手法で、身近なものを組み合わせていくことで、任意の た。超越の頂点にあるのは「火」で、底辺に「油」「空気」 に高まっていくという内容の本だ。 料理の神学だと思っ 「水」という、三点を結ぶ三角形がある。三角錐なのだ。 読んでみたら料理の文化人類学だった。ブリコラージュ

と想像した。頂点に「本屋」、底辺の三角形三点に「本」 「読書の四面体」というのは、どんな形になるのだろう

> 棚」の辺には本屋の仕事という意味で「本屋的人間」と読 み込んでみた。でもこれは単なる遊びで、それほど深い思 索にもとづくものではない。ただの本屋感覚だ。 の伝承」、「本屋 - 人」の辺には「本屋好き」、「本屋 -「人」「棚」と配置した。「本屋 - 本」の辺には「記憶

う? と気にしていたら最近『存在消滅』が刊行された。 だ。七年ほど前に書かれた本だ。その後どうしてるだろ なぜ小屋で暮らすようになったか』を読むのがおすすめ き方と住まいを語る本だ。著者の哲学を知るのは、『僕は を超えて人に思いを馳せるときの、荒涼とした体感だ。 読書の四面体の中に神はいない。神は外部に存在する。 頂点にきてもかまわない。料理の四面体の神は「火」だが ことが可能だという点にある。四つの点(角)のいずれが てきた。インフラなどの定常世界を拒否して、孤絶した生 たものとして、『スモールハウス』のことを、何度も語っ でここにありつづける存在の仕方だ。この「実存」を描い での神は「実存」かもしれない。実存とは、人が人の境界 実存とは死ぬという自分のありようから目を背けない ひとつ倒して「人」を三角錐の頂点にしてみると、ここ 「読書の四面体」が料理の四面体と異なるのは、転がす

「死とは、『永遠の無』である。永遠の無。私はこれ154-

てしまう」が、こわい。なにを考えていても、結局、ここに戻ってき

嫌いではない。とても引き寄せられる観念の世界だ。のような、あらかじめ失われた動機からはじまる世界は、ので土台が安定しない。そういう茫漠とした本だ。でもこは消滅する。「結果」から「動機」を組み立てようとすると死の観念の恐怖を語り続ける本だ。人も宇宙もいつかと死の観念の恐怖を語り続ける本だ。人も宇宙もいつか

味合いで人物化された『テスト氏』という本を懐かしく思意識の強度をいうのだろう。フランス語で「頭」という意るようなものだという。ここでいう脳の支配というのは自ら終わっているからだ。著者は自身の脳の中に住まっていここから始まる生はシンプルなものとなる。始まる前か

か。ヴァレリーは「苦痛は、苦痛を認識へ変えてしまえるめる処は最小なのだ。なぜそんな単純さへ追い込まれるのその通りだ。本のことしか頭にない。現実世界に生活の占

ながりの元にあるのだろうか。ブッキッシュという面ではものである」と記される。自意識と生活の簡素さは深いつ

い出す。エピグラフに「デカルトの生活はもっとも単純な

ような装置を求めていた」と言っていた。ここでは自意識

は自己救済の装置の座なのだ。

生活は簡単な方がいい。任意に生きる方がいい。実存の

食べるだけだ。 しまった。わたしは「本」は読むが「料理」は作らない。 という一辺を考えていたら、そんな実存の風景に出会って という本を読むと知らないことが増えるばかりだ。「人 - 本」 こんな本をめぐる考え方は、とても偏っているに違いな ~「抖撃」)が引いないになっている。 これはしから気づきは「規範」から「逸脱」へと向かう。 これはしかっち

し「料理」の方向とは逆にたどるように思える。

玉村豊男 『料理の四面体』 中公文庫 2010

2022.07.17

『spectator』(新しい食堂)エディトリアル・デパートメント

高村友也 『存在消滅』 青土社 2022出版 2015出版 2015高村友也 『僕はなぜ小屋で暮らすようになったか』 同文舘高村友也 『スモールハウス』 ちくま文庫 2018

ヴァレリー 『テスト氏・未完の物語』 現代思潮新社 1967

本屋の「このもの性」 (音信不通 74

観念を日常性として生きよう、というのが久しく定有堂

論はいまだ出ないが、そのうちなんとなく店内空間がそん という概念があった。大事だよということだったが、よく 理解できなくて他の何人かのお客さんにも尋ねてみた。結 以前、店頭でお客さんに教わった言葉に、「コナトゥス」

方が本屋は楽しい。 っかけはふとした会話から始まる。そんな偶有性があった そのようにして本屋に観念性の移り変わりが訪れる。き

見落としていた。『持たない幸福論』幻冬舎文庫が面白か

った。「京大卒の元ニートが提唱」と説明文にあった。京

な観念性に染まりだしてきた。

望と言い換えることもできる。 たしはオブセッション(執着)と言い習わしてきた。わた しの解釈では、コナトゥスとはこの執着なのだと思う。欲 「なぜかわからないがこうしてしまう」、そのことをわ

を入り口として用意することとなった。(『持たない幸福 こんな本屋の観念性を反映するために、試しに二つの本

論』と『目的なき人生を生きる』)

寄ってくれた、歌人のYさんと、「ナリワイ」が気になる じつは観念性と深くかかわる。夏のはじめに帰省し、立ち 念を突き詰めた生き方がある。簡単・シンプルなものほど という雑談をしていたら、この伊藤洋志と共著している は定義される。しかし「ナリワイ」という言葉の先には観 生活の延長で無理をしないでできる小さな商売、とここで はオルタナティブなものとなる。「ナリワイ」とは自分の くる』 ちくま文庫がある。 日常に観念を導入すると生き方 ルサトをつくる』という本だった。この共著者(pha)は のテーマなのだが、常設の一冊に伊藤洋志『ナリワイをつ 「pha ファ」さんも面白い人だよ、と教えてくれた。『フ

突き詰めた主張(コナトゥス)だ。そういえば、『京大吉 そこでの共同生活を、卒業してもつづけたい、というのが 田寮』(草思社)という写真集も店頭のロングセラーだ。 大にはかつて「吉田寮」というアナーキーな寄宿寮があり、 この本と楕円の二つの中心のように、もう一冊、山内志

は数多く読んだが、とても理解が及ばない。くり返し読156 こちに並べている。このタイトルに惹かれこの著者の本 朗『目的なき人生を生きる』(角川新書)を、大量にあち

持たない」というのが大きな結論だ。この欲望はコナトゥいるのだと気がついた。「欲望は原初形態において対象をものが最後に現れる」。これはコナトゥスのことを言ってい」、「目的が後から生まれる」、「最初に存在していたはないかと思うようになった。「形相性の中に目的はなむうちに、言いたいことはこの新書に尽くされているので

「このもの性」というのもつかみどころのない言葉だが、スの別名である。これは大きな発想の転換だ。

たね」と声をかけられる。物理的には何も変えていない。とうれないを対し、シンプルで簡単な生き方を選択する。とられないために、シンプルで簡単な生き方を選択する。とられない言葉だが、この周辺をめぐって本屋の中を整えてみたい。ここ数日何人かの人に「本屋の中がすっきりしてみたい。ここ数日何人かの人に「本屋の中がすっきりしてみたい。ここ数日何人かの人に「本屋の中がすっきりしてみたい。ここ数日何人かの人に「本屋の中がすっきりしてみたい。ここ数日何人かの人に「本屋の中がすっきりしてみたい。ここ数日何人かの人に「本屋の中がすっきりしてみたい。

れも「このもの性」だと説明される。れる音、波の音、ざわめき、そんなつかの間の出来事、そ変わったのは観念性だけかも知れない。砂の動き、氷の割

所在なく本屋にふらりと踏み入る。とくに目的もなく棚

との出会いもそんな出来事だ。我に返るとは正気づくとい から棚へと歩く。ふと我に返る瞬間が訪れる。一つの言葉 りか書房 2015

そして本は人を「偶有性」(個体性)の肯定へ誘うものだい。Pha さんは、「知識は人を自由にする」。本というのい。Pha さんは、「知識は人を自由にする」。本というのい。Pha さんは、「知識は人を自由にする」。本というのと言葉にして教えてくれる」という。と言葉にして教えてくれる」という。わかりにくい本屋話になったが、生きる力は「秩序」のわかりにくい本屋話になったが、生きる力は「秩序」の中ではなく「逸脱」の中でこそ発揮されるという結論だ。中ではなく「逸脱」の中でこそ発揮されるという結論だ。中ではなく「逸脱」の中でこそ発揮されるという結論だ。

2022.08.10

と考える。そこに「小さな一冊の衝撃」がある。

「『こうで』 伊藤洋志『ナリワイをつくる 人生を盗まれない働き方』ちくま

伊藤洋志+Pha『フルサトをつくる 帰れば食うに困らない場

pha『持たない幸福論 働きたくない、家族を作らない、お金)所を持つ暮らし方』ちくま文庫 2018

平林克己他『京大吉田寮』草思社 2017に縛られない』 幻冬舎文庫 2017

りか書房(2015) | 予川泰久 堀千晶『ドゥルーズ(キーワード89)増補新版』せ山内志朗『目的なき人生を生きる』角川新書(2018)

独学孤陋 (音信不通 <u>75</u>

するようになって、この言葉が気になり始めた。「学び系」 と「独学」の重なり具合について、結論の出ない考えがふ つふつと湧き出している。 最近コロナ禍のせいで、「独学」という言葉をよく目に

こでもいいからどこかへ行きたい』(Pha)を手にして、 先日見知らぬ青年が、定有堂の文庫カバーを付けた『ど

庫のお薦めコーナーの一冊だったので、そこの二十冊ほど いですか? 」と声をかけてきた。入り口近くの、面陳文 「この本を読み終えたのですが次はどの本を読んだらい

求めるのだと思う。暮らしの日常の中で、分かりやすい結 が、「分からない」という事柄との出会いが、次の読書を す分からなくするのではないだろうか。最初の本もそうだ を前にして雑談した。結局『はたらかないで、たらふく食 べたい』(栗原康)と『現実脱出論』(坂口恭平)を買っ て帰った。いずれも即答解決の本ではない。むしろますま

> も「独学」のひとつの姿だと思えてきた。 態へと変化していく。本屋にある本からの「学び」、これ 論を掃き捨てることのくり返しの中で、知らぬ間に次の形

資本による階級格差を論じたもので、確かにタイムリーな られたからですよ」という返事だった。ブルデューの文化 な笑い話をした。「やはりブレイディみかこさんの影響で ものではあった。でも少し肩すかしだった。 その後この九月に版元の人とランチする機会がありそん 年に重版されていた。むろん急ぎ数十冊仕入れ手配した。 切が続いていた。春近くに新古書店で見つけライン引きだ ども』(ちくま文庫)という本がある。この本は久しく品 すよね」 と聞いたら「え? 『100 分 de 名著』 で取り上げ ったが小躍りして購入した。読み終わって気がついたが前 学びに二重性があるのだろうか。『ハマータウンの野郎

世界(働きの場)と、そこから見える世界のことだが、そ 文化を分析してみせる。「地べた」というのは、身の丈の 圧することになる教室のメカニズムへの加担を拒んでい のポール・ウイリスはいう。「少年たちは、自分自身を抑 の「地べた」の側に生きる若者に寄り添った分析だ。著者 えるのに、欠かせない本だ。指導理念に画一化された学校 この本は、わたしのこだわる「学び系」と「独学」を考

る」、つまり「能力主義競争の拒絶」だと。そこを訳者18

の山田潤は元定時制高校の教諭でもあり、エッセンスをつ かんで簡潔に解説している。

学びは達成度を試される。集団の中で判定され位置づけら れる。競争選別でない「地べた」の学びというものがある 学校は規律や階級意識を内面化するというのだ。学校の もの前提にあるゴール=価値尺度をみずからのものと る序列を受け入れるというにとどまらず、競争のそもそ して内面化するということなのだ。」 「競争に加わるということは、その結果として与えられ

若者を、「インフォーマルな集団」と概念化している。こ 『ハマータウンの野郎ども』は、学校文化になじめない

のだろうか。

能力を身につけるようになる」。学校文化に違和感なくそ えない裏側を感知するようになる。.....いわば二重透視の る。「インフォーマルな集団に加わると、ひとは人生の見 こには解決にいたらないかもしれないアポリア・難問があ れる人もいる。最前の青年は、「現実脱出」「はたらかな のまま社会に出て行く人もいる。しかし二重透視にさらさ

ということだ。 難問というのはここに結論はない -1そしていまもそうだ。難問というのはここに結論はない -159

はない。結果にとらわれると結論に支配される。手助けを 整理整頓された思考の技法に巻き込まれるのは好きで

求めると人の通念にとり込まれる。

二重透視と関わりなく、ただ本を読むことにしか興味は

ず学ぶというストリート(往来)の生き方に執着し続ける。 持てない。結論の出ない勝手なことばかり述べるが、学ば を人に委ねてはならない、ということをいつも思う。 本屋は路上(地べた)に生き方を探す小商いなのだ。評価

2022.09.21

栗原康『はたらかないで、たらふく食べたい pha『どこでもいいからどこかへ行きたい』 幻冬舎文庫 増補版』 ちくま

ポール・E.ウィリス 岸政彦『ブルデュー「ディスタンクシオン」』NHK 術文庫 1996 『ハマータウンの野郎ども』 100分 ちくま学 坂口恭平『現実脱出論

増補版』
ちくま文庫

d e名著 2020

若者は労働社会の現場に学ぶ。教科書のない生活者たちの

興味深い。独学は評価を求めてはならない。反学校文化の

い」のコーナーに、一つの透視力を見出した。この選択は

世界だ。共感するところは多いが、しかし、わたしは独学

ドゥルーズを読む

ドゥルーズはいう。たしかに人も星屑も由来は同じだと人

口に膾炙される。この場所と、ドゥルーズの機械状論が、

(音信不通 <u>76</u>

が止められないのではないか、という気すらする。 いるけれど何一つ理解できない。理解できないから読むの 去年の暮れあたりからドゥルーズを読んでいる。読んで

た。「うむ」という一言だったが諾(うべな)いと聞こえ なことが夢のまた夢、と思えるからでしょうか?」と答え いのになぜ読むの?」と聞かれた。「年を経てきていろん そんな話をいつもの禅僧のMさんにしたら、「分からな

ようやく自分に追いついてきた。

どこから来てどこへ行くのだろうと思いはじめると、少し プルな見え方の方が心に馴染む。でもふと何かが失速し、 いうか、生きている事の現在形の中にあるときには、シン わかる事よりわからない事の方に心が惹かれる。日常と

ろう。ここ二年余の新型コロナ禍の閉塞と関係あるだろう だろうか。この言葉は自分の観念のアイコンのようなもの 分の変化だった。そして、命には限りがあるという観念が、 か。いろんなことを停止(エポケー)した。自ずからの気 ブセッションは「欲望」の別名なのだと思い到るようにな かぎりなく接近するところだろうか。 った。分からない方がいいと思うようになったのはなぜだ で、反復して用い続けてきている。今年に入って、このオ 分からないことが魅力、これもいつものオブセッション

が、なんとなくある。読解して分かるのでなく、読解して 造成だと思う。 りは、変だといえば確かに変だ。ところで何が理解できな いのだろう。ドゥルーズの特異性は、頻出する概念の新語 分からないということを共有してみたい。否定したいのは できないということを、人と共有してみたいという気持ち 「同一性」なのだが、共有して共有を否定するという遠回 ドゥルーズを読む、でも何一つ理解できない。この理解

た。そのころはそれをロシアフォルマリズムの異化作用60 分からない方向へ傾斜していく経験は、過去にもあっ

微視的方向に拡張すれば量子力学的に広くしかし極微的 に底なしのものとなる。ここでは石も人間も同じものだと

める。巨視的方向に拡張すれば時空的・宇宙的に広がり、 様子が異なってくる。生きている場の枠組みが拡張しはじ

が、ある瞬間から見知らぬモノへと変貌する。ドゥルーズ ところにある。モノでなく概念が異化していくのだ。むろ という言葉で納得していた。知っていたと思っていたモノ 念が、しだいに未知らぬものへと墜落して行った。という んその前提には世界の墜落がある。「機械状」へ墜下する の新語造成の由縁は、それまで十分役割を果たしていた概

墜下した世界には大洪水の後のように、石塊が転がって

ドゥルーズの概念を解き放ち、世界を再創造する力はな いる。転がっているものはここでは概念だ。わたしには

の時空だけで十分なのではないかという気もする。『ドゥ ひょっとしたらドゥルーズの意義は、その概念の網の目 いくことはできる。

い。でも本屋なので、概念の代わりに、書物を積み上げて

て来るものだと信じている。

何らの結論もない。ただ読むだけだ。結論は外部からやっ

ら、全体が再現できるかは不透明だが、もともと「器官な はひょっとしたら『差異と反復』が好きなのかも知れない。 き身体」とはそういうものだったのかも知れない。わたし な本がある。コンテキストから切り離した概念の理解か ルーズキーワード』(せりか書房)という概念辞典のよう

> こともできる。社会そのものが病んでいるのだから、病者 を社会へ復帰させることは何の解決にもならないとする 垣根を大きく変更する点にも見られる。当事者問題も、そ のように新しい概念を挿入すれば、この垣根を反転させる 『ドゥルーズと狂気』(小泉義之)も興味を引かれる。 ドゥルーズを読む、というテーマの語りだが、ここには

こえ夏二の。こう「『しょう」(解す)用しなようご。 161野雅樹)がある。 反復は同一的ではない。 少しづつずれ 1-

て反復する。その「ずれ」の一瞬が一期一会なのだ。

ドゥルーズの世界が異化する根本は、多数者と少数者の

芳川泰久・ 堀千晶 ヴィクトル・ボリソヴィッチ・シクロフスキー 水野忠夫 訳 せりか書房 1994 『ドゥルーズキーワード89』せりか書房 『散文の理論』

ジル・ドゥルーズ 財津理 『差異と反復 山内志朗 2021 『ドゥルーズ内在性の形而上学』講談社選書メチエ 上下』河出文庫

小泉義之 『ドゥルーズと狂気』 『ドゥルーズを「活用」する!』彩流社 河出書房新社

だと語る人(山内志朗)もいて、心に染みる。この一点を 「このもの性」「此性」について、それは一期一会のこと

反復して論じた書物に『ドゥルーズを「活用」 する!』 (澤

よ? 」ということだった。確かに感動し心に流動化が起の季節で水面に桜並木が逆さまに映っていた。 「どう黄昏時にTさんに誘われ南詰から夜の川面を見た話だ。桜デン池」だった。定有堂は若桜橋北詰にあるのだが、或るデン池」の一回目に書いたのは、「定有堂のウォル『音信不通』の一回目に書いたのは、「定有堂のウォル

定住的な発想から外を求める発想へ。イメージ的にいえば

ノマド、ノマディズムだろうか。わたしはTさんの言葉を

へ落とし込んでいく。モル状を分子状へ、秩序を逸脱へ。

ドゥルーズはメタレベルのものをオブジェクト・レベル

す。そういえばTさんの著書に『形のない家族』という本七十六回書き続けて、あれは何だったのだろうと思い起ここり、変容する物語として「音信不通」の刊行が始まった。

があった。流動したものは「形のない方へ」という反復す

へイさんは十月に『出セイカツ記』を上梓した。ドゥルーわたしの心の中に同質のものが反復する。ワクサカソウりしてみた。からなかったので、ウォルデン池とかビオトープとか名のからないなのかもしれない。そのときは何と言っていいか分

ズも同じ十月から、岩田直樹さんの指導で読み解きを始め

- 10てワクサカさんは語り続ける。夢想の別名は「ふざけ62

一の救い。それは夢想だ。」p. 215 この「夢想」を反復『出セイカツ記』は結論に述べる。「我々に残された、唯

斜を「形のない方へ」と呼び慣わす。いる。自分の中で反復するものにしか関われない。この傾分かる事だけを自由に我田引水して、それで良しと決めてを作成して配布している。哲学の購読なのだ。わたしは、ている。岩田さんは一回目から、精妙な「ドゥルーズ資料」

ってしまう。結局分かる事だけしか分からない人なのだ。 カカソウヘイは騎乗で現れるわけではないが、走り抜けるように時折わたしに一声かけてすぐ消える。『出セイカツように時折わたしに一声かけてすぐ消える。『出セイカツように時折わたしに一声かけてすぐ消える。『出セイカツように時折わたしに一声かけではないが、走り抜けるたりの伝道師なので、きまじめに読む必要もないのだろうか、わたしは「学び系」なので、真剣に我田引水に切り取が、わたしは「学び系」なので、真剣に我田引水に切り取が、わたしは「学び系」なので、真剣に我田引水に切り取が、わたしは「学び系」なので、真剣に我田引水に切り取が、わたしは「学び系」なので、真剣に我田引水に切り取が、わたしは「学び系」なので、真剣に我田引水に切り取り、わたしは「学び系」なので、真剣に我田引水に切り取りてはないが、わたしは「学び系」なので、真剣に表しているのだ。

しまう。「個」をたくさん生成しながら走り抜ける。これが社会を破る話ではない。それならツリー状の話になってとは定形だ。「個」は「形」や「社会」に縛られる。「個」ツ記』は「セイカツ」から脱出していく話だ。「セイカツ」る力」だ。ドゥルーズのノマド=戦争機械だ。『出セイカ

ならリゾームの方向だ。

《「本当の自分」は、実は他者の数だけ複数存在すること

るわけで。》p.165 けで。そして「社会」の中にこそ、その他者は存在していけで。そして「社会」の中にこそ、その他者は存在しているかで個」って、実は他者に委ねて初めて生まれるものなわを許されているのではないだろうか。》p.164

《そう理解した瞬間、いままで敵に見えていた「社会」が、と一緒に生成していいのだ。》p.165めていいのだ。自分の欲求の有様は、外界にいる他者たちめていいのが。自分の欲求の自分」を探すことなど、あきら

《こうして(個を素っ裸にして=引用者補足)我々は新たな急におおらかな存在として目の前に広がった。》p.165《そう理解した瞬間、いままで敵に見えていた「社会」が、

す」と返ってくる。おともだちが多いのだ。そういえば新渡しながら「おともだちですか? 」と尋ねると「そうで『出セイカツ記』はリズミカルに売れている。レジで手

「個」をまたひとつ、召喚する。》p.166

刊予約も「おともだちの本屋です」とメモしたら満数配本

ワクサカさんの「ふざける力」には「強度」がある。本をから孵化した何かが未来のレイヤーとして出現している。「書店」から孵化した「本屋」だろう。しかし既に「本屋」をレイヤーを考えつづけてきた。例えて言えばわたしはとレイヤーを考えつづけてきた。例えて言えばわたしはとレイヤーを考えつづけてきた。例えて言えばわたしはとして出現している。

売る、そしてその原点は? とオリジナルに遡って考えて

いたら、すでにシミュラークルの時代に入っていたのかも

2022. 11. 16

岩田直樹「ドゥルーズ資料」定有堂書店HP掲載ワクサカソウヘイ『出セイカツ記』河出書房新社(2022.10.2徳永進)『形のない家族』 思想の科学社 1990

ワクサカソウヘイ 『ふざけるカ』 コア新書 2015

三砂慶明さんとの一夜 (音信不通 78)

時にホテルチェックイン。十九時から二十一時半まで読書に駅弁を購入。そのまま定有堂近くのカフェへ移動。十八四時に特急で鳥取駅着。改札口まで出迎え、構内で夕食用ゥルーズを読む会」に参加してくれた。十二月十五日の十大阪で「読書室」を主宰する三砂さんが、定有堂教室「ド

在のテーマは「読書」と「読書会」ということだった。読複数の書店人の仕事への意識を問う試みをしている。今現いを語り、『本屋という仕事』では編著者という立場で、三砂さんは『千年の読書』という著書で本と人との出会

会。その後気がつけば深夜二時半まで語り合っていた。

深い選書だ。読んで参加することを条件にしていない緩い題本を選んでいる。時々の社会思潮を視野に入れた幅広くいている。九年後に講師が亡くなり現在は岩田直樹氏が課定有堂教室「読む会」は一九八八年に始まり三十五年続書会の現場を体験するという目的の訪問だった。

が売く。いを求める人が増えたせいもあり、春から秋にかけて休会いを求める人が増えたせいもあり、春から秋にかけて休会のできる問題を取り上げているからだ。コロナ禍でふれあ

読書会でもある。選ばれたテーマ自体が誰でも関わること

ーズを読む会」だった。
一ズを読む会」だった。
こ砂さんが参加したのはこの少数の集まりの「ドゥル樹さんを中心に縮小版の読書会を十月から隔月で開始した、哲学者のドゥルーズに挑んでみることにした。岩田直という危機感もあり、発想を変えて関心は狭いが密度の濃という危機感もあり、発想を変えて関心は狭いが密度の濃し方、コロナ後を見据えて読書の体力を養っておかねば

読書の体験についてきちんと考えたことはなかった。 会の終了後、駅弁をいただきながら、三砂さんと語り合 会の終了後、駅弁をいただきながら、三砂さんは「読書」と「読書会」から始まるものを熱意を持る。その「可能性の魔」がテスト氏であり三砂さんだ。三る。その「可能性の魔」がテスト氏であり三砂さんだ。三分さんは「読書」と「読書会」から始まるものを熱意を持めさんは「読書」と「読書会」から始まるものを熱意を持つて語る。ここからなにかが始まっていいはずだし、現にかざんは「読書」と「読書会」から始まるものを熱意を持つて語る。ここからなにかが始まっていいはずだし、現にかさんは「読書」と「読書会」から始まるものを熱意を持つつあるようだ。「読む会」は三十五年続いているので、かたしは人の集まる場そのものに満足しているので、対しているがある。

に勧めるが、読むのは読んだ人に勧められてからだ。そこ読むのは数歩遅れるのがわたしの習性だった。仕入れて人は読んでいなかった。読者より半歩先んじて仕入れるが、よと教えてくれた。店頭では十冊ほど売れていたがわたし

ちだった。すごい強度の読書会だと思った。著者も「ポケットに石を詰めこんで入水した」ような人たて読書会があったから」と語られていた。取り上げられる

三砂さんは「読む会」はフィクションは読まないんです

では「人を殺さずにいられたのは、本があったから、そし

問に思ったことがない。なぜだろう? 店頭でも小説はあん岩田直樹さんが選書するのだが、いままで一度も誰も疑か? と尋ねた。そういえば読んだことは少ない。もちろ

まり重視していない。 関係あるのだろうか?

三砂慶明

った流れから、山内志朗『目的なき人生を生きる』を選ん村佳哲『自分の仕事をつくる』だった。今回は一日語り合

かれた。前回訪問の時は高村友也『スモールハウス』や西

「なにかオススメの本がありますか? 」と三砂さんに聞

るのは個物ではなく、それらを取りまとめた「種」とい《〈私〉とは個物だから、個物に定義はない。定義があだ。どこまでも結論のない不思議な本だ。

う一般的な事物に対してなのだ。》

肯定する思想だと思う。わたしのドゥルーズへの関心もこ形態において対象を持たない」という主張なのだ。欲望を中に目的はない」「目的が後から現れる」「欲望は原初-16個には概念規定がない。 だから目的もない。 「形相の5-

意気込みは、きっと人を動かすだろう。 るはずがない、という三砂さんのこの可能性の魔にかける当は対象を持っていない。でも、本抜きで人生が幕を開け本を読むという三砂さんの欲望は、原初形態において本

の場所から始まった。

『千年の読書』 誠文堂新光社 2022

山内志朗 『目的なき人生を生きる』 角川新書 2018 西村佳哲 『自分の仕事をつくる』 ちくま文庫 2009高村友也 『スモールハウス』 ちくま文庫 2018 高村友也 『スモールハウス』 ちくま文庫 2018 三砂慶明 『本屋という仕事』 世界思想社 2022 三砂慶明 『本屋という仕事』 世界思想社 2022

沫雪に

寄せて (音信不通 79

新年にこんな「うた」を教わった。

《 淡雪の中に顕 (た) ちたる三千大千世界(みちおほち) ま

たその中に沫雪ぞ降る》

この「うた」の正確な鑑賞はできないが、入れ子構造に

界、そして沫雪の降る「本屋」空間、という風につい連想 外界を見ている点に興味を持った。淡雪の降る「日常」世

が、「本屋」をそのようなものと思えば、「本屋」はその うに見ていると知れる。入れ子構造に世界を見ている人 入れ子構造に世界を感じる人が「うた」を詠めば、そのよ してしまった。「本屋」はそのように異空間なのだろうか?

ようなものとなる。 なにかの本の中の記憶だったのだろうかと思うが定かで に一夜にして都市が生まれ、その後また一夜にして砂塵に かえる。これが自分の沫雪だった。乱読していた頃なので、 本屋を始めるとき、あるイメージがあった。広大な砂漠

> 違う。違うけど茫漠としたところは似ている。 も思うが、あれは悪いことをして罰された話なので、少し

ない。稲垣足穂の『一千一秒物語』の「黄漠奇聞」かなと

ふとある小説の中の人物の一言がこころに蘇って来た。

のゆがみがここにある。 れも「沫雪」だと思う。生き急ぐ実存の時間の流れと空間 ラードフのセリフだ。学生の頃クラスのある男が一週間以 フスキーを読み浸っているらしい」という噂が流れた。こ 上姿を見せなかったことがある。「どうも下宿でドストエ いう執拗な声だった。ドストエフスキーの作中人物マルメ 「人はどこかに行かなければならないんだ、どこかに」と

うではないのかも知れないと思いはじめた。 常の世界を反映しようとして日々努力している。「淡雪」 界と日常の世界はつながっているのだろうか。品揃えは日 と「沫雪」というイメージの重なりを知ったとき、ふとそ どこにも行き所を見いだせず本屋を仕事とする。本の世

だ、と気づくところにある」と説明する。道中図で人が したことがある。 「相国寺に伝わる宗達様式の六曲一双に 「蔦の細道図屛風」というのがある」という書き出しで、 「趣向のありどころは、この平面が、左右でつながる風景 『音信不通』13 号に「閉じる物語」というタイトルで記

歩いている。平面がエンドレスにつながるのでこれも「沫166

雪」の世界。閉じた空間が好きなのだ。

と思い込もうとするが、やはり少し違うのだと思う。 本屋は閉じた空間だと思う。「淡雪」とつながっている

「どこかに行かなければならない」、もっと遠くへという 本屋を始める前の「淡雪」の日常は乱読の時代だった。

思いだった。購読会で「ルソー研究」をやっていた関係で、

というのがルソーの魂だった。そこを踏まえたスタロバン スキーの『ルソー透明と障害』という本は秀抜だった。地 ルソーの『言語起源論』にも興味を持ち始めた。「自然へ」

なものは内側にあるのだ。そうこうしているとルソー批判 落とすと美しい彫像だった、という話だったと思う。大事 中海から貝殻に覆われた醜い塊が引き上げられる。貝殻を でもある、デリダの『根源の彼方に』という書物に出会っ

た。棚構成としての「暮らし」とそこには定形はいらない のだということを主張している内に、ふと思いついて「ド 論はもう必要のないものだった。それから四十二年が過ぎ ぐるりと一回りしたところで本屋を始めたので、その議

ゥルーズを読む会」とそれに対応してドゥルーズ・コーナ

た。

た。大事なものは内側にはなく表層にあるという話だっ

へ行きつづける」必要もないと思った。

みしめること少なく、「沫雪」の世界に遊びつづけた四十 局「蔦の細道図屛風」の世界だった。「淡雪」の日常を踏

二年だった。本屋が必ずしも「沫雪」の世界だというわけ

かなければ…」という焦燥につり合った、日常とはひとつ ではないが、少なくともわたしにおいては、「どこかに行

違った「沫雪」であった。

2023.01.09

稲垣足穂『一千一秒物語 改版』新潮文庫

ジャン・スタロバンスキー 『ルソー透明と障害』 みすず書房

ドストエフスキー『罪と罰 上中下』岩波文庫

ルソ―『言語起源論』現代思潮新社

デリダ『根源の彼方に 上下』現代思潮新社 1972

ダも再び手にしたがやはり理解できない。でももう「遠く ーができた。ドゥルーズ論は五十冊ほど目を通した。デリ